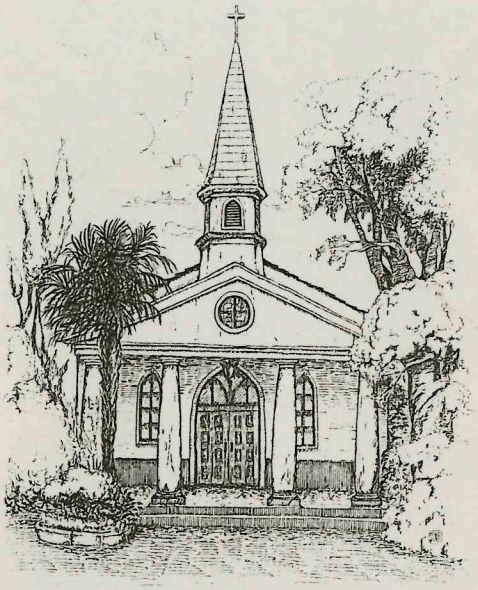
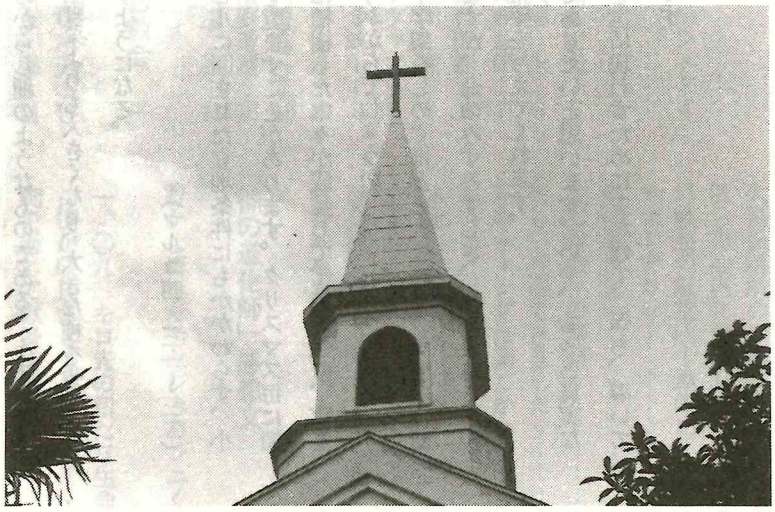
献堂四十周年記念誌



日本バプテスト仙台基督教会



神の国は…一粒のからし種のようなものである。…まかれると、成長してどんな野菜よりも大きくなり、大きな枝を張り、その陰に空の鳥を宿すようになる。

（マルコ四・三一～三二）

都会の中心部のビルに囲まれた立地条件にもかかわらず、小鳥のさえずりに目を覚ますことがあります。クリスマス毎に植えた樅の木や折々に植樹した木々が成長して、枝を張り、実を結んで小鳥たちを呼ぶからでしょうか。

教会堂の尖塔や十字架をしのぐほどに大きくなった樹木は剪定を必要としていますが、命のみずみずしさ、たくましさを現わして、安らぎや希望を与えてくれます。

仙台教会もそうでありたいと思います。いや、もっと真実な意味で永遠の生命を世に現わすために主が建て、保ち、導いてくださっているのです。

S・B・D	日本バプテスト仙台基督教会	仙台市青葉区木町通2-1-5	☎233-3550	牧師 金子純雄
			☎261-9354	協力牧師 B.オデール
			☎279-0532	協力牧師 小林孝男
	仙台教会大富伝道所	黒川郡富谷町日吉台2-1-5	☎358-0930	牧師 T.ウッズ
	南光台キリスト教会	仙台市泉区南光台5-5-5	☎271-8371	牧師 濱野道雄
	仙台北バプテスト教会	〃 泉区長命ヶ丘3-2-1	☎378-1263	牧師 河野宏一
	仙台北教会吉岡伝道所	大和町吉岡天皇寺34	☎345-2841	牧師 L.ミラー

S.B.D（仙台バプテスト伝道協議会）

献堂40周年記念誌　日本バプテスト仙台基督教会　発行／1995年3月26日

表紙／題字・荘子聡子姉　絵・神島朋子姉

【仙台教会献堂40周年記念委員会】

向井田洋　金子洋子　吉永慶子　奥田友子　小林啓子
石垣慶子　川股真理　渡辺義人　神島朋子

献堂四十周年記念誌目次

希望をもって祝う……金子純雄…1
四十年を心に刻んで……金子純雄…2

お祝いの言葉

深い愛を込めて……ワース&キャシイ・グラント…4
忍耐・信仰・祈り……ベティ&ボブ・ボートライト…4
仙台教会草創時代の思い出……関谷定夫…5
四十年への思い……大沼　上…6
わがふるさとのような仙台教会……天野五郎…7
母のような母教会……野口直樹…8
起こされた伝道者の一人として……庄司　眞…8
街の灯台として……トニーウッズ…9
英語礼拝を通して世界へ……ラリー・ミラー…9
サーチライトクラブ……ボブ・オデール…10
四十周年おめでとうございます……河野宏一…10
仙台教会四十周年に寄せて……濱野道雄…10
教会設立四十周年を祝って……奥田　稔…11

思い出の仙台教会・明日の仙台教会

仙台教会と私……小林孝男…11
新生運動の頃……吉永　馨…11
御名を伝えん　ハレルヤ……金子洋子…12
二十一世紀に向けて、祈りつつ歩み出そう……西村光子…12
恵まれたときを感謝して……早坂とし子…13
思い出……菅原あや子…13
社会と共に生きる教会……八巻正之…14
オリーブの会の発足について……佐原玲子…14
だから大人は信じられない……向井田洋…15

大富伝道所から

大富伝道所の半年を顧みて……伊東信吉…16
我らの心内に燃えしならずや……菊田弘子…17
母教会の献堂四十周年に……伊東信吉…18
チャーチカレー……伊東公美子…18
捧げる言葉……瀬上克之…18
大富教会への移籍……迫久美子…18
新しい友達できました……大山千尋…19
夏のキャンプは楽しかった……大山耕平…19

神学生の献身

献身決意書……草島　豊…20
献身決意表明……佐原玲子…21

「神の道化師」感想文

むかし青年だったジョバンニくんへ……石垣政裕…23
一、〇九二キロ先の新たな生命……石垣慶子…24
神様が成長させて下さる……一瀬千恵子…24
劇を通して献身を知る……山口信義…24
目頭が熱くなった……長尾　純…24
仲間が本当に誇らしい……田中　緑…24
言葉の壁を越えて語りかけた……トレイシー・ジョーンズ…25
神様のイタズラはステキ……秋葉真紀子…25
東京からの伝道チームが発端……渡辺義人…25
公演は神様のご計画……北川寛之…25
心をひとつに演じる……小松譲治…26
すべての賜物を神様に……小松真理子…26
すべてが神様の恵み……佐藤俊彦…26
献身を支える小さな献身……関場弓枝…26
全国の人に自慢できる……金子まきこ…26
今だから出来る、今しか出来ない……早坂いずみ…27
神学部入試の心の整理……草島　豊…27
我々のガリラヤは……竹之内裕文…27

「私の応答」

救いを見る……早坂とし子…29
新しく造られた者……小松譲治…29
逃げるよりも早く……小林啓子…29
賜物を頂いているのだから……一瀬千恵子…30
産みの苦しみと喜びに生きる……石垣慶子…30
御霊で始めたのに……成田磨理子…30
イエス・キリストの系図……内野正子…31
キリストにある自由……中山ちえみ…31
信仰によって生きる……広島憲子…31
この人を見よ……五枚橋裕…31
私をきわめる方……中目成子…32
目標をめざして……荘子聡子…32
主の十字架を仰ぎ見て……向井田洋…32
復活の主に会う場所……金子まきこ…33
外で主に出会う……金子洋子…33
罪人を招くために……中山晴久…33
自分を愛するように……奥田友子…33
営所の外に出て……副島京子…34

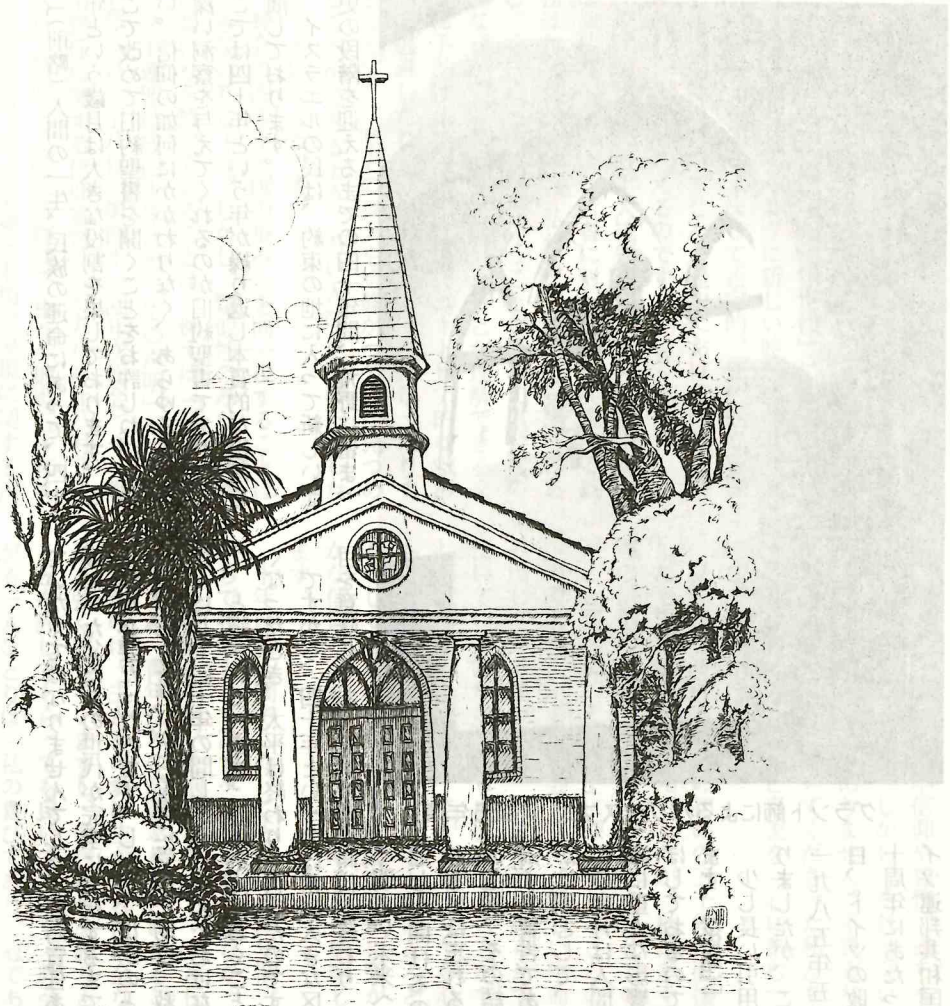
愛のうちを歩きなさい……秋葉真紀子…34
隣人の飢えを満たす……久保今日子…34
多くの証人に囲まれて……北川喜代子…34
草は枯れ花は散るとも……金子まきこ…34
私たちの力の源……佐藤儀明…35
生命の尊厳を見つめて……木下由美子…35
空の鳥、野の花……今井　豊…35
キリストの十字架を誇りとする……佐藤哲雄…36
あなたがたの手で……向井田のぞみ…36
自分のことばかりでなく……竹之内裕文…36
希望を抱かせる……小松譲治…36
誰が人に口を授けたのか……木皿陽子…37
私は主である……佐藤善人…37
過越の犠牲……渡辺義人…37
主にむかって歌え……早坂いずみ…37
親切に……荒井喜代子…38
私たちのシャローム……五枚橋豊…38
御霊で始めたのに……佐原玲子…38
イエスのバプテスマ……横山理香…38
収穫の主に願って……北川静雄…39
御霊によって歩む……今井　豊…39
晩餐会への招き……関場弓枝…39
英雄サムソン……馬場耕一…39
キリストの福音にふさわしく……神山節子…39
招かれた者……渡辺敏郎…40
お言葉ですから……笠井　均…40
幼な子のように……久保今日子…40
ミッション―北と南の間で……佐藤哲雄…40
福音宣教に加わった教会……向井田洋…41
約束の地……木皿陽子…41
花婿を迎える準備……山路節子…41
キリストが形ができるまで……八巻正之…41
平和を造り出す人々……佐藤美鈴…42

献堂十周年記念誌復刻版

献堂十周年によせて……ワース・C・グラント…43
献堂十年に思う……天野五郎…43
十年の歩み……編集部…44
吉岡伝道所……阿部利吉…45
献堂十周年によせて……関谷定夫…45
献堂十周年によせて……副田正義…46
献堂十周年によせて……大沼　上…46
献堂十周年によせて……福田昌治…46
献堂十周年によせて……横谷政孝…47
献堂十周年によせて……大阪鷹司…47
献堂十周年によせて……河本隆夫…47
献堂十周年によせて……大槻国彦…47
十周年を迎え、当時をしのびて……荘子聡子…48
あかし……吉永　馨…48
あかし……須藤泰子…48
あかし……松谷東一郎…49
吉岡伝道所から……鎌田栄子…50
CS中学科について……沢田孝子…50
旧CS中学科……安井洋子…50
カルバリ会……小林　満…51
青年会の現状……松谷東一郎…51
昔の婦人会……荘子聡子…51
今の婦人会……石田由紀子…52
成人会……高島正男…52
幼稚園……戸波なつ…52
小羊会……石田由紀子…53
礼　拝……吉永　馨…53
祈祷会……岩崎みわ子…54
早天祈祷会……渡辺正好…54
夕　拝……鎌田栄子…54
バプテスマについて……堀米とし子…55
結婚式について……熊谷雄介…55
クリスマスの思い出……菊田瑠美子…55
キャロリング……安井洋子…56
修養会……鈴谷輝明…56
ピクニックの思い出……鈴木京子…57
プリフィール
グラント師……編集部…57
ボートライト師……阿部　忠…57
関谷定夫師……安井洋子…58
大沼上師……石田信二…58
天野五郎師……齋藤民子…58
年会の思い出……中目源太郎…59
大食会……茂木孝夫…59
ラーメン会のこと……杉山久是…59
新生運動について……渡辺淳一…60
教会に思う……古野幸子…60
教会に思う……山田澄子…61
仙台第二バプテスト教会……天野五郎…61
ひとこと……吉永慶子…61
ひとこと……加藤亮子…61
ひとこと……高島友子…61
編集後記……天野五郎…62
カルバリ会設立にあたって……関谷定夫…63

教会設立三十五周年から

幼稚園と教会の思い出の数々……荘子聡子…63
試　練……伊藤　昇…63
資料・大富伝道所解説経過……65
仙台バプテスト教会の沿革……66
記念讃美歌……68



イエス・キリストは、きのうも、きょうも、いつまでも変わることがない。

（ヘブル一三・八）

希望をもって祝う

四十年の歳月は教会の周囲の状況をすっかり変えてしまいました。遠くから望見できたという白い尖塔の教会堂も今や林立するビルの谷間に包まれています。

教会に集まる人々の姿も昔日の通りではありません。時代も大きく変わりました。しかし、決して変わらないものがあります。キリストの十字架に表された神の愛と真実こそ、変わりゆく世界の、変わらない希望です。

私たちは十字架を高く掲げてイエス・キリストとその恵みを語り続けます。その希望を持って四十周年を祝いたいと願っています。

仙台教会牧師　金　子　純　雄

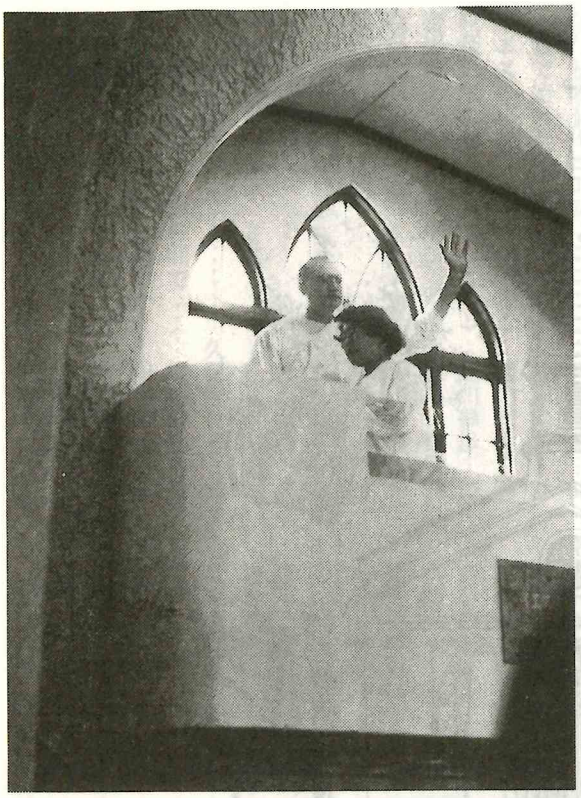
四十年を心に刻んで

仙台教会牧師　金子純雄

「（前略）人間の一生、民族の運命にあって、四十年という歳月は大きな役割を果しております。ここで改めて旧約聖書を開くことをお許しねがいたい。信仰の如何にかかわりなく、あらゆる人間に深い洞察を与えてくれるのが旧約聖書であり、ここでは四十年という年が繰り返し本質的な役割を演じております。

イスラエルの民は、約束の地に入って新しい歴史の段階を迎えるまでの四十年間、荒野に留まっていなくてはなりませんでした。当時責任ある立場にいた父たちの世代が完全に交代するまでに四十年が必要だったのです。しかし、ほかのところ（士師記）には、かつて身に受けた助け、救いは往々にして四十年の間しか心に刻んでおけなかった、と記されています。心に刻んでおくことがなくなったとき、太平は終わりを告げたのです。

ですから、四十年というのは常に大きな区切り目を意味しております。暗い時代が終わり、新しく明るい未来への見通しが開けるのか、あるいは忘れることの危険、その結果に対する警告であるのかは別として、四十年の歳月は人間の意識に重大な影響を及ぼしておるのであります。（後略）」



グラント師によるバプテスマ式（1955年頃）

少し長い引用になりましたが、これは一九八五年五月八日、ドイツの敗戦四十周年にあたってドイツ連邦共和国（西ドイツ）のR・フォン・ヴァイツゼッカー大統領が連邦議会で行った演説の一部分です（岩波ブックレット「荒れ野の四十年」より）。ドイツの戦争責任を率直に告白し、五月八日をドイツ国民が「心に刻むための日」と語って、和解への務めを訴えたその演説は、高い倫理性と宗教性をもって激しく心に迫るものがあります。仙台教会の設立四十周年記念にあたってこの「荒れ野の四十年」を思い起こしたのは、まずは「なぜ四十年なのか」ということが実に見事に語られていると思ったからであり、次に「心に刻む」ということの意味を考えずにはおれなかったからです。

四十年が世代の交代や歴史の大きな区切り目ということも含めて、極めて聖書的な根拠を有するということは、もはや繰り返すまでもないでしょう。関谷定夫先生が福岡教会を辞して仙台に赴任されたのは、私が同教会の推薦を受けて神学部で学んでいた頃でした。「遠い所に行かれる」という印象でした。大沼上先生は神学部では私の一年先輩で、卒業と同時に関谷先生と交代するような形で仙台に赴かれました。私が牧師になって北九州の小倉にいた頃、同先生は仙台から八幡に移ってこられ、仙台には天野五郎先生が福島から赴任しておられます。天野先生の令弟（平塚教会・天野和男牧師）は神学部のクラスメイトでした。仙台での開拓伝道に当たられたグラント先生やその後を担ってくださったボートライト先生は既に宣教師を引退され、関谷、大沼、天野先生も引退を目前にしておられます。このように親しい、また敬愛する先輩諸先生の跡を引き継がせていただいたことは大変光栄なことですし、仙台教会の牧師として過ごすことができたこの十年間を私は心か

ら感謝しています。

しかし、これらの諸先輩よりいくらか年も若く、今しばらくの時が許されているとは思いますが、私もこれまでの「四十年世代」に属する者であり、若い人たちのように新しい時を刻むことは出来ないでしょう。決して否定的、悲観的な意味で言うのではありません。歴史における役割と継承ということを考えるのです。

ヴァイツゼッカー大統領の言葉を再度引用すれば「私たち年長者は若者に対し、夢を実現する義務は負っていない。私たちの義務は誠実さである。心に刻みつけるということが極めて重要なのはなぜか、このことを若い人びとが理解できるように手助けせねばならない。ユートピア的な救済論に逃避したり、道徳的に傲慢不遜になったりすることなく、歴史の真実を冷静かつ公平に見つめることができるよう、若い人びとの助力をしたい」ということです。

教会の四十年と国の歩みとを同一視することはできないでしょう。しかし、類似性のみならず深い関わりを持っていることは、例えば「日本バプテスト連盟結成四十年に当っての声明」（一九八七年八月二十八日、第四十一回年次総会）や「戦争責任に関する信仰宣言」（一九八八年八月二十六日、第四十二回年次総会）、また「敗戦五十年を迎えるに当っての正義と平和の実現に関する声明」（一九九四年十一月十八日、第四十五回定期総会）などによっても明らかです。

私たちはこれまでの歩みの中から、教会で自分の信仰がどのように養い育てられたかということと同時に、この社会に生起するさまざまな問題に対してどのように関わり、責任を担おうとしてきたかを尋ね、私たちの不信仰や怠惰、過ちを「心に刻む」べきでしょう。しかし、それは互いの罪をあげつらうためではありません。不真実な者をなお心に留め、顧み導いてくださった私たちの主イエス・キリストの愛と真実を「心に刻む」ためです。

私にとって仙台教会の初めの三十年は直接体験したものではありませんでしたが、私は多くの先達の信仰の働きと愛の労苦の結実を見せていただくとと同時に、それ以上に深く変わることのない主の愛と真実がこの教会を支え、新しい生命を生み出している事実を見、共に福音に与らせていただいている温かな交わりを実感することができました。「東北は寒いぞ」という友人たちの心配にもかかわらず、寒さを感じることがほとんどなく過ごして来れたのは、仙台教会やそれに繋がる温かな信仰の交わりがあったからこそと感謝しています。

十年は瞬く間でした。ことにこの四年間、留守がちで牧師として為すべき務めができなかったことへの忸怩たる思いを抱きながらも、大富伝道所が生まれ、青年たちの活躍ぶりを目にすることができたのは、主とその愛に生かされた教会ならではと強く感じていますし、仙台教会を誇りとすることを許してもらっても良いでしょう。教会に繋がる一人ひとりは「私の喜びであり、冠である愛する者たち」（ピリピ四章一節）です。

私は、四十年を回顧し、現在の心境を語ろうとしているのではありません。多くの感謝はありますが、何よりもこれからの教会を担い新しい歴史を築く人々に、仙台教会の歩みを「心に刻み」、教会形成の次のステージに向かうことを呼びかけたいのです。教会形成という時に、それは自分たちにとって単に住み心地の良い場所をいうのではなく、疎外されている人たちや多くの弱さを身にまとっている人々が安心して憩えると同時に、そこで新たな力を得て、和解の福音を携えて世に送り出されていくこと、生きたキリストのからだとして整えられることを意味します。次のステージはこれまでとは違ったものがあるはずです。

四十周年記念礼拝を最後の主日に迎える九四年度の教会年間主題「『外』で主に出会う」が示しているように、少なくともこれまでよりももっと教会や自分の「外」に心を向け、内を整える以上の熱心さをもって他者に関わって行くものであってほしい思います。

そのような働きを担うのは誰でしょうか。夢を実現するのは若い世代でしょう。しかし、私たちも一緒にあたかもそれが実現したかのように夢を見ることはできますし、実現を担う次代の人々に「心に刻み続ける」べきものを語らねばなりません。「心に刻む」とは過去を懐かしみ、過去に縛られることではないはずです。むしろ、過去のさまざまなしがらみから自由にされ、「後のものを忘れ、前のものに向かってからだを伸ばしつつ、目標を目指して走る」（ピリピ三章一四節）ことを可能にさせるものだと思います。

「信仰の導き手であり、またその完成者であるイエスを仰ぎ見つつ走ろうではないか」（ヘブル一二章二節）。この十年間、バプテスマを受けた方々が教会からのお祝いとして受け取られた色紙に、荘子聡子姉がこの聖句を書き続けてくださいました。私たちもこのみ言葉に励まされ、導かれて新しい時に向かおうではありませんか。

献堂四十周年に寄せて

深い愛をこめて

ワース&キャシイ・グラント

愛する金子先生と仙台バプテスト教会の皆さんへ。

御名を讃美致します。設立四十年を迎えております。心から感謝して、おめでとうございます！神様をほめたたえます！

サムエル記上七・一二に書いてあるように、「主は今に至るまでわれわれを助けられた」。アーメン！ 主の導きと力と豊かな恵みを与えて下さいました。四十年の間、大勢の魂が信仰に導かれて、イエスの弟子となりましたことは神のみわざです！

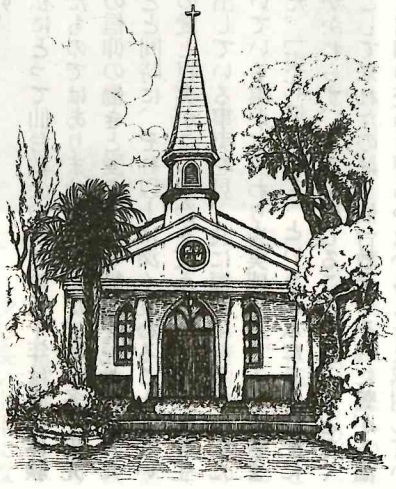
最初の数年の間、私と家内は関谷先生、大沼先生と一緒に働きました。これは尊い経験でした！この後、天野先生とボートライト先生はもっともっと素晴らしいご奉仕をなさいました。とくに、今の金子先生の指導とご苦労によって、仙台教会はバプテスト連盟の模範的な教会となりました。

私たちは日々、皆さんのために祈ります。「わたしはあなたがたを思うたびごとに、わたしの神に感謝し、あなたがた一同のために祈るとき、いつも喜びをもって祈り、あなたがたが最初の日から今日に至るまで、福音にあずかっていることを感謝している。そして、あなたがたのうちに良いわざを始められたかたが、キリスト・イエスの日までにそれを完成して下さるにちがいないと、確信している」。ピリピ人への手紙一章三～六節

愛する皆さん、あなたがたは私の心に深く刻まれています！

どうぞ、これからも前と同じように仙台の街の大勢の魂に対して真実に、信仰をもって福音を伝えてください。

（フロリダ・ウエストパームビーチ在住）



忍耐・信仰・祈り

ノークロス第一バプテスト日本人教会牧師

ベティ&ボブ・ボートライト

仙台バプテスト教会の四十周年記念日おめでとうございます。この教会の歴史を考えると心は感謝で一杯になります。一九六〇年に東京から仙台に引っ越しました時、仙台教会が出来た年でした。その時と今と比べて、教会の影響が大きくなっており驚きます。仙台教会は立派な大人になりました。初めの頃、教会員は学生が多いでした。後で、彼らは結婚して子どもを産みました。その子どもも大人になって、結婚しました。その家族に教会は強い影響を与えました。

この成長を見ると、聖書のゼカリヤを思い出します。彼は「小さい事の日をいやしめた者」について話しました（四・一〇）。仙台に行った時に、教会は小さな者でしたが忍耐がありましたので成長がありました。私も若く、経験も足りなかったから何もできませんでした。私たちは仙台教会で多くのものを学びましたので、仙台教会は私たちの学校、私たちの先生と言えます。感謝です。沢山の方々が私たちに対して大変親切で、忍耐を持ってくださいました。多くの間違いをしましたので、今それを考えると恥ずかしいと感じます。教会員は、いつもよくお世話をしてくださいました。感謝です。私たちの長女は仙台教会でバプテスマを受けました。いつまでもそれを覚えているでしょう。

一九六三年に新生運動が行われました。その日々は面白くて、私たちは興奮しました。教会はまだ若いし、経験はなくても、大きな予算を取り扱いました。新生運動を準備している最中に、教

会は無牧になりました。大変でした。一生の中でストレスの一番多い時はその時でした。それでも私たちはよく勉強しました。教会は成長しました。人々は救われました。今、その日々を思い返すと、神様が私たちを守って導いてくださいましたことが分かります。このことをその時に分かっていたら、もっと楽だったでしょう。

なぜ、仙台教会は成長したのでしょうか。これからどのように成長することが出来るでしょうか。重要なのは忍耐です。大きな樫は元はどんぐりでしたが、大きくなるのに時間がかかりました。教会も同じだと思います。もう一つ重要なのは信仰です。私たちは神様のみ心に従う時のみ、信仰を持つことが出来ます。ゼカリヤはまた言いました。「権勢によらず、能力によらず、わたしの霊によるのである」（四・六）。万軍の主は仰せになりました。神様に従う信仰が必要です。もう一つの必要は祈りです。仙台教会の中に、よく祈ることが出来る方々がおられるのを知っています。その方々がおられるので成長があります。将来も成長があるでしょう。

仙台教会草創時代の思い出

～荒野の四十年をすぎて～

西南学院大学神学部教授
関谷定夫

今年は小生古稀を迎え、前後四十年奉職した西南学院とその神学部での最後の年となりました。西南の神学部を昭和二十七年（一九五二年）に卒業してすぐ福岡バプテスト教会の牧師となってから今日まで四十三年間、幾多の教会の牧職を歴任して来ました。中でも一番思い出の深いのが最初の開拓伝道に従事した仙台教会時代です。昭和二十九年（一九五四年）に西南学院大学助手と、兼任していた福岡教会の牧師を辞し、心機一転して研究生活から伝道一本槍で行こうと決意し、当時連盟支援による開拓二年目に長崎牧師が辞任したあとを受けて、仙台伝道所に赴任することになりました。新妻を携えての赴任でしたが、宣教師のグラント先生夫妻は大変喜んで随分親切にしてくださいました。初めは北鍛冶町の長屋の一室を借りての生活でした。トイレが屋外の畑の中にあり、今にも壊れそうな掘立小屋だったので、いつもこわごわ足元には十分注意しなければなりませんでした。特に雨の日には大変でした。また部屋の畳がでこぼこで、一度何かのひょうしで本棚が倒れ、書物がばらばら部屋中に散乱したことがありました。

そうした不便な生活でしたが、やがて教会の建築が始まり、現場監督の大西忠重氏は若い人でしたが、熱心なクリスチャンで、設計者のグラント先生と時々大声でけんかまでしてよくやってくれ、週報作成の手伝いまでしてくれました。赴任して最初の説教は六月六日のペンテコステの日で「聖霊の威力とキリスト教会の起源」というテーマでした。グラント先生が造られた幼稚園のバラック園舎を使っての礼拝でしたが、二十名近くの出席でした。青年会長の大西康雄兄（現渋谷教会協力牧師）、バプテスマを受けたばかりの大槻兄（現粕屋教会牧師）がよい協力者でした。会計は中目兄、婦人会長は今もお元気な荘子さんで、皆、教会の未来への大きな希望と抱負に燃えていました。中目兄は翌一九五五年四月に小生の司式で成子夫人と結婚され、翌五六年二月に長女光子さんが生まれ、教会で献児式をしました。中目兄はすでに故人となられ残念です。

会堂は七月四日に定礎式をし、十一月に完成。そして記念特別伝道講演会を十一月七日から十二日まで行いました。講師は西南学院大学神学部長（当時は神学科長）三善敏夫先生、大阪バプテスト教会宣教師ギレスビー先生、音楽が旭川バプテスト伝道所宣教師のジャクソン先生で、それの映画までありました。この新会堂は当時周りに目立った建物はなく、十字架の尖塔の聳える白亜の殿堂の偉容は孤高然たるものがありました。小生はこの会堂をフルに使って、福音宣教のわざを押し進めることに全力をあげました。聖日は教会学校、礼拝、夕拝、その他の集会を実施し、若い人々のために「シオン会」（中学生）、「カルバリ会」（高校生）をつくり、大学生が多かったので、彼らのためには聖書研究会バイブル・クラスも設けました。これにはグラント先生のほかに進駐軍の兵士だったハワード、ティーグ両兄の献身的な協力を忘れることはできません。

日曜の夕拝は、聖書講座とキリスト教々理講座に力を入れ、最初の年は小生がガリ版で刷った手製のテキストを使って聖書概説をやり、二年目はヴィンセント・テーラー博士の「ドクトリン・アンド・エヴァンジェリズム」という本を訳しながら毎週一章ずつ講義しました。これは後にヨルダン社から「伝道者のための教理」として出版されました。これに序文を寄せられた河野貞幹先生は「訳者関谷君は昨年母校に帰るまで数年間開拓伝道に全力を尽くした篤学の伝道者であります。本書の価値をその実戦において体験したところから、確信をもって同信の友にこれを紹介する同君

の企てに、心からの賛意を表し、敢えて推薦する次第です」と書いてくださいました。

水曜日は祈祷会のほかに信仰訓練会を実施しました。若い人々を教育すること、教会の将来はこれら若い人々の双肩にかかっていることを確信し、小生はそこに大きな希望と幻を持っていました。「幻なき民は破滅する」と聖書は教えています（箴言二九・一八）。たしかに開拓伝道はつらいことが多くありました。特に妻は、急激な生活の変化、慣れない土地と仕事のために心身ともに健康を害し、死産と流産を繰り返し、その度に入院しなければなりませんでした。小生も無理がたたって盲目寸前まで目を患い、福岡に移ってからも十年以上通院してやっと視力が回復しました。

しかし、何といっても一番うれしかったのは、若い人々が次々にバプテスマを受けられたことです。小生は赴任した翌年の五五年三月一五日に教会組織、七月一日に按手礼を受けました。同年七月十日に飯倉（大学）かへで姉、九月四日に藤沢（旧姓太田）雅子姉と渡辺（旧姓斉藤）慶子姉が他の二名（渡辺たか、木村栄子各姉）と共に受浸し、現在その夫君である藤沢良和、渡辺真人両君は他の四名（岩淵、狩野、阿部、嶺岸各兄と共に翌五六年四月に同じく小生司式で受浸しました。いずれもカルバリ会出身同志で結ばれ、今も教会の中心メンバーとして活躍されており、その二世たちも教会のメンバーとして奉仕されているようで、こんなに嬉しいことはありません。五六年のクリスマスには十名以上の受浸者があり、バプテスマが終わってバプテストリーから上がった時には両脚が真赤に腫れ上がって凍傷寸前でした。

牧師の住居は北鍛冶町から完成した教会のバプテストリーの裏の六畳一間に移り、それが居間兼寝室だったので、小生はバプテストリーの更衣室を書斎（牧師室）に使っていました。四年目の冬にやっと堤通りに牧師館用の家付き土地を購入しましたが、家はがたがたの古い建物で水道もなかったので、毎朝近くにおられた会員の本宮さんのお宅に水をもらいにバケツを持って雪の中を何回も往復しました。これも忘れ得ない思い出です。十数年後に行ってみましたら、立派な牧師館が建っていました。しかし、楽しい思い出も数多くあり、懐かしい方々も数限りなくあり、今も当時の皆さんから賀状をいただき旧交をあたためさせていただいております。

一番困ったことは、グラント先生が一年間休暇で帰米された時、小生が園長代理をしましたが、それまでグラント先生個人の経営だったので、急に経営の資金が底をついてしまって、先生方の給与が保育料だけでは十分払うことができず、ベースアップの要求にも応じられなくなり、中に入った父母会の方々からも吊し上げにあったことです。しかし、それから十数年後、学会で仙台に行ったときには、幼稚園の卒業生と父母の方々が十数名も集まって下さって、その席上父母のひとりの方が、「あの時は先生を苦しめてすみませんでした」とおっしゃってくださったのには大変恐縮しました。園児の家にもしばしばお邪魔し、父母の方々とよい交わりをいただきました。

家内も皆さんから大変親切にしていただき、特に若い人々には姉のように親しくさせていただきました。小生は眼を患っていたので行けませんでしたが、札幌で少年少女修養会があった時、家内がリーダーになって、飯倉かへで、斉藤慶子、藤沢良和、嶺岸光哉、村口静江の各兄姉を連れて行きました。これらのあどけない少年少女たちが今はお孫さんを持つ年頃になられまことに感無量です。その他、カルバリ会、シオン会の皆さん、鈴木美樹、伊東義高、伊藤正樹、雨貝久恵、渡辺暢子などなどの各兄姉の顔が浮かんできます。坪内亮子姉は今は仙台から遠くなられましたが、同じメンバーで太田家と共に、家族ぐるみの親しい交わりをさせていただきました。シオン会の大村祐子、安井洋子のお二人は五五年十月の宗教改革記念礼拝の聖日にバプテスマを受けられました。青年会ではすでに市役所に勤めておられた桝沢兄、東北大学の正宗兄、樋口兄などの面々が毎日のように教会にたむろして議論に花を咲かせ、楽しかったです。石田さん夫妻は仙台北教会に移られたようですね。菊田さんも元気でよい働きをされているようで感謝です。

三年足らずの間に三十名以上の方々がバプテスマを受けられましたが、それらの方々を一日も忘れたことはありません。皆さんがそれぞれの場所で、備えられた道で、豊かな人生をエンジョイされていることを信じ、祈っています。

「主はわが牧者なり、われ乏しきことあらじ」（アドナイ・ローイー・ロー・エッサール）。皆様の主にあるご多幸を祈ります。また、仙台教会のうえに今も後もとこしえに豊かな主の祝福と恵がありますように祈ります。

四十年への思い

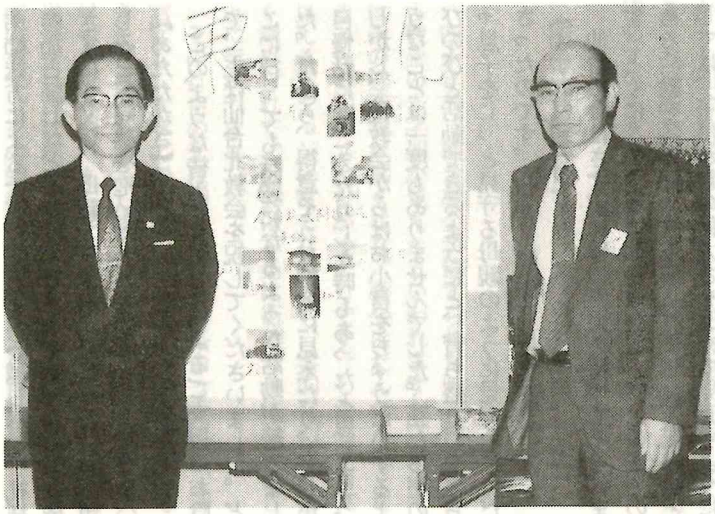
八幡バプテスト教会牧師　大沼　上

仙台教会設立四十周年のこの年は、敗戦五十周

年でもある。それを考えると、設立四十周年は恩寵の年月であると共に、かつての西独大統領ヴァイツゼッカーの演説「荒野の四十年」を思い起こさないではおれない。設立四十周年といえば、祝祭の時であり、発展をさらに神に希求し、待望するときである。しかし、福音はバプテスマのヨハネの悔い改めの告知以来、荒野が舞台であったし、それは今も変わってはいない。ヨハネは風にそよぐ葦の生えている荒野にいた。福音の主、イエス・キリストは罪人の荒野にいた。

この四十年はわが国が稀有の経済成長を果たしてきた年月である。コッペパン一個を買うのに頭をかかえるような生活から、自家用車を乗りまわして何の不思議もない時代になった。この現実は、そこに荒野を思い浮かべるにはむずかしく、ふさわしくないようにも見える。しかし、福音の宣教はつねに荒野に向けられる。ゆえに福音の宣教は何よりもまず、世がどのように荒野であるのかを、見抜かしめられるのでなければならないし、また見抜かしめられるであろう。そうでなければ、福音宣教を委ねられている教会もまた、そのわざの発展を資本主義経済の発展の様態と尺度を、そのままみわざの進展の様態、また尺度として無自覚に流されて行くこととなるであろう。

右記の憂いは、戦前のわが教会が天皇制軍国主義に、ほとんど無自覚的に埋没して行ったのと一脈通じる。一脈と言ったのは、一脈に過ぎないのであって、今日、教会を盲目にしようとしている人間生存の現実は、それとは比較することの出来ない根深さと広汎な領域を持っているからである。それは、今、全世界を（恐らくは終末的に）覆い尽くしている、西欧に端を発する、ひとつの文明がもつ支配性、律法性の問題である。その支配力と律法性は、今や思想も政治も超克し、人間が人間に向かって語る言葉を破壊し、被造物、地球全体を無限に破壊しつつありながら、なおそれを進歩・発展とする錯誤に人を酔いしれさせている。荒野とはこれである。教会はソドム・ゴモラの町とともに焔に包まれるべくあるのではない。カナンを目指す教会は、この荒野を越えわたらねばならず、また越えわたらしめられるであろう。教会の使命と希望はこれである。



全国支援拠点開拓伝道のために
野口直樹師が着任（一九八〇年）

わがふるさとのような仙台教会

蓮根バプテスト教会牧師　天野五郎

「日本バプテスト静岡キリスト教会『四十年の歩み』一九五一→一九九一」という記念誌に今度はじめて（本誌に寄稿するために）目を通しました。それは、そこで三年間牧師として働かせていただいたにもかかわらず、寄稿しなかった申し訳なさとおそれでページを繰ることができなかったのです―。

こんな記事がありました。「…天野五郎先生が着任。頭髪に注目。実り豊かに、ふさふさあったような、気がしますが？／噛んで含めるようなお話のなさり方は、おのが心に問い語り、聞く者をして、ある時は感動へ、ある時は哀しみへ、痛みへ、喜びへ。／にがい、苦しい、ながい祈りの先生の姿は、深く私の中に残っています…」。

その後、福島の開拓伝道に導かれて六年、後は仙台教会の沿革誌に見られるように一九六三年七月、御教会に招かれて牧会伝道の重任を担わせていただきました。それも数えてみれば二十一年、内容は年月によらないことは私の前任の先生方、そして特に金子牧師をお迎えしてからのこの十年の教会の働きを見聞きするとき頷かれるでしょう。

仙台在任期間の長さは、それだけ私に深いおそれを覚えさせ、単純に喜ばせないものがあります。が、それでも私ども夫婦にとって、それは実に楽しい、うれしい充実の日々でした。友として、共働者としてのボートライト先生、そのご家族とのお交わり、執事方にはまったく助けていただき、自由にのびのびと働かせていただきまし

た。教会員のお一人お一人を思い浮かべれば、もうこれは到底挙げきれるものではありません。年月のありがたさです。

礼拝、祈祷会、婦人聖研、特伝、研修会、結婚式も葬式も、みんな走馬灯のように見えてきます。そして、この業は終わることがない、ますます充実して行われているわけですね。

更に私事を加えますと、蓮根に移って十一年、この三月で私は退任（牧会四十二年）。新牧師（高木康俊師）を迎え、なお協力牧師として召される日まで教会に仕えて行きたいと願っています。

わがふるさとのような仙台教会、教会設立四十年、おめでとうございます。ますます栄光を現される御教会でありますように、喜びをもって祈ります。

母のような母教会

福間バプテスト教会牧師　野口直樹

「あなたがたの間で、ちょうど母がその子供を育てるように、やさしくふるまった」（Ⅰテサロニケ二・七）

私は一九八〇年から十三年間、仙台北バプテスト教会の牧師をさせていただきました。仙台教会はその母教会でした。仙台教会というと、私は母のように懐かしく、ありがたく感じます。

【やさしさ】

開拓伝道は仙台教会でのボートライト先生、担当宣教師、小林孝男・啓子夫妻、古川明・栄子夫妻らの派遣信徒としての任命から始まりました。その後、教会組織までに佐々木聖子姉、池田義昭ご一家、石田信二・由紀子ご一家、大庭信子姉、武永道子姉、岩淵和子姉を送り出してくださいました。さらに、三百万円の援助に加えて、教会員兄弟姉妹方によるチラシ配り、引っ越し奉仕、礼拝参加と証しなどが続けられたのです。私たちは皆さまに、父親、母親、兄さん、姉さんといった親しみと信頼感を抱いたものです。

【あたたかさ】

このような皆さまの祈りによるご支援のお陰で、主は仙台北教会を祝してくださいました。どこに行っても話題になるような活動が続きました。だから、得意そうな態度に見えたり、証しが自慢話に聞こえたりした時もあったと思います。しかし、母教会からはお小言をちょうだいするようなことは一度もありませんでした。私たちがのびのびと活動できるようにと、育ち盛りのやんちゃ息子をじっと見守る母親のように見ていてくださったのです。

【さすが母親】

仙台教会はさすがに親の実力を持っておられます。とくにこの十年は仙台教会ならではの底力のある活動を各方面でして来られました。伝道所としては、子供が親の偉大さを改めて見直すようにして、お手本とさせていただくことも数多くありました。

【ますますお元気で】

四十歳といえば益々、実りある働きができる年齢です。どうぞいつまでも若々しい母教会でいてください。うんと、子どもを産み続けましょう。教会には出産の年齢制限はありません。南光台、吉岡、山形、仙台北、大富も母親にならってどんどん孫、ひ孫を産んで行くと思います。

起こされた伝道者の一人として

西南女学院中学校・高等学校宗教主事
シオン山バプテスト教会協力牧師　庄司眞

創立四十周年おめでとうございます。

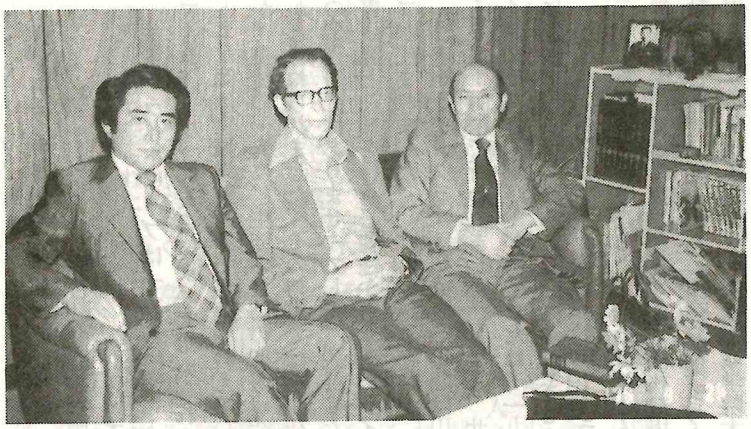
私と仙台教会との関わりは、一九六六年、私が岩手県から予備校生として仙台に来た年から始まりました。その前年、高校三年の夏、一カ月ほど予備校の夏期講習を受けるために滞在したことはありますが、私と仙台との関わりを決定的にした事件は、六六年七月に開設されたばかりの南光台伝道所にその年の十月、高校の同級生だったクリスチャンの友人に誘われて通い始め、そこでボートライト先生ご夫妻との出会いがあったということでした。

それから仙台教会の当時の牧師であられた天野五郎先生のご指導もあって、二カ月後のクリスマスの日曜日にバプテスマを受けたのです。これはまさに私の一生を決定づけた事件でした。まるであのヤコブの井戸でイエス様ご自身から命の水をいただいた者のように、私は聖書の言葉に魅せられ、まるでむさぼり尽くすようにして読み続けたことを覚えています。

イエス様は「わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る」（ヨハネ四・一四）とおっしゃられましたが、それ以前の私の渇きが余りに深刻だったため、なかなか渇きがおさまらなかったのです。しかし一方で、与えられた御言葉がその人の内で泉となるという約束が不思議なことに自分自身にも実現しつつあることも感じ始めていました。そして、その泉から湧

き出る水によって、自分と同じように渇いている人を癒すことができたら…などと不遜なことを考えている自分に驚きもしました。

予備校生だった私は、どうしても自分の進路を決めなければならない崖淵に立たされており、思い余って天野先生に助けを求めたところ、先生は即座に「神学校に行って牧師になりなさい。神学は学問としてもおもしろいよ」と言われたのです。



'70年代は長髪がまだまだ主流でした…。
左から庄司眞師、CSポートライト師、天野五郎師（1978年）

その後、仙台で五年、東京で四年勉強をさせて頂き、神学校卒業後は何と仙台教会から副牧師として呼んでいただくことになったのです。一九七六年、ちょうど南光台伝道所開設十周年の年でした。それから十七年間というもの、多くの方々との出会いにささえられ、恵まれた牧会生活を送ることができました。その間、天野、金子両牧師をはじめとして、仙台教会の皆様から受けた直接間接のご援助が私にとってどんなに力強いものであったか、今更のように思い起こしています。これからも仙台教会からたくさんの同労者が起こされることを願ってやみません。SBDの働きにも期待しています。

街の灯台として

大富伝道所牧師
トニー・ウッズ

四十年前、仙台教会が建てられた時、仙台駅から教会の十字架が見えたといわれますが、最近では街の建造物が高くなり、教会はだんだん低くなるようで、ちょっとがっかりです。しかし、目に見えるビジョンはなくなっても、霊的な幻は大きく深められて、教会は本当に街の灯台になったことに気がつきました。

その灯台の光は南光台にも、長命ヶ丘にも、大富にも、すべての教会のミニストリーの実が出てきたところを照らしました。更にこの教会から人材や、祈りや、あらゆるサポートも送られ、この光が全世界に照らされていることを心から感謝しています。その幻の一部分を自分の目で見ることができて感謝しています。これからも、この灯台の光の中に招かれる人々に祝福を祈ります。

英語礼拝を通して世界へ

仙台北教会吉岡伝道所牧師
ラリー・ミラー

日本バプテスト仙台基督教会の四十周年記念おめでとうございます。一九八七年私と家族はこの教会で奉仕するために仙台に引っ越しました。一九九二年まで一緒に礼拝し、交わりました。心から感謝いたします。金子先生と共に働くことのできた機会も感謝いたします。金子先生の導きや友情はいつも慰めになります。そして、教会員の方々も私の働きを支えてくださったことを感謝いたします。

私は、金子先生が宣教師たちに教会の働きとして英語礼拝を始めるように申し出て下さったことを思い出します。本当に神様はこの働きを豊かに祝福して下さいました。英語礼拝に参加した方々はオーストラリア、ヨーロッパ、アフリカ、北と南アメリカから来た人たちです。この働きはたくさんの人たちの人生に触れました。英語礼拝に参加した外国人の方々は自分の国に戻ると、彼らは仙台バプテスト教会の一部をもって帰ることでしょう。ですから、この教会の働きが彼らを通して世界中に栄光を与えていると言うことができると思います。

仙台教会には、いろいろ心が熱くなる思い出があります。一番の思い出は私の下の子、シェーンがキリストを信じ、信仰告白を読んで、バプテスマを受けたことです。このことは、私にとって永遠に大き

な喜びです。

私はすべての教会員がキリストにあって成長し、主に喜ばれるように主に従って歩み、あらゆる善いわざを行って実を結び、神をますます深く知るようにお祈りしています。

サーチライトクラブ

仙台教会協力牧師
ボブ・オデール

サーチライトクラブは一九八一年にトニー・マーシャ・ウッズ夫妻によって始められました。トニー師は宮城学院大学で英語を教えていましたが、生徒の一人に、生徒のための聖書研究があるかと尋ねられました。その時点では、生徒のための聖書研究はありませんでした。生徒のための聖書研究と礼拝を行う必要性からサーチライトクラブが生まれました。

サーチライトクラブは初めの二年間は川平にあるトニー師宅で行われました。しかし、サーチライトクラブのメンバーが増えたため、一九八三年に仙台バプテスト教会に場所を移動させました。一九八九年からボブ・オデールがサーチライトクラブの責任者となりました。初めはほとんど宮城学院の生徒でしたが、より大きく便利な場所に移動したことで、仙台中から生徒が集まりました。現在、サーチライトクラブには宮城学院大学、東北学院大学、東北大学、東北福祉大学、尚絅短期大学、聖和短期大学などの生徒がいます。

サーチライトクラブには二つの目標があります。第一に、教会と大学の「橋」となることです。日曜礼拝に参加することに抵抗を感じる多くの生徒がサーチライトクラブでの生徒対象の礼拝を楽しみます。彼らが神の愛を知るにつれ、日曜の礼拝にも出席するようになります。現在、仙台バプテスト青年会のメンバーの半分が日曜礼拝に来る前はサーチライトクラブに参加していました。

サーチライトクラブのもう一つの目標はリーダーとしての訓練の機会を与えることです。現在、サーチライトクラブには八人のスタッフがいますが、彼らはサーチライトクラブを計画、実行する責任を持っています。彼らは今、サーチライトクラブで学んでいることを将来、教会の中で活かしてくれることを思います。

最近、高校生の数が増えています。そこで一九九五年の四月から、高校生を対象としたサーチライトクラブを始めたいと思っています。このクラブが仙台の生徒たちのために神の愛のある所を明るく照らすものとなるように祈っています。

四十周年おめでとうございます

仙台北教会牧師
河野宏一

私ども家族が、九州の芦屋から東北の仙台に赴任して二年が過ぎようとしています。北九州・福岡連合には日本バプテスト連盟に属する教会は多くあります。そこでは、教会間を通して多くの交わりを得ました。しかし、東北連合には一県一教会の所も多く、そして複数の教会を持つ地域でもその教会の数は少なく、きっと孤独な伝道活動になるのでは？などと不安を持っておりました。しかし、仙台に参りまして、その不安が全くの杞憂に過ぎないことを教えられました。仙台地区の三教会二伝道所が実によい交わりを形成しているからです。そして、その中心には仙台教会がありまし。いつもその熱気には圧倒されます。

私ども仙台北教会のメンバーにとっては、仙台教会は「兄貴」であり「手本」です。多くのことを教えられ、与えられました。イエス様は「受けるよりは、与えるほうがさいわいだ」とおっしゃいましたが、仙台北教会も「与える」教会となりたく願っています。

「教会組織四十周年」おめでとうございます。これからも共に良きパートナーとして、福音宣教に励んでいきましょう。

仙台教会四十周年に寄せて

南光台教会牧師
濱野道雄

四十歳。不惑の年である。かっこいい。けれど教会に関してだけは、四十にして惑ってほしい気もする。キリスト教が普遍（カトリック）たれたのは、絶ええざる革新運動（プロテスタント）の機能を内に秘めていたからだと思う。もっとも、仙台教会にはその心配は無用と思われる。誉め言葉ですよ。遊びに行くと、本当にさまざまな「信仰の形」を持った方々がいらっしゃる。そんなに時代が離れず、同じ説教を聞きながら決心をした方々においてもだ。大変良いことである。また、仙台北、吉岡、大富、そして私どもの南光台の群れの源流には仙台教会がある。SBD五つの群れには明らかに個性がある。おそらく「信仰の形」も違う。しかし、それぞれ孤立することなく対話を続け、その仲の良さは「全国的に」有名である。大変健全なことである。この健全さが仙台教会にさかのぼり、今なお宿り続けているのを見るとき、また何か新しいことが始まるな、との期待を

持つ。
「信仰の形」は違うが、そこには対話と、同じ一つの「信仰の内容」がある。そこに未来がある。トルストイよりもドストエフスキー、ビートルズよりもストーンズが好きな男としてはそう思う。

教会設立四十周年を祝って

山形キリスト教会牧師　奥田　稔

仙台基督教会の皆様、教会設立四十周念を迎えられて心よりお祝い申し上げます。多くの先輩クリスチャンの開拓者が、杜の都として人々に愛されている仙台の地に伝道の鍬を下ろし、耕し、種を蒔き、水をやり、雑草を抜き、刈り入れをしてこられたことを思うと、心からその方々に感謝せずにはおれません。また、それらの方々を遣わしてくださった主に感謝せずにおれません。そのような働きが仙台地区に宣教のうねりを呼び起こし、東北全体にも大きな宣教の貢献する優れた人材を産み出してこられましたことを思う時、皆様が自分のことだけでなく、常に共に労することを喜びとして来られたことを、教会の生の中心に捉えられていることを私たちは教えられます。この事は教会にとって大変に大切なことです。

仙台基督教会の皆様は、山形教会が教会組織する一九八一まで母教会としていつも支援してくださいました。豪雪の冬に雪下ろし部隊を派遣してくださったことなどは今も教会員の間では語り継がれています。また、教会員の多くが、仙台基督教会の前牧師である天野五郎先生やボートライト宣教師によってバプテスマ式をして頂きました。

私たちはこのような仙台教会ですから、主にある兄弟以上に、自分たちの道標としての教会としてみております。この四十周年を機にさらなる高みへとのぼられ、私たちを励まし、導いてください。

仙台教会と私

仙台教会協力牧師　小林孝男

私の家は、この教会の二軒隣にあった（今は製薬会社のビルの建っている所）。だから小さい時は教会の裏庭は私たち近所の子供たちの格好の遊び場だった。今の牧師館や教育館が建っている所は空き地で、大きな欅の木と赤いブランコがあったのを覚えている。鬼ごっこでうるさく駆け回り、背の高い白人男性（グラント宣教師？）に叱られたこともあった。しかし、小さい頃、教会学校に通った覚えはない。私にとって教会は教会ではなく単なる遊び場だった。

高校の頃になって初めて、ここがキリスト教会であることを意識するようになった。二年か三年の秋、私は初めて教会としてのこの建物に足を踏み入れた。歩道から教会の玄関までのアプローチがいやに長く感じたのを今でも覚えている。キリスト教を全く知らない者にとっては、やはり未知の世界であり、多少恐怖心があったのだと思うが、私の教会生活はとにかくその日から始まった。

私の信仰の歩みを自分なりに総括すると、「静かなきかなさ」だと思う。バプテスマを受ける当日に「きょうは受けない」と宣言したり（実際、半年伸ばしてもらった）、日曜日の模擬テストは礼拝優先のため拒否したり、クリスチャンになって間もないのに牧師になりたいと思い、大学はキリスト教学科などという得体の知れない所を選んだり、礼拝で証しした内容が自分の本当の思いを表していないと感じ、原稿をすぐさま破り捨ててしまったり、CS教師をしていた頃、高校生を正座させて信仰の決断を迫ったり等々、懐かしく思い出している。

今年は教会設立四十周年だが、「四十」という数字は荒野での放浪生活を終え、神の約束の地、新天地にまさに進み行こうとしているイスラエルの民を思い浮かばせる。仙台教会につながる私たち一人ひとりも、新天地へのスタート地点に立っているような思いを持って四十年を記念したいものである。信仰的には人に迷惑をかけない程度に「静かなきかなさ」に磨きをかけて、ポスト四十周年を歩んで行きたいと考えている。

新生運動の頃

吉永　馨

昭和三十八年の春、アメリカ南部バプテストは日本全国で新生運動を行った。沢山の伝道チームを日本各地に派遣し、一大キャンペーンをはったのである。仙台にも一チームが来て、数日間の伝道活動を行った。

その時、仙台教会は大沼牧師が九州に転勤され

たばかりで、ボートライト宣教師夫妻が牧会を担当しておられた。教会員も少なかった。私たちはまだ求道者で、決心をためらっていた頃である。

伝道集会は教会でも開かれたけれども、一番大きな催しは市の公会堂で行われた。全市民を対象に伝道しようとして、大きなホールを借りて開催したが、参加者は少なかった。ボートライト先生を中心に教会員が必死になって準備をしたのに、あまり成功したとは言えなかった。

しかし、ボートライト先生は決してガッカリなさらなかった。私は求道者としてこの集会のお手伝いをしたが、その結果を見て、ボ師はよほど落胆されたのではないかと案じた。ところが、ボ師は少しも落胆されない。なるほど、これが信仰なのか、と感じいったものである。この世の成功・不成功はすべて主のみ手にある。主は成功の喜びを与えるとは限らない。不成功を与えられても、それも隠れた主のみ心なのであろう。

結局、この新生運動を通して私たちは決心に導かれたのであった。私の母ショウ、妻慶子、私の三人は新生運動の後、六月三十日にボートライト先生からバプテスマを受けた。

それから既に、三十年以上経った。母は天に召されたが、慶子と私は守られて今日に至っている。ボ師はアトランタで日本人の魂の救済に励んでおられる。新生運動を懐かしく思うのである。

御名を伝えん　ハレルヤ

金子洋子

四十周年を迎えるに当たり、教会の古いアルバムから記念すべき写真を選び出して、歴史を追いながらパネルに貼りました。

初めの頃の教会は、あたりにビルもなにもなく、空が広々と見え、チンチン電車（市電）の停留所がすぐ前にあり、なんともものどかな光景でした。

教会堂の裏庭には大きな木があり、その木の下で少女たちが分級（少女会かも?）をしている姿もあり、これもまたのどかな光景だなあと思いました。こうした写真のひとこまひとこまに、教会の年輪を感じ、感銘深いものがありました。

イエス様のご降誕を祝って（一九八六年）

開拓当時の歴代の先生方や先輩方のご苦労を伺う時、本当に頭の下がる思いがします。決して一朝一夕に今の仙台教会があるのではないということをしみじみ思いました。

過去の歴史を振り返るとき、そこに働かれた神様の導きを思います。そして、今、新たな四十年に向かって進む未来の仙台教会に思いをはせながら、四十年を祝う讃美歌の歌詞を作りました。老いも若きも神様の御名を讃えて力一杯讃美したいと思います。

21世紀に向けて、祈りつつ歩み出そう

―紀元二〇〇〇年の夢―

西村光子

「チャララー、チャララーン……」。パイプオルガンの前奏が厳かに鳴り渡る。会衆皆が緊張した中にも、喜びあふれる思いで聴き入っている。天地創造やイエスの生涯を描いたシャガールばりのステンドグラスを通して春の光がやわらかい。天井のシャンデリヤはまばゆいばかりだ。

きょうは待望の献堂式の日である。二十一世紀のスタートの年にふさわしく、堂々たる会堂ができ上がった。

一階から五階まで真ん中を吹き抜けとし、一階は礼拝堂、二階以上は吹き抜け部分を回廊で囲み、放射状に分級室が配してある。教会学校も乳児科から「しゅろの会」まで各二クラスあり、赤ちゃんの泣き声、子供たちの賑やかな話し声、「しゅろの会」での若やいだ喚声が、活気を見せている。

会堂の音響効果も抜群で、青年会のミュージカル、時にコンサート会場にも提供され、地域のコミュニティ・センターとして多くの人々に親しまれようとしている。内部装備もエレベーター設置はもちろん、階段はスロープ状、ちょっと息抜きのレストハウス、高齢者向きのデイケアーセンター併設と、「人にやさしい」作りを目指したもので、仙台における先駆的教会としてニュースで取り上げられたほど。

「私たち一人ひとりの力は小さい。しかし、神さまは祈りを聞かれた。神さまに信頼して歩むことで、この日を迎えることができた…」。今、金子牧師が感謝の祈りを捧げている。その祈りを聞きながら、万感の思いが胸に迫る。

〜◇〜

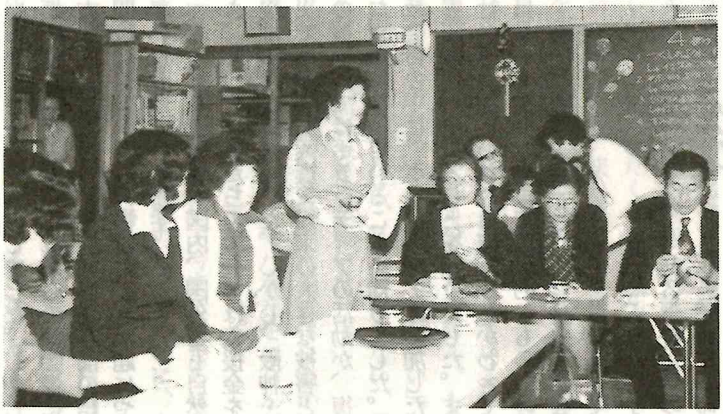
○年後の仙台教会は、どんな姿を見せているだろうか。四十年を次なるステップとして二十一世紀に向けて、祈りつつ歩み出そう！

恵まれたときを感謝して

早坂　とし子

教会設立四十周年を心から感謝致します。この記念すべき年に婦人会ではいつものご奉仕の他に、昨年十一月にBWA、ことし三月にはNCC仙塩地区世界祈祷日礼拝の当番教会として皆様と共に精一杯ご奉仕させて頂きました。二つが重なることはめったにないことですが、その責任もやっと果たすことができほっとしているところです。と同時にこの一年を振り返り、様々な行事を通して神様からたくさんいろいろなことを学ばせて頂きました。

今年度は大きな行事が重なることなど、何も知らないで婦人会長の役をお引き受けした私は、正直言って動揺致しましたが、「欠けた小さな器ですがみこころでしたらどうぞ用いてください」と自分を差し出した時、神様はそれを大きくして用いてくださることを教えてくださいました。



イースター礼拝祝会風景？右から故中目兄、今井姉、ボ師、荘子姉、菊田姉、吉永姉らの顔が見える　（1977年4月）

私が無力でも、素晴らしい賜物を頂いているお一人おひとりがその場を担ってくださいました。また、いろんな事情で出られない方はその場で祈ってくださいました。

私たちは神様の御手の中にあり、すべてを良きに導いてくださること…主の山に備えあり…と信じつつも、自分の弱さや限界のために、お互いの心を痛める時もありました。でも、人々のあらゆる思いを遥か超えて、イエス様によって一つとされ、NCC世界祈祷日礼拝には役二百名の超党派の婦人方とご一緒に同じ目的のために祈り、捧げることが出来た喜びと感激は忘れることはないでしょう。

教会のお一人おひとりがかけがえのない神様の宝の民として、教会に招かれていること、また、みんながイエス様の肢体となり、心を一つにして主のご用のために働き喜びをも教えて頂きました。

さまざまな賜物をもっている方々がたくさんおられるこの教会、場所にも恵まれていることから、もっと何かが出来るのでは…と思わされます。例えば会堂から流れる歌声に誘われて通勤帰りにフラッと気軽に立ち寄れるようなコンサートとか、高齢社会に向けてデイケアやショートステイ…が出来たらいいなあと夢を見ております。

そういうことで、地域に根ざした教会、ますます開かれた教会として用いられるよう祈りつつ、新たな歩みを共に始めたいと願っております。

思い出

菅原　あや子

私がこの教会に初めて足を踏み入れたのは、昭和三十一年の春、長男の清文と一緒に、幼稚園の下見に訪れたときです。応接して下さったのは佐藤ミツ先生でした。優しいおばあちゃん先生と、子供はすぐなつき、机や椅子が変わった形で、美しい色で塗ってあったのが印象的でした。

バプテストの名前がなかなか覚えられなかったけど、キリスト教の幼稚園で、園長先生は関谷先

生、大きい外国人の先生はグラント先生、母の会では讃美歌を覚えました。

ある日、園から特別伝道集会（講師は柴田文雄牧師）に招かれ、初めてキリスト教のお話を聞きました。それは、今まで抱いていた神の概念を根底から覆す「生きた神」との交わりの勧めでした。

私はイエス・キリストを信じたいと強く強く思いました。けれども、信じるとは心の内部から自然に湧き上がってくる感情で、自分でいくら努めてもできないもののように思われました。先生は「真心から神に祈れば必ず与えられること、神のみ言葉を聖書や人の口を通して聞くこと」を教えて下さいました。

集会最後の夜、信じた者に対する招きに応じて神の前に進み出た自分を発見した驚き。私の考えを遥かに超えたところで神のご計画がなされたことを思います。

バプテスマは翌年の母の日、グラント先生より受けました。夫の転勤で、盛岡、新潟、旭川、秋田と移り住み、各地の教会でバプテストの交わりに入れて頂きました。娘の寛子（当時、高校生）は新潟教会で救われました。離れていても仙台教会との絆は深く、二人の子供はそれぞれ良い伴侶に恵まれ、この教会で結婚式を挙げさせて頂きました。

夫の退職後、私も懐かしい仙台教会に戻り、この地で四十周年を迎えることが出来て感謝です。頭に栄光の冠（しらが）を頂く年になりましたが、本当の冠を頂くその日まで、愛する兄弟姉妹と共に、信仰の走場を走り続けたいと願っております。主が先になり、また後になりして、共に走って下さることを覚えながら…。

社会と共に生きる教会

八巻正之

四十周年記念誌に寄稿するに当たり、何を書こうかと、まず思い悩むことから始まりました。教会生活四半世紀を振り返ったものにしようか、それとも、これまで担った執事の中で、特に思い出深い（？）財務執事の苦労話でもしようか、いろいろなことを思い巡らしました。しかし、過去を振り返ることより、これからの教会像についての方が前向きである、という当たり前の結論に数時間後に気付かされ、標記のような題にやっと落ち着いたわけであります。

さて、ここ数年、国内、国外とも自然災害が続き、その度に私たちの教会では義援金を募り、被災地に贈ってきました。しかし、阪神・淡路大震災では、関東大震災以来の大きな被害となり、この被災地ではボランティアの活動が、復興の大きな支えになっていることを知りました。このため教会員の中に、ボランティアに参加したいという青年が何人かいることを知りました。また、現在社会的弱者といわれる方々にかかわっている教会員もいます。これまで個人的なものに終わりがちなこれらの社会奉仕活動に、教会として関わっていくことは、イエス・キリストが伝道の困難な地域に、自らの命を惜しまず、教えを広めたことにつながるのではないでしょうか。

このことは、幸運にも（？）九五年度の社会担当執事となった自分にとって、今後の基本的な姿勢の一つとなるものであり、さらに教会にとっても、将来にわたり目指すものの一つとなるべきことと思っています。

オリーブの会の発足について

佐原玲子

青年会が再発足して早やくも十年になりました。学生が一人だけだった当時と違い、現在は見違えるほど増え、たくさんの学生の青年会となり、若さとエネルギッシュな活動が行われています。そうした中で、社会人としても中堅となり、責任も問われ、厳しい状況で働いているシニア青年は、奉仕の内容、時間の使い方が学生と違ってきます。

若者の活動を中心として、それをバックアップすることは大切な役目だと思います。しかし、独身であることで、そうした年齢の人々にとって既婚者とは違った立場で奉仕の道があると考えたのです。年齢によって、ある人たちは結婚という問題が大きく関わって来ます。教会とはまったく別のところで、交際やそれに関わる様々な問題、教会の誰にも相談ができずにいつしか教会を離れてしまう。そういった友を私は見てきたのです。

幸にもシニア青年の数もある程度になり、何か新しい会を設け、グループとしての交わりの中で励まし合い、さらに新しい社会人の青年たちを教会の和の中へ導きたいと考えたのです。また、独身であるがゆえに子供のいないクリスチャン夫婦が入ることによって恋愛の問題や交際についてのアドバイスが得られると思いました。

こうして、一九九四年、オリーブの会ができた

のです。

時々行われるパーティには、徐々に人々の参加も増え、交わりの中で、バプテスマを受ける決心をされた方も出ました。また、何よりの恵みは車椅子の方や、体の不自由な方々がこのパーティへの参加をきっかけとして、教会のプログラムに参加してくださったことです。この事はこれからの私たちの歩みに大きな期待と夢のふくらみを与えてくれました。青年会や婦人会、壮年会との交わりのかけ橋になれたら素晴らしいと思います。

だから大人は信じられない

向井田洋

中学校の野球部時代は屈辱の三年間だった。一年生から二年生まではレギュラー選手になれないのは仕方のないことだとしても、僕は三年生になっても一桁の背番号はもらえなかった。確か一三の数字を背負っていた記憶がある。そして、同じ二桁の背番号を付けていたのが天野有君だった。僕たちはベンチ・ウォーマーズだったのである。日曜日は学校で野球の練習をしていた。もちろん有君も練習に汗を流していた。だが牧師の息子であったはず。日曜学校に行かなかったのだろうか。

有君に再会したのは東北学院高校一年の春。同級生の八巻正之君に誘われて仙台教会を訪ねた時だ。野球部時代、親父が牧師だなんて知らなかったし、同級生の父親は自分と同じサラリーマンだけだと勝手に信じて疑わなかった。牧師を父親に持つ有君が不思議な存在にそれからなった。

教会に馴染んだ高校二年の夏、夏期学校に参加した。外泊することに妙な興奮を覚えた。夕食後、高校生が会堂に集まり、天野五郎牧師との懇談会が始まった。日頃思っていることや感じていること、疑問に思っていることなど、何でも自由に話し合おうということになった。

天野牧師は若年層の説教理解に興味があったようで参加者に執拗に発言を求めた。しかし、発言するには質問が難し過ぎた。誰も口を開こうとはしない。じれったくなった先生は「きょうは何を言ってもいい。決して怒らないから、思ったことを言いなさい」とニコニコして発言を誘った。

八巻君が口火を切った。

「中学のときからこの教会に来ているけれど、先生のお説教はさっぱり分かりません。もっと、僕たちにも分かるように話してください」。

堰が切れたように、私も分からない、僕も分からないと、同じ発言が続いた。

ニコニコと発言を誘った先生はにわかに厳しい顔つきとなり、鋭い目で八巻君をにらんだ。そして、強い調子でこう言い返した。

「ああ、僕は情けない。今まで君たちにも分かってもらえるようにと努力してきたのに、さっぱり分からないなんて…」。

幸いにも発言の機会を逃していた僕は、このやり取りを聞きながら、こう心の中で思った。「先生、息子の有もここにいるのに、そんなに興奮したら有が可哀想だ。怒らないから言えって言ったじゃないか。だから大人は信じられないんだ」。有君の方を見たら、下を向いてじっとしていた。この後のことは余り覚えていないが、優しい天野先生が本気で怒ったのはこの時が初めてだった。

二回目に怒ったのは、翌年のクリスマス、キャロリングから帰って、和室（当時は和室と呼んでいた。今の台所脇の食堂である）で、庄司眞、佐藤哲雄先輩らとちょっと大人のまねをした時だ。後輩の僕たちは直接怒られなかったが、二人の先輩たちはこっぴどく叱られていた。先生はどこにでもいるサラリーマンの父親のようだった。

今は昔。もう二十年以上も前の話だ。

会員そろって野蒜海岸での野外礼拝（1970年）

大富伝道所　キリストのからだを建てる

大富伝道所の半年を顧みて

伊東信吉

十二名の派遣会員とその家族によって、一九九二年十月から主の日の礼拝を守り始めました。六カ月を経過した今、主の恵みの大きさと導きの確かさを実感しています。

会員数は、迫久美子姉、原田律子姉、鈴木敏明・弘美夫妻、鈴木豊兄の転会により十七人となり、現在は短期宣教師トレーシー姉の転会希望を受けて、その手続きを進めています。また、礼拝の中での招きに応えた方やウッズ牧師との聖書の学びの中で信仰の決心に導かれた方など数名の人たちがバプテスマを望んでおられ、教会学校の時間帯の中に設けられたバプテスマ・クラスも既に第一期が終了して、信仰告白の準備に入っています。

礼拝及び教会学校の形態については大人も子供も「同じ時間帯で学び、共に礼拝する」ことを基本としています。初めは、親と離れて学ぶことにぐずついていた幼児たちも、最近では優しい先生たちと楽しく学んだり、遊んだりすることができるようになりました。また、小学科は良く準備された教材を用いて、一時間では足りないほどの学びを経験しています。成人科では当番の人が「聖書教育」を用いてクラスをリードしていますが、自由な雰囲気の中で、毎週すばらしい証しがなされています。

礼拝は「こども讃美歌」で始まり、共に「主の祈り」をささげます。そして、オブジェクト・レッスンという「物」を通して「神を指し示す」子供のための説教を聞きます。これらは礼拝での讃美や説教が、それぞれの家庭に帰って、日常生活の中で、家族と共に分かち合えたらとの配慮でなされています。礼拝後には、持ち寄ったクッキーを食べながら「交わりの時」を持ちますが、子供にとっても大人にとっても楽しい時間です。そして、これと並行して特別な悩みや痛みを感じている人のための祈りの時間も持たれています。

これまで、ウッズ牧師一家を始め、派遣会員が教会の責任の多くを担って来ましたが六カ月を経過し「皆で教会を建てる」熱い思いの中で、教会での奉仕について再考させられています。牧師を教会の事務的なことで煩わせることのないように、感謝をもって献げることができる自分自身のタラントの再確認を求道者も含めて行っています。母教会である仙台教会から、伝道の第一線へと送り出された派遣会員は、神様がそれぞれを十分に用いて下さるようにと祈りながら伝道所での働きに勤しんでいますが、伝道所の中では「派遣会員」を意識しないで伝道、牧会に当たることが期待されているように感じています。

1993年9月23日大富伝道所献堂式

新しい会堂で初めて礼拝を守った日、瀬上さんご夫妻と田中さんご夫妻のバプテスマ式が行われ根本佳代子のバプテスマ式が予定されています。本当に感謝です。この一年、教会堂を建てることを目標にやってきました。大山英明（93年10月3日週報から）

伝道所のメンバーたちはSBD主催の新年礼拝やイースター合同讃美礼拝、あるいは仙台教会の英語礼拝等に積極的に出席することで、仙台圏にある信仰の友の祈りに支えられていることを知り、励ましを与えられています。

大富伝道所の会堂が完成し、いよいよ今週23日午前11時から献堂式が行われます。予測以上の順調な進捗ぶりでしたし、思ったより立派な建て物です。多くの方々の熱い祈りと献身的な労苦の一つの結実として心から喜び、感謝したいと思います。（93年9月19日週報牧会通信から）

これからの課題として、平日の伝道活動の持ち方などがありますが、既にトレーシー姉を講師とする英語教室や、婦人会を中心とした聖書研究が新年度から企画されています。新会堂の建築も始まり、献堂式の準備やその後の特別伝道集会についての話し合いも持たれています。小さい群れですので、これからも今まで以上の祈りと具体的な支援をよろしくお願いします。

（九三年五月報告総会議案書から）

我らの心

内に燃えしならずや

菊田弘子

朝、目が覚めると壁に掛けてある荘子聡子先生がお書きになった色紙のみ言葉がまず目に飛び込んできます。

「お互いの心内に燃えたではないか」（ルカ二四・三二）

このルカ伝のみ言葉は確か大富伝道所が開所された年の年間標語だったと記憶しています。

ウッズ先生が仙台教会で「向こう岸に渡ろう」と伝道所への幻を説教を通して語られた時、私の心は燃えました。

南部バプテスト教会員の貴い献金によって建てられたこの立派な会堂で礼拝が出来ることは私にとって何よりの感謝で、世界祈祷週間の献金もいつもこのことを思いつつさせて頂いております。

ですから、仙台教会が母教会になって伝道所をとの提案がされた時、日本人の手によって教会を作る時代が来たこと、私たちにそのチャンスを神様が与えて下さったことを心より喜びました。でも私はこの教会の居心地の良い椅子を離れようとは思いませんでした。私の身長には高すぎる長い椅子だけれど、私は一生この教会の一員で、一生この椅子に座り礼拝を守らせて頂くことを自分で決めていました。しかし、神様の業はほむべきかな。今私は大富伝道所の新しい椅子で毎週本当に恵まれた礼拝をさせて頂いているのです。

仙台教会の長い立派な木製の椅子は、南部バプテストの兄弟姉妹への感謝の心を私に育んで下さいました。大富伝道所は折り畳みの一人用の椅子です。形は違いますが、この椅子に座り、毎週喜びのうちに礼拝を守らせて頂いている背後に母教会である仙台教会の兄弟姉妹の温かいまなざしと熱い祈りを感じます。そればかりでなく、日本を離れてもなお、日本人への福音のために祈っていて下さるボートライト師ご夫妻、そして全国の諸教会の祈りとお支えを感じます。

一人の人間が教会のドアを開け、主に出会い救われるまでに、神様は神様のご計画で事をお運びになります。私たちはただ主に信頼し、主を心から讃美することによって我らの心、内に燃えたではないかと、互いに喜びのあかしが出来ます。

十年前、献堂三十周年記念として頂いた故三浦照子姉の書による色紙「わたしは心をつくして主に感謝します」（詩篇九・一）も前記の色紙と共に私の部屋の壁に大切に掛けさせて頂いております。

母教会の献堂四十周年に

伊東信吉

大富伝道所は母教会である仙台バプテスト教会を誇りに思います。あなたは四十年前に仙台の中心部で伝道を始め、今日まで忠実に神様のみ言葉に従ってきたことを多くの人が知っています。そして、あなたはこれまで近郊の団地に伝道所を生み出し育て、教会組織まで導いたことも皆が知っていることです。

大富伝道所はあなたによって生み出された最も若い伝道所ですが、いつもあなたの豊かな支えと温かい励ましと祈りの中で育てられていることを感謝しています。そして、あなたの伝道に対する実績と熱情を感じることが出来るので安心しています。

子どもが親の背中を見ながら、福音宣教の業に励んでいます。親が子どもの成長を期待するように、あなたも大富伝道所の成長を期待していることでしょう。大富伝道所の教会組織の機会はきっと神様のご計画に定められていると確信しています。そしていつかあなたにとって孫が与えられる日が来ることでしょう。共に幻を持ち、祈り続けましょう。

スペシャルメニュー・チャーチカレー

伊東公美子

皆さん、ご存じですか。今、チマタでもちょっとした人気メニューになっている大富教会のカレーライス。

三階の分級室に上がる前に、小学科の子どもたちは台所の戸をちょっと開けて「きょうもカレーだね」と喜んだ顔をのぞかせます。

何かと忙しい若者たちにとって、教会でカレーランチがあるかどうかは、その日の（デート）スケジュールに微妙に関わる外せないチェックポイント。

何と言っても一番のお得意様、田中おじさんの「大富教会のカレーは世界一」のお言葉に乗せられて大富教会の食堂は毎週のようにチャーチカレーで賑わいます。

カレーご飯をよそいながらわたしはいつも、この食卓の真ん中に座っているのはイエス様。ここはイエス様の食卓だと実感するのです。そして、このカレーをこれほどまでの人気メニューにしている特別スパイスは「神様の愛」に違いないと。

この秘伝を惜しみなく伝授してくださった仙台教会のお母さま方に心から感謝します。どんなときでも、どんなところにいても、母教会のカレーは懐かしい美味しい味がするのです。

捧げる言葉

瀬上克之

この晴れの日にあなたがたの群れに拾われた小さな者から、心からの感謝と激励のメッセージを贈ります。

「さて、兄弟たち、主イエスに結ばれた者として、わたしたちは更に願い、また勧めます。あなたがたは神に喜ばれるためにどのように歩むべきかをわたしたちから学びました。そして、現にそのように歩んでいますが、どうかその歩みを今後も更に続けてください。わたしたちが主イエスによってどのように命令したのか、あなたがたはよく知っているはずです」（テサロニケ四・一～二）

子供のころ私は習い始めたヴァイオリン教室で一番の劣等生でした。目の不自由さも手伝ってレッスンの進み具合は他の生徒と比較するならウサギとカメのようでした。

しかし、何年もすると同世代の生徒たちは部活や受験などを理由に次々と教室を去り、いつの間にかドンカメの私がその教室一の成長株になっていました。

もちろんそれまでに親兄弟、先生、友人らの支え、また、時には周囲の悪評やそしりに合い打ちのめされながらも立ち上がり、つらい練習に耐えた日々があったから、とも言えるでしょう。

しかし、歩み続けること、これほどの力はないのです。そこで仙台教会の兄弟たち、あなたがたの歩みをどうか止めないで下さい。共に求め続け、祈り続け、歩み続けましょう。そして、今、あなたがたの群れに加えられた私は、かねてからの望みであった讃美の音楽、祈りの音楽を心置きなく演奏出来る場、「教会」を与えられ、心から喜び、感謝致します。

大富教会への移籍

親子で礼拝を守る喜び

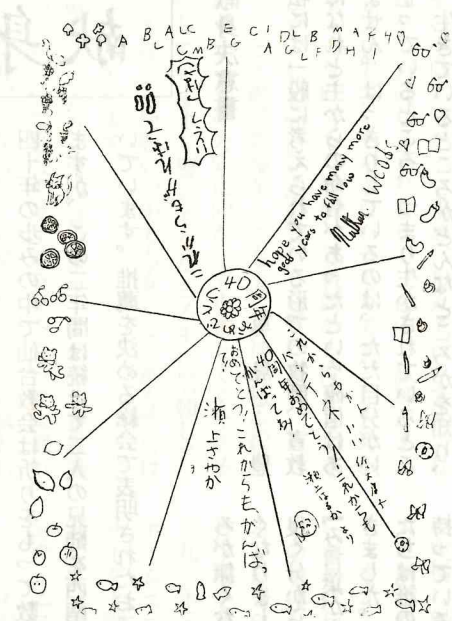
迫久美子

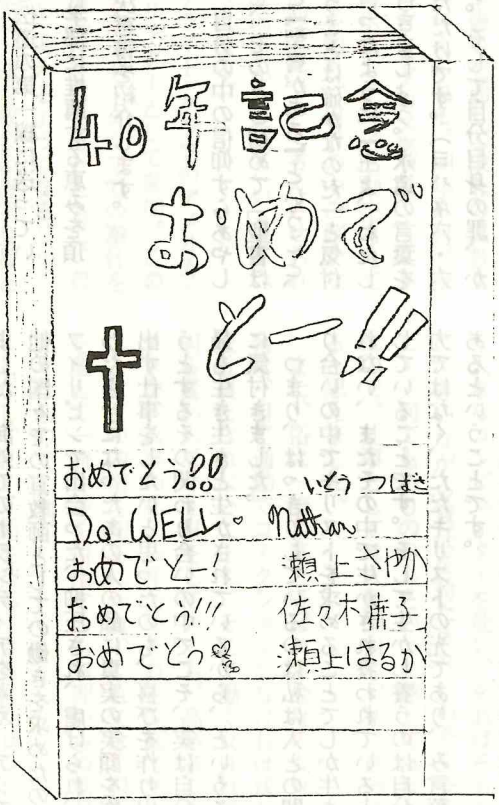
五年以上も前になろうか、私が初めて仙台教会のサーチライトを訪れたのは。それまでも十年ほど別の教会に通っていた私であるが、この時より毎週木曜日は仙台教会、日曜日は別の教会へという一種の二重生活が始まった。しかし、そんな生活はおかしな感じのするもので、どうもどちらにも集中できない。そんな時、それまで教会といっても無関心であった父が（昔は私が教会へ行くことさえ反対していた）英語に興味があったのか英

語礼拝へ通い始め、大富のウッズ先生宅での家庭集会へ出席し始めた。これは私にとって非常な驚きであり、見守るような気持ちで私も共に家庭集会などに通い始めた。

こうして私たちの生活の重きが少しずつ仙台教会、大富での集会へ移行し始め、そしてある日のこと、大富教会の前身となるウッズ先生宅での日曜日礼拝に通うようになる。せっかくのことなのに、私が別の教会へ通い続けるなんて変じゃないかしら？という考えが生まれ、今度はその気持ちを後押しするかのように、大富での子供日曜学校の助け手としての誘いが来た。そんなこんなで、やっと私は連盟へ移籍する決心をする。

異なる派への移籍であるから、送り出す側と受け入れる側とで混乱がなければいいなあと気をもんだが、それはあらぬ心配であった。長年の夢？でもあった父と共に礼拝を守ることが初めて可能になり、また、私の働きが必要とされているのだから、と当時籍を置いていた教会の人々は私を温かい励ましをもって送り出してくれ、そしてこの大富教会、母教会である仙台教会の人々もまた温かく迎えてくれた。今日まで、学校の都合で私自身は大富に通えなかった時期もあるものの、父の方は通い続け、一九九四年十月にはバプテスマを受けるに至った。私たち親子をこれまで見守り続け、励まして下さった神様と大富、仙台教会の皆様に感謝し、これからもよろしく！を述べたいと思う。





新しい友達できました

大山千尋

わたしは仙台教会で二年生のときバプテスマを受けました。大富教会にきて新しい友達もたくさんできました。夏のキャンプなどでいっしょにとまったりできてうれしいです。教会はひとつだと思います。

夏のキャンプは楽しかったね

大山耕平

仙台教会のみんなといっしょにいった夏のキャンプがとってもたのしかった。またいきたいな。

献身

教会にとって直接伝道献身者を生み出すことほど、大きな光栄はないでしょう。四十年の歩みの中で仙台教会は祈りをもって数名の方々を伝道の第一線に送っていますが、この二年間は続けて二人の兄姉を西南学院大学神学部に推薦する恵みを頂いています。推薦を決める総会で表明されたお二人の献身決意書を紹介します。

献身決意書

草島　豊

私には一般に考えられている形での牧師、宣教師になれと主からの命令があったという確信はありません。はっきりしているのは、ただ自分がいま立っているところ、つまり生かされているところ、生きているところがどんなところかを知り、自分の求める方向に牧師や宣教師の働きがあるのではないかと求めていることです。

「私が最も喜びを感じるのは、人の笑顔を見ているとき、だから笑顔を作り出す仕事をしたい」ということを、そして真実の笑顔、喜びはイエス・キリストの福音から生まれるということを、大学卒業時に進路変更に伴う迷いと悩みの中で気づかされました。それはどんな時に自分が一番生き生きとしているか、生かされているかということです。だから人々の間に真実の喜びを作り出す仕事をしたいと思いました。しかし、自分の中に愛はありませんでした。自分の中から出てくるのは、思い通りにならないことへの苛立ち、怒り人に求めようとして得られない寂しさしかありませんでした。人に頼ろうとして、相手に自分のイメージを押し付けていました。悩みと苛立ちの中で、自分の中に何も無いことを知り、何処にも行くところが無くなりました。自分の中の信仰すらあやしくなりました。しかし、そのとき初めて「聖書は良く分からないけれど『聖書がある』ということ、『み言葉がある』ということは確かなのだ」と気付きました。ペテロが言ったように『主よ、わたしたちは誰のところへ行きましょう。永遠の言葉を持っているのはあなただけです。（ヨハネ六・六八）」という思いです。そして自分自身の罪、かげ、暗闇を受け入れることが少しずつ出来るようになって来たのは、かげは光りに照らされているから出来るのであり、かげはまたイエス・キリストの光りに照らされていることを証していることに気付いたからです。そして、自分のために求めているとき喜びがなく、人との関わり合いの中でイエス・キリストの愛を求めるとき、喜びが生まれて来るということを知りました。信仰は私自身の中にあるのではなく、私と人との間に、私とイエス・キリストとの間にあることを知りました。

私がユース・ミニストリー（中高生との働き）を意識したのも、中学科教師として中高生のメンバーとの関わりの中で生かされたからです。自分自身が何者か分からなくなったとき、自分の鏡をどれだけ見ても自分は見えてきませんでした。自分と中高生のメンバーとの関わり合いのただ中にこそ、自分自身がありました。自分自身の中に喜びはなく、人との関わり合いの中に喜びが示されました。海外でのボランティアを考え、アジアの他の国々での宣教師としての働きを求めたのも、フィリピンで出会った、抑圧され、虐げられ、しわだらけになったあの人の顔に真実の笑顔を作り出す仕事をしたいと思ったのも、喜びを作り出そうとするその関わり合いの中でこそ、実は自分が最も生き生きと生かされているから、ということに気付きました。

つまり、はっきりしているのは私は人との関わり合いの中でキリストを求めることでしか生きられない、またその中で生かされ養われていると感じていることです。そして生かし養うのは自分の力ではなく、ただキリストの光であり、み言葉であるということです。

これまで私を導いて来たのは、教会学校で中学科の教師として生かされたこと、青年会の中で多くの働きの機会を与えられたこと、多くの宣教師と共に働くことが出来たこと、さまざまな人々との出会いがあったことです。しかし、私を養い導いたのは何よりもこの仙台教会の関わりあいの中で自分が生かされ、支えられ、祈られてきたその交わりです。神学校への思いも、教会での交わり、関わりあいの中で与えられました。感謝します。そして、これからも祈ってください。成長させてください。なぜなら、私は一人では意味のない存在だからです。

私の考え、求めている牧師、宣教師の働きは一般に考えられている牧師、宣教師の働きと少し違うかも知れません。牧師というときは、青少年担当牧師として教会内、またはＳＢＤや連合内で中

高生、大学生を中心にした牧会を今は考えています。宣教師というとき私の頭の中にあるのは、フィリピンで出会ったBCC（キリスト教基礎共同体）の青年たちの働きです。彼らは抑圧されている民衆が共に助け合って生きて行くように、共同体を作って行くその交わりの中で、イエス・キリストを証しし、求めていました。貧しい家の中で村人たちが集い、礼拝する交わりを持っていました。私は神学部での学びを通して具体的にどのような働きができるのか、どのような牧師・宣教師になるのを示されているのかを教会の働き、役割の多様性の中で探り求めて行きたいと思っています。そして、たとえどんな働きであっても、私の求める働きは、教会の働きを専業とするものとして考えています。

私はすべてを見失いかけた中で聖書が、教会があるということは確かなことだと知りました。私はその方向に向かって求め、歩んで行きます。私にはその方向しかありません。途中、試練があっても決して目をそらさないつもりです。たとえ倒れるような時でも、牧師・宣教師の方向から目を離さず、前を向いて倒れたいと思います。そして、たとえ絶望の淵からでも主なる神が私を起き上がらせ、その方向に向かって歩ませてくださると信じています。導いてくださる主に信頼して、たとえ迷い、戸惑いの中でも安心して進んで行けると信じています。

《略歴》

一九九〇年四月。ボブ・オデール宣教師に出会い、仙台教会のサーチライトクラブに通うようになり、同年五月、同師や竹之内兄に誘われて仙台教会の礼拝に初めて出席。教会に交わりの温かさを知り、続けて通うようになる。同年八月、東京からの青年伝道チームの修養会に予期せず参加、多くのクリスチャン青年たちとの交わりからクリスチャンに対する偏見が薄れる。また、自分自身について深く考えるようになる。同年十一月頃から子供たちとの遊びを通して教会生活が生きがいとなる。

九一年一月。木皿陽子姉のバプテスマ式を見て、初めて自分のバプテスマについて考えるようになり、同年三月三十一日のイースターに仙台教会で金子牧師より受浸。

九一年四月より教会学校中学科の教師となり、九三年四月からは中学科書記として奉仕する。また、九一年より毎年、全国少年少女大会リーダー研修会に参加。中高生との関わりが自分のミニストリー（職務）として意識されるようになる。

九一年五月より一年間、東北連合青年会会長となり、修養会の開催準備等を通して東北の諸教会の実情に触れる機会が与えられる。同年八月。友人に誘われ、フィリピン・ネグロス島でホーム・スティをする。海外でのボランティア活動を考えていたが、自分の無力さを知り、自分の中の確かなものを捜し求め、『信仰』について考えさせられる。自分自身の基礎を聖書から始めたいと考え、神学校を意識するようになる。

九二年三月。サーチライト・クラブのアメリカ・ホームステイに学生リーダーとして参加。このリーダー訓練やサーチライト・クラブでの奉仕を通して、学生伝道の重要性を感じるとともに、自分のミニストリーとして考えるようになる。

九二年四月より二年間、仙台教会の青年会長となる。青年会活動、特に夏の伝道旅行を通して多くの学びが与えられる。同年五月。西日本教会学校研修会に参加。同時に西南学院大学神学部を見学、神学部受験を強く意識するが、決断に至らず。九三年七月四日。神学校週間特別礼拝で神学部受験決意表明の証しをする。

（一九九四年一月二十三日）

献身決意表明

佐原玲子

私は二十二歳の時、東京第一バプテスト教会でバプテスマを受けました。

大学を卒業し、教師か公務員を目指していた私は、三月末までかかった世田谷区の第三次選考の結果により、残念ながら会社員として働くようになりました。職場は丸の内で貿易事務を扱う仕事で、大手の商事会社の中で子会社からの出向という形で勤めていました。

大きなコンピューターを使い、それはそれなりに小さいながら責任を持たされ、お茶くみやコピー、何でもありのOLといった感じではなかったので、仕事としては大変面白く、私に合っていると思えました。

また、俗に一流企業と呼ばれる会社の女性の場合は、自宅通勤でコネクションがなければ決して正社員となれないことや、そこで働く女性社員と何ら変わらない仕事をしていても、高卒者のボーナスが、大卒の私の一年分のそれと同額であったことなどの内情を知るにつれ、これでは、目の色を変えて一流企業を目指すのも無理からぬ話だと思えたものでした。

しかし、私が矛盾を持ち、さらにジレンマに陥ったのは、そうした一見差別とも思える職場環境ではなく、民間の会社のハードな仕事量をこなさ

なければならないことによる、生活環境の変化でした。

残業、残業で、次第に体は疲れていき、そのことによる教会生活の変化でした。必ず行っていた祈祷会は、残業のために月に一～二回となりました。土曜日に小学科のための準備や椅子を揃えに行くこともなかなか出来なくなりました。日曜日の礼拝を守るのがやっとのこともあったのです。

自分の生活を自分の力で支えるのは当たり前です。しかし、そうすることによって、教会のさまざまな奉仕ができなくなることが、とても辛いと思えました。生活のために働くことは大事です。しかし、働くためだけの生活規制が要求されていくようでした。

そんな時、「あなたの信仰はだんだん弱くなっている」と言われて大変ショックを受けました。

そうした中で、同じ教会の青年の方が東京バプテスト神学校で学んでおられ、いろいろなことを教えてくれました。そして、次第に教会に携わる仕事というものを意識して考え、祈りの中で真剣に神学校に行くことを導かれているように思えました。

しかし、当時の私には貯金などはほんのわずかしかできない状態で、学校に行くには、何年もかかるように思えましたし、次第に体調が崩れて来ていたので、進学には漠然とした不安がありました。結局、生涯一信徒として教会生活を送っていこうという決心をしました。そして、何とか両親の救いをと願い、実家に帰り、父の仕事を手伝って両親と共に暮らしていくことが、私に与えられている道だと思ったのです。

体の不調は決定的なものとなり、病名が分かり、周囲の人々の「怠け病」のレッテルからは解放される身となりましたが、これからの生き方をさらに修正するように迫られるものを感じて、病気とはまた別の大きな悩みの中で祈る日々でした。

一九九〇年、女子献身者修養会に参加することが許されました。そこで、私は、たとえどのような状況であったとしても、ありのままの自分を捧げるのが献身であるということを学びました。

神様がすべてのことを導いてくださること、自分独りよがりの判断は、たとえ世の常にかなっていたとしても、愚かなことだということも学んだのです。

その時は、どうして二十四歳の時にあのような決断をしたのかと大いに悔やまれました。それは、過ぎ去った月日が、とてももったいないように感じたからです。

しかし、参加当時の状況は、その時よりもさらに悪くなっているように思えてましたが、私はそこで献身をまず神様の前に表明することが、とても大事だと思い、決心したのです。

その後、私は「あなたがたのうちに良いわざを始められた方が、キリスト・イエスの日までにそれを完成してくださるにちがいないと確信している」（ピリピ人への手紙一・六）の言葉に励まされながら、さらに闘病を続けました。

しかし、その闘病は、献身への道とはまったく逆の方向へ神様が私を導いているように思えるほど、ひどい痛みの伴った大変きついものでした。けれども、そうした中で、さらに祈りについての修正を迫られたのです。「今が良くないので、このようにしてください」という祈りではなく、「今ある状態をそのまま感謝した上で願い求めること、つまり、神様この痛みも感謝します」と祈りが変えられたのです。「神の御心をすべて感謝して受ける」ということを学びました。

それから私は、再び健康を頂くことができ、そして、現在のように東北学院大学キリスト教学科で学びを続けております。

私は、もう二十四歳の時の決断を公開してはおりません。すでに、私はその時の私自身ではないからです。さらに、これからも変えられていくことを望んでおります。

今回も初めから西南学院大学神学部に進んでいたらと、ふと思うこともありました。しかし、私は、健康もさらに祝福され、多くの人々との交わりの中で、さらに自分自身を変えられるための産みの苦しみをしており、また、それすら支えてくださる人々があるこの現在の状況を心から神様に感謝しております。

「神は、神を愛する者たち、すなわち、ご計画に従って召された者たちと共に働いて、万事を益となるようにしてくださることを、私たちは知っている」（ローマ人への手紙八・二八）のみ言葉は、これまでの私の支えでした。苦しい時、一日に何べん唱えたか分かりません。

これからは、このみ言葉に仕える者になりたいと願っております。将来、どのような神様の導きを頂くかは分かりませんが、バプテスト連盟の教会の働きに加わりたいと願っておりますので、神様が許されるのでしたら、東北学院を卒業後、西南学院大学神学部に進み、教会に使えるための学びをさらに続けていきたいと願っています。

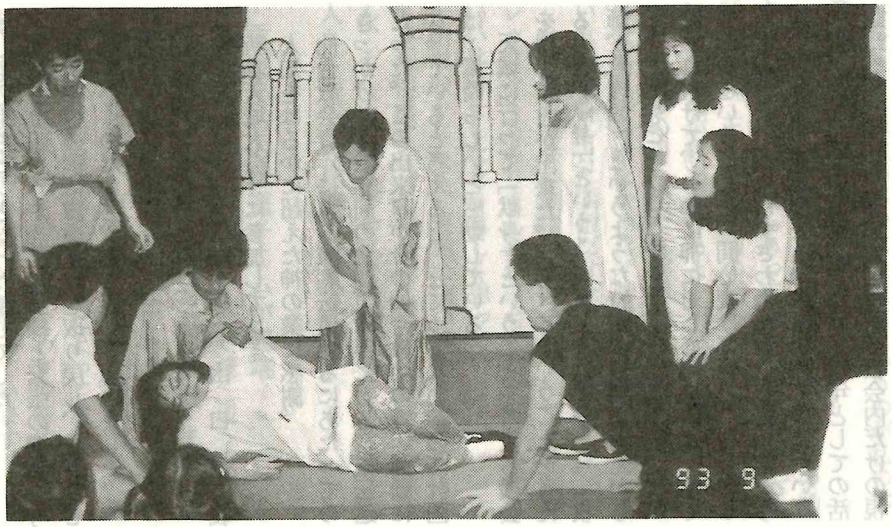
（一九九四年十一月十三日）

94天城公演「神の道化師」

この感想文は一九九四年一月三～四日に天城山荘で行われたバプテスト信徒大会への劇参加者の、参加を通してまたは自分自身を振り返っての感想を短く綴ったものです。ご支援頂いた感謝の気持ちと教会の働きとしての分かち合いの意味として読んで頂きたいと思います。

私たちはこの天城参加が青年会の活動を超えて教会から派遣された者たちの教会の働きであったと考えて、感謝しております。（草島　豊）

原作……トミー・デ・パオラ
脚色……石垣政裕
作曲……横山理香
演出……石垣政裕
舞台監督
舞台美術……一瀬千恵子
同……長尾純
音楽・効果……山口信義
演奏……田中緑
制作・照明……石垣慶子
小道具・衣装・大道具……小林孝男
○登場人物
道化役者1・見物人E……金子まきこ
道化役者2見物人F……佐藤俊彦
道化役者3・見物人D……小松譲治
道化役者4……竹之内裕文
親方……草島豊
ジョバンニ……秋葉真紀子
見物人A……関場弓枝
見物人B・修道士3……小松真理子
見物人C……早坂いずみ
修道士1……渡辺義人
修道士2……北川寛之



むかし青年だった頃のジョバンニくんへ

石垣政裕

歳老いた　きみは　ひとびとに　見まもられ神のもとに　召されて　行きました。

そのきみの物語は　出会うたびに　出会うひとびとに　感動を残してきました。　これからもきっと　教会の伝道の力になると思います。

天城で、きみの物語は　わたしから離れて、一人で立派に歩いているのを　わたしは

この目を細めながら　喜んで見ていたことを告白します。　だから、もう、わたしは

きみの物語を　追いかけることはないと思います。

実は、自分で書いておきながら、わたしにはきみの　人生の中で　どうしても　気になることがあって、どうしても　とりこぼしがあったような気がして、これからそれをなんとかしなければならないのです。　それは　若いときのきみが見捨てて行った

あの旅芸人たちの行方なのです。わたしは　「神の道化師」の中で、きみが　歳老いてからの場面を　きみが　若くて　絶頂の時に　どんなことをしたかということを問わずに　作ってしまいました。　だから、つぎに作らなければならないのはちりぢりになった旅芸人たちの　一人ひとりの物語だと　思えてならないのです。

そんな考えは　心のどこかに　押し込めておけ

ばよかったのですが、天城で　あなたの物語を演ずる青年たちを　見ていたら　急に頭をもたげてしまったのです。

一、〇九二キロ先の新たな生命

石垣　慶子

信徒大会へ送り出して下さった仙台教会の皆さまに心から感謝致します。

一月二日、日曜日。今年初めての主日礼拝後の午後二時十五分、信徒大会に向かって車は出発しました。この日は高速を通って一路、浦和まで。連盟事務所に一泊させていただいて明朝天城まで。三日、全日共々帰省渋滞に巻き込まれながらも午後二時すぎ無事天城山荘に到着。すぐに伝道劇の準備、練習。四時からの開会礼拝、そして七時からの伝道の夕べのプログラムの中で青年方の証し、小林先生のメッセージ、「神の道化師」を致しました。四日は朝食後出発、仙台へ向けて直行、午後六時教会へ到着。一、〇九二キロを走った私ですが、目に見えることをはるかに超えて何もかも守って下さった神様に感謝をして、また新たな生命（いのち）を頂いて、留守を守ってくれた家族のもとへ帰ることができました。

神様が成長させて下さる

一瀬　千恵子

劇の準備が整い、私たちはチャペルの一番前の席に陣取りました。これから礼拝が始まるという時、突然、義人君が「ねえ、みんな、劇が始まる前に外へ出てお祈りしようよ。みんなに伝えて」と、言い出しました。

ヨッちゃんのあの時の真剣な顔、健気な小学生を見ているような気になり、私は一瞬、のどがつまり普通の声では話せませんでした。

伝言はたちまちリレーされ、メンバーたちの背すじも心もちピンとなった感じでした。

私たちは、こうやって、試練と緊張の機会を与えれ、神様の前に謙虚な心を取り戻し、成長させられていくのだなあ、としみじみ思いました。

劇を通して献身を知る

山口　信義

「新春天城大会」に参加して

人知をはるかに超えた神の業に感謝。

仙台教会青年による演劇伝道するにあたってのきっかけは、数年前の北関東青年による音楽伝道だった。この出来事が今の仙台教会の青年活動になっていると考えると、とてつもない神のご計画は、素晴らしいと感動している。

天城に行って「献身」ということを考える機会を得ることが出来た。「献身」ということを考えるとき「献身」ということは、…になること。（牧師、看護婦）というような特定の事柄と考えがちだが、献身ということが「今」という時を問われ、問われ続けて、いかに神に対して何を献げ続けていくかということを、問い続けていくことではないだろうか。劇にたずさわった者として、神から与えられている賜物をもっと活かしていきたい。

青年会としての活動、または、青年としての活動は、教会内の活動も大切だが、教会内だけの視点だけではなく、東北、全国、世界へと、大きな目で、果たして何が出来るのだろうか、何をさせていただくのだろうかと、期待しつつ、からし種のような小さな種をあちらこちらへと、蒔き続けていきたい。その種を通して、何か刺激を受けてくださればとても幸いなことである。

今という時、天城へ行かせていただいことを心から感謝し、指導してくださった、石垣さんに感謝する。

目頭が熱くなった

長尾　純

このたびは劇の裏方を手伝わせて頂き、感謝、感謝の雨、嵐です。裏でただ声を聞いているだけでもとても感激感謝の洪水でした。何度聞いても目頭が熱くなるのはやっぱりそれだけ劇が素晴らしかったという証拠だと思います。みんなそれぞれ自分の役にぴったりとはまっていって、その人の顔を見るたびに劇での姿を思いだしてしまいます。みどりさんのピンクのドレス姿や竹之内君の…etc.

とにかくこの劇のために献金してくださった一人ひとりに感謝します。

仲間が本当に誇らしい

田中　緑

私は今回も、前回と同じようにピアノを弾かせていただきました。他のみなさんのように体を張った芸をお見せできずとても残念です。―というのはウソで、そういう素晴らしいことができないのでできることで参加させていただいた、というのが真相です。その上あんな素晴らしい衣装を着せていただき、別の意味で誰よりも目立ってしまいました。

ここまでの道のりは、一人ひとりの忙しさも手伝って、決して楽ではなかったと思いますが、今

はやって良かったなあという充実感で一杯です。そして天城でみんなが演技しているとき、私は、他人事ではないのですが、みんなを本当に誇らしく思いました。

このような機会が与えられ、みんなで劇を成功させられたこと、そして私たちを応援して下さった方がたくさんいたことを幸せに思っています。

言葉の壁を越えて語りかけた

トレイシー・ジョーンズ

私は天城に行ってとても楽しかったです。私がジョバンニの劇を見るのは二回目でした。私の日本語は初めて劇を見たときからそれほど上達していませんでしたが、その劇は言葉の壁を越えて語りかけてきました。あなたがたの賜物を神に捧げよという劇のメッセージはとても力強いものでした。そのような素晴らしいチームの一員として行けて、とても嬉しく、楽しく思いました。みんな、とても素晴らしかった！

神様のイタズラはス・テ・キ

秋葉　真紀子

一月三日朝七時三十分に私はいっちゃんと眠い目をこすりながら新幹線に乗りました。そこで私が考えていたことは「やっぱり本当に行くことになっちゃった」というノンキなことでした。四月に青年会へ仲間入りした時には、まさかこのように新年を迎えるとは思いもしなかったのです。

思い起せばあれは去年の六月頃…。毎年恒例（であったらしい）の劇についての例会が石垣さんを囲んで開かれていました。「神の道化師」の配役を決めていたのです。私は青年会の新人ということもあって身を潜めていたつもりでしたが、神様のイタズラか主役であるジョバンニの役をいただいてしまいました。

小学校の学芸会以来の劇です。「こりゃあたいへんなことになっちゃた！！」というのが私の本音でした。

それでも石垣さんのご指導とみなさんからの励ましとお祈りのお陰もあって山形での上演は大好評でした。天城での上演の話も私にとっては寝耳に水でしたが終えてみると充実感で一杯でした。

天城からの帰り道で私が思っていたのは「天城に来れて本当によかった。神様のイタズラもこういうのはほんとに素敵だな」ということです。

今回の青年会の劇は初出演の初主演で、正直プレッシャーもありましたが、今となっては本当にいい体験をしたとうれしく思っています。

山形のみならず、天城公演の機会を与えてくださった神様、送り出してくださった教会の皆さん、そして力足らずの私を指導励まして下さった人々に心からの感謝で一杯です。

東京からの伝道チームが発端

渡辺　義人

天城に行った意味を考えられるほど、まだ冷静に公演旅行を振り返ることができません。何を得ることができて、何を分かち合うことができたのか。この公演旅行が神の導きによってなされたものなら、多分、何年かあとになって理解することが出来る事柄もあるのではと思っています。

でも一つ、天城に行って再認識したこともあります。この公演、というより青年会恒例になっている夏の伝道旅行は、東京地区からの青年伝道チームの存在があったからこそであり、私たちが天城に行くことになったのもそのお陰であるということです。

もう四年（だと思う）前のことであり、今の青年会メンバー全員が直接かかわったわけではないのですが、たしかにあの時の伝道チームの働きが在仙の青年たちに刺激を与え、私たちの中から外に出て行って働こうという思いが生まれたのでした。はたして天城に行くことがなかったならば、このことに気付いたか、ちょっと自信がありません。天城でその時来仙したメンバーの何人かに出会い、私が、神の計画の中で活かされている実感を得ることができました。本当に感謝です。

公演は神様のご計画

北川　寛之

僕は始め、天城に行くのにあまり乗り気ではありませんでした。というのも、わざわざ遠くまで行って劇をして伝道隊だと喜んでいったい何になるんだ（このジョバンニは！…）と思っていました。本当に伝道なのか？といろいろ考えました。せめてもっと近くで、それこそノンクリスチャンの人たちを対象に何かないのだろうかと思いました。

しかし、それは僕の傲慢に過ぎませんでした。自分の考えで勝手に結果について評価しても、神さまの計画の前では何の意味も持たないのです。神さまはまず始めに、わざわざ行っても何になるんだ、という僕の思いを打ち砕きました。一つの劇がこれほどに人の心を動かすのか、演じていながら僕は今まで何も気付いていなかったのです。

かつて、仙台へ劇をしに来た人たちとも交わる

機会が持てました。彼らの劇が今の仙台教会の伝道隊を作るきっかけとなったことは、まさに神のみ業としか言いようがありません。今回の天城への参加は改めて自分たちの活動について振り返るいい機会になりました。また神さまに委ねていくことを改めて知りました。

心をひとつに演じる

小松　譲治

今回の劇を演じて一番教えられたのはスポットライトに当たるということが、非常に気持がいいということであった。本当に舞台をやっているなと体で感じることができて楽しかった。

劇の前の小林先生のメッセージといい秋葉さんの証しといいとても良かった。お二人の活躍により「神様の栄光のために！」とみんなが心を一つにして演技をまとめることができたように思う。

これからもみんなで力を合わせて私たちの主役であるイエス様にスポットライトを当てて行きたい。

唯一心残りは、きれいなお星さまが見れなかったことであった。

すべての賜物を神様に

小松　真理子

神様の不思議なご計画によって仙台教会青年会の交わりに加えられ、今回この劇に参加できたことにとても感謝しています。中学時代、演劇部に所属していました。卒業してからは劇に縁がありませんでしたが、この様な形で、また演じることができ嬉しく思います。

修道士がジョバンニに「つねに神様のことを覚えなさい。あなたの芸の栄光は神様の栄光なのです」と語る言葉は私の胸にも響いてきました。私たちの持っているすべての賜物を神さまのためにささげていきたいと思います。

すべてが神様の恵み

佐藤　俊彦

今回天城での公演をさせていただき、感謝致します。

すべてが神の恵みであり、すべてがみなさまのおかげだと思います。私は三日間すべてのプログラムに参加させていただいたのですが、すべてが僕自身にプラスになったとは限りませんでした。まあでも今回は僕自身が劇をしにいったので細かいことは全く気にせずこれからも仙台教会でいろいろやっていこうと思います。

献身を支える小さな献身

関場　弓枝

今回の劇の公演は、正直に言ってとても戸惑っていました。けれども神様は「そんな心配は無用」とちゃーんと道を用意してくださっていました。ですから、今は、とても消極的だった自分に高慢ささえ感じています。けれどもそのような私をぐいっと引っ張ってきてくれた青年のメンバーと、その陰にあった多くの方の支援と祈りとを覚えると、本当に感謝です。

「献身」が大会のテーマでしたが、この劇も青年が演じることだけが、特別なことだったのではなく、これを支え、祈ってくれた多くの方の小さな「献身」が大きな形になったのでは、と思います。そして、その一部分として私も働けたことに、今は喜びを感じています。

全国の人に自慢できる

金子　まきこ

新年早々なんてあわただしく超疲れるスケジュールだったんだあ！と思うと同時に、それ以上に、なんて神様に祝福された日を与えられたんだろうっ！て思います。

天城行きが決まるまでには様々な問題でみんな悩んだし、スケジュール的にも大変な人はたくさんいました。でも天城行きの話が出たとき、私はただ単純に「神様が私たちを用いようとしてくれている」と思ったから嬉しかったです。そして、その声を受け入れてがんばったみんながとっても嬉しかったのでした。

一人の力は小さいけれど、神様によってみんなの力が集められて、その力を神様が用いて下さる、そこで一人ひとりがまた恵みを与えられる、とっても感謝なことだし、とっても嬉しいことだと思うのであります。そして、全国の人に自慢できる仲間がいることが本当に嬉しかったし、みんなのこと誇りに思うのです。

だからこの天城公演、体はくったくたになったけれど、神様の恵みをいっぱい受けてこられたし、大切な仲間と一緒に過ごし、力を出し合えて、心から感謝感謝の嬉しい日となったのでありました。

みんな本当にお疲れさまでした！そして運転してくださった小林先生や石垣さん、協力してくれた仲間、私たちのために祈り、支え、送り出してくださった各教会の皆様、そして私たちを用いてくださった神様に心から感謝です。

今だから出来る、今しか出来ない

早坂　いずみ

今回、本当に教会全体を巻き込んでの信徒大会への参加でしたが、神様に守られ、私自身とても満たされて行ってくることができました。思いがけず連盟から声がかかり、始めは「うそでしょう」、「冗談でしょ？」と本気にしていなかった私ですが、みんなで話し合い参加すると決め、当日に向かって準備する過程は大変な半面、楽しいという気持ちもあったと思います。終わってみると、色々な意味で「今だからできる。今しかできない」と感じています。

大会の中での小林先生のお話にあったように、神様のご計画に常に応えられるような柔軟な気持ちでいることの大切さも知りました。

神学部入試への心の整理

草島　豊

今回の天城公演は青年会だけでしようとすれば、出来ないことでした。最初に天城での奉仕を聞いたときも驚きと同時に不安も多くありました。それが出来たのも教会の皆さんからの励まし、支えがあったからだと思います。

つまり教会の出来事であり、青年会が多くの人々から支えられていると同時に自分たちの行いは、今回に限らず自分たちだけのものではなく、今まで気づかなかったけれど実は教会の出来事であったことに気づかされました。

それは今回の天城公演で自分たちの力の限界を知ったところではっきりしました。そういう意味で教会のサポートは青年会に対するもの、を超えて大きな意味があり、青年会を教会がサポートした、というより、天城公演自体が教会の働きであったことを嬉しく思います。その交わりの中で青年会が養われていることを感謝し、導かれる主を讃美します。

そして個人的にも天城大会に参加することで多くの恵みを与えられました。献身についてゆっくり考える時が持てました。飛び出していこうとしている多くの友を知りました。そんな時間が西南学院神学部入試に向けて心を整える時となりました。

今まで青年会のリーダーとして用いられたこと、その中で多くの学び、励ましが与えられたことに感謝します。今まで様々な青年会の活動をしていった中で、青年会が多くの方々からの見守り、励まし、助言、支えの中で、そしてそのような交わりの中で活動できたことを嬉しく思います。その主の交わりを感謝します。その仙台教会で過ごしたからこそ、僕の神学部への思いも養われていったのではないかと思います。

多くの青年はこれから仙台教会から離れ、ほかの町へ派遣されていくでしょう。そして仙台教会の交わりの中で主から与えられた恵みを携えて遣わされることと思います。教会の交わりを通して養われ導かれる主の御業に感謝と讃美を捧げます。そしてこの仙台教会の交わりの中で、若き日に造り主を覚え、共に主を誉めたたえる恵みに与かったことに感謝します。

我々のガリラヤは…

竹之内　裕　文

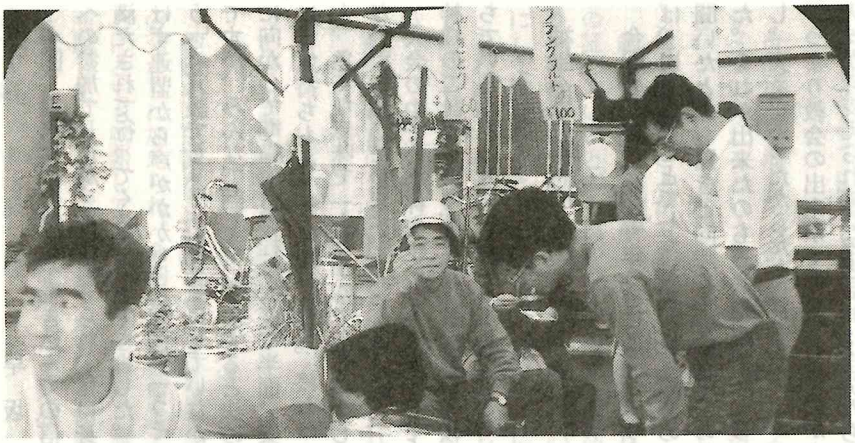
バプテスト連盟と仙台教会、大富伝道所からの惜しみない援助の下に、天城山荘でのバプテスト大会に参加させて頂き、心から感謝しています。大会の趣旨などはたいして気にも留めずに天城まで行ったのですが、大会のテーマは「私の献身」というものでした。献身を促す最後の晩のプログラムで江原宣教師は「献身＝主の宴会への招待を受けること」と説き明かされました。僕はその場の雰囲気に流されまいと反発しつつも、「主が先立たれている地（ガリラヤ）への主の招待を受けよう。主は世界中に先立たれているが、今の自分は仙台教会をガリラヤとして招待を受けよう」と決めました。

今回の全国デビューまでには、長いステップがあったことを思い起こします。そのうちの幾つかは、仙台教会の出来事でしたし、そのうちの幾つかは、外からの招待を受けたものでした。石垣さんの協力の下に、大山校長を中心として教会学校教師による劇を試みたこと、東京北地区の青年たちのユースフェスティバル（一四一でのコンサート）に刺激され、郡山伝道所にいた佐原姉から依頼され、郡山伝道所に伝道旅行に出掛けたこと、郡山では何の芸もなく、ただご馳走を頂いたこと、音楽その他に様々なタラントを持った仲間が次々と加わって来たこと、オデール師の誘いで、三沢のユースラリーに参加し、劇を演じたこと、などなど。

初めは全くフリーな立場から始めたこのような青年の活動も、年々、特に大富伝道所に人生・信仰の先輩たちを送り出して、教会の役割を少しずつ担い始めてからは、負担に感じ始めていたように思います。

「ただでさえ忙しいのに、これ以上奉仕（劇）な

んて」どこかにこんな気持ちがあったのでしょう。青年内部の人間関係も険悪だったように思います。正直言って、これまでは劇の本番に皆が一体となり、見ている人たちが喜んでくれる瞬間だけが心の支えでした。「いろいろ大変なことはあったけど、何のかんの言ってもこれだけやれる仙台の青年は最高だし、惜しみ無く押し出してくれる仙台教会は最高」だと。



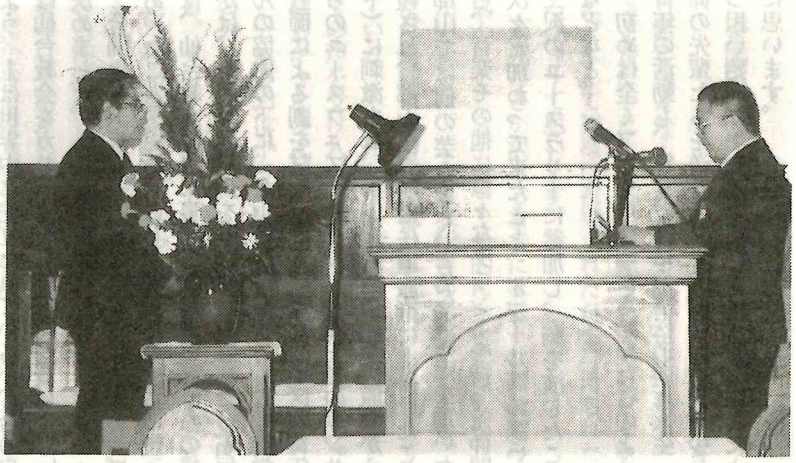
壮年会のメンバーによる焼き鳥コーナーはいつも人気です
第15回教会バザー（1985年）

この大会に最後まで参加できて本当に良かったと思います。主は、見えていなかったことを見せようとされたのでしょうか。連盟の先生方、スタッフの方々、参加者の皆さんは、大会中会う度に、「ありがとうございます。本当に素晴らしい劇を」と何度も言われました。「費用を負担して頂き、お礼まで頂いて、こんなに恐縮されるとは、一体どうしたことか。『大会への参加費を全額無料にするからぜひ全日参加してくれ』とまで言われて参加した大会のに…」

少しずつ疑問を抱き始め、問題設定が変わっていきました。僕たちが、「献身にはこんな素晴らしい形がありますよ」と一例を示す何かを持っていて、それを見せに行ってあげた訳ではない。スタッフ、参加者が、「ここにも主が働いておられます」といって僕たちを参加させて下さり、拾い上げてくれたのだと考えざるを得ませんでした。

他教会の青年たちとの分科会、夜を徹しての交わりから、彼らにも僕たち以上のタラント、演じ得るものがあることを知りました。それにも関わらず、僕たちの劇を引きずり降ろすことなく、喜んでくれる彼らを成熟していると思わずにはいられませんでした。呼びもしないのに、部屋まで遊びに来てくれた小さな教会の開かれた青年たち。全国レベルの交わりについて夢を語ってくれ、青年大会の在り方について熱心に語ってくれた青年たち。東京北地区の青年たちとも四年ぶりの再会を心から楽しむことができました。彼らも四年後のこの僕たちを想像さえできなかったことでしょう。

僕たちの劇も形はわかりませんが、このように用いられて行くことでしょう。既に「僕たち」のものではないと言えるかも知れません。自分たちの思惑、想像を超えて用いられ、また逆に、引き出すことのできるように、いつでも外に対して、そこで主が宴会を開かれる場所へ、開かれた青年・招待を受ける準備のある教会であれたらと願っています。（長くなって皆さんごめんなさい）



金子純雄牧師仙台教会牧師就任式（1985年1月）

仙台教会の週報には牧会通信、礼拝プログラム、お知らせ、前週の説教要旨などが掲載されています。ここまでは他の教会の週報と同じですが、週報の最後に「私の応答」という特別なコーナーがあります。このコーナーはいわば、「ミニ証し」のようなもので、礼拝出席者が礼拝の中で祈ったことや、メッセージに対する自分の感想（応答）を短くまとめたものです。週報を単なるお知らせに終わらせることなく、神様への応答として書かれたものです。

ここで紹介する「私の応答」は一九九四年の週報から抜粋したものです。表題は説教題、カッコの中は聖書の個所と説教者の氏名です。

「救いを見る」

（ルカ二・二五～三五・金子純雄師）

早坂　とし子

年老いたシメオンはひたすら救い主を待ち望んでいましたが、やっと幼な子イエス様を見て、イスラエル人だけでなく、この世の救いと慰めを与えられると信じ、大いなる喜びと平安を与えられました。

救い主イエス様にお会いしたシメオンの喜びと平安が、私たちの喜びと平安になるように祈りたいと思います。

新しい年を迎え、私たちは心を新たにして、救いを自分たちのものだけにすることなく、隣人と分かち合って生きていけるようにしたいと思います。

昨年、日本列島を襲った様々な災害のため、嘆き、苦しみ、不安の中にいるたくさんの方々を思うと心がとても痛みます。病の床に伏している方々や、試練の中にいる方々を覚えますが、私自身では何もできずに悲しくなることもあります。

でも、救い主イエス様はすべてをご存じです。すべての方と共にいて下さり、いつも励まし、力を与え、道を備えて下さり、溢れる恵みで満たして下さっていることを思うと、私は喜びと感謝の気持ちで一杯になります。（一九九四年一月二日）

「新しく造られた者」

（Ⅱコリント五・一七～一九・金子純雄師）

小松　譲治

私は一九七八年のクリスマス、まだ中学二年の時にバプテスマを受けていたが、本当の意味で神様によって変えられたのは、大学受験に失敗し、孤独の中で浪人生活を送っていた時のことだったと思う。（浪人生活は時間がたっぷりある。浪人生活バンザイ）

暇を持て余して聖書を読んでいると、ふとヨハネ福音書一四章が目に止まった。そこには聖霊のことが書かれてあった。私が聖霊の存在を知ったのは恥ずかしい話、その時が初めてであった。そして、今まで何とかして自分の力で自分を変えようと、いわば行いによる義を求めていたことに気付かされ、人が義と認められるのは、聖霊の働きによるもので、神様の一方的な憐れみ、恵みであることを知ったのである。

五枚橋兄のお言葉を借りれば、正に自分の心ををさえぎっていた蓋が取れたようで、真理を知った喜びで身震いしたのを今でも覚えている。その時から、罪の奴隷から解放され、キリストにある自分の中を歩ませてもらうようになった。新生ジョージの誕生である。

誠に欠点の多い人間であるが、皆様と共にキリストにあって、さらに新しくされたいと願うものである。（一九九四年一月九日）

「逃げるよりも早く」

（マルコ一四・二七～三一・一六・一～七・濱野道雄師）

小林　啓子

来仙して十カ月を経たという師の顔を眺めていて、ああ、良かった、南光台に馴染んで下さっている、と思った。仙台へ来られるまでは、いろいろな思いがあったであろうと推察される。牧師といえども、新天地でのスタートには不安や揺れもあって当然であったろう。しかし、きょうの説教には、師の清新、かつ希望にあふれる信仰があった。若さにはいささか遠くなったオバサンは目を覚まされるようであった。

教会は心の故郷、ガリラヤでありたいものである。避難所であり、慰めの地であり、小さき者の居場所、そして、主のおられる地である。ガリラヤは教会の中だけと言わず、また、「ここの教会、あそこの教会」、あるいは「仙台だけ、東京だけ」などと言わず、あまねくガリラヤの里にしたいものである。さあ、出掛けよう。主が一歩先んじて待っておられる。

師夫妻には仙台教会の青年たちも大いに世話になっているとか。また、大沼姉結婚後、仙台教会からオルガニストが奉仕に上がっている。みんな

で一緒に宣教伝道を担い合いたいものだ。

さあ、若き伝道者の牧会に祈りのエールを送ろう。

（一九九四年一月十六日）

「賜物を頂いているのだから」

（Ⅰペテロ四・七～一一・金子純雄師）

一瀬　千恵子

「賜物」については、前にも「応答」で書いたことがあります。一年に一回あるかないかの応答の機会なのに、続けて「賜物」について書くということは、神様がよくよくそのことについて考えなさい、といっているように思えてきます。前回は一九九一年六月「同じ御霊の働き」（Ⅰコリント一二・一～一一）という説教に対するものでしたが、「自分にはいったいどんな賜物があるのだろう」と暗中模索している内容でした。

その二年半の間に、私にはいろいろな機会が与えられました。とりわけ、師との出会いによって、事象の見方や思索の方法を導かれているうち、自分の賜物について、「これがそうなのではないか」、「これを生かし伸ばしてみよう」という思いを持つまでになりました。まだ具体的にそれを実現するまでには至っていませんが、神様が背中を押して応援してくれているような気がするので、祈りつつ、大胆に歩んでいきたいと思っています。

（一九九四年一月二十三日）

「産みの苦しみと喜びに生きる」

（ガラテヤ四・一二～二〇・松見俊先生）

石垣　慶子

松見先生、伊藤先生のこの度の来仙、お働きに心から感謝申し上げます。

「まず、イエス様がスチュワードして下さったのだ。今、私は何をすべきかを考えてみること」との松見先生からのメッセージは、私の中に響いています。常に、私の先にはイエス様が立っていて下さる。その後に従ってすべてのことを考えてみると、「私のような者が…」とか「私より、もっとほかの人が…」という考えは起きてこないものなのです。

とかく、私は気負い過ぎたり、うまくいかないと落ち込んだり、浮き沈みが激しいものです。でも、もっともっと自由に私自身を飛び立たせることができるのですから、世の憂いに振り回されて、くよくよし過ぎたりせずに、先立つイエス様と共に、どのような状況の中でも前向きに、自主的に生きてゆきたいと思います。

その中から、また、きっと私のなすべきことが分ってくるでしょう。（一九九四年一月三十日）

「御霊で始めたのに」

（ガラテヤ二・一九～三・五・金子純雄師）

成田　磨理子

「御言葉を聞く」ということがいかに大切なのか、きょうのお話で学びました。日々の生活の中で、み言葉をお説教を通じて、また、教会学校で学ぶたびに心新たになります。しかし、心新たになりながらも、何気なく時間を過ごすうちに、その気持ちが薄れがちになり、時には何から始めたのか、始まったのかすら忘れてしまうことがあります。そのような時、自分の信仰心の弱さを思い知らされます。けれども、そのような時に励まし、勇気を出させてくれるのもみ言葉です。そのような素晴らしいみ言葉をまだ一度も聞いたことがない多くの人にも伝えていけるよう、そして、神様に心を開くことが出来るように、心から祈っていきたいと思います。

PS・今までに聖書を読んだことのなかった私の父が、最近、聖書を読み始めました。そんな父のため、そして家族のために、私事ではありますが、どうぞ祈って下さい。（一九九四年二月六日）

金子牧師夫妻はキング&クィーンでご満悦

（一九九二年九月二十六日）

「イエス・キリストの系図」

（マタイ一・一～一七・金子純雄師）

内野正子

始めに聖書はつまみ食いしないで根気よく読むことと言われました。通読中、旧約の人名の多さに悩んでいましたが、きょうイエス・キリストの系図に当たり、今までイエス・キリストは「神の御子」で系図と聖書に書いてあるのに深く考えたこともなく過ごしていた思いです。系図は血筋やそれを誇るために表すことが多いと思っていましたが、旧約時代を生きてきた人々が王を立て、服従するものがあり、利害が生じ、罪を作ってきたことは、日本人として、自国の歴史と重ねて思うところもありました。

私にバプテスマを授けてくださった前教会の牧師先生から求道中、新約聖書の通読をするように言われました。一年位かかって読み上げましたが、本当に何も知ることができませんでした。また先生は聖書やキリスト教を知識としてからバプテスマを受けようとしたら、生涯機会はないでしょうとも言われました。先ず救い主を信じて、それから聖書を学ばなければ、いくら聖書を覚えても信仰と結び付かないのではないでしょうか。「信じて知る」と教えられました。

（一九九四年二月十三日）

「キリストにある自由」

（ローマ一〇・五～八・竹之内裕文兄）

中山ちえみ

きょうは私の誕生日であり、十七年前に洗礼を受けた日でもあります。この日に「応答」を書くことは、神様が今の私に与えられたことのように思われました。最近の私は、教会へ行くことが義務的になり、ここに来て六年、「～のために」からくる不自由さを感じながら月日が流れ、教会に馴染めぬまま、自分を失い、クリスチャンであることが窮屈になり、教会へ行く目的を見間違えていました。

その中できょうの竹之内兄の説教は、正に私のためのメッセージでした。自己中心的に物事を捉えていたことに気付き、信仰によらないで、行いによって得られるかのように、神の義を追い求めていたのでした。

十七年前、邪悪な心を捨てて洗礼を受けたときの原点に戻り、神を信じるゆえに信じ、そこからくる自由、そして、祈りに基づいて行動することによって信仰は強められることを改めて教えられたように思います。

（一九九四年二月二十日）

「信仰によって生きる」

（ヘルブル一一・八～一二・金子純雄師）

広島憲子

自分だけの力では、人を許すことも、愛することも出来なかった私に、神様は信仰という恵みを下さいました。それまで、たくさんの悩みや不安を持って苦しんでいた私は、神様にすべてを委ね、信じて従っていくことで、たくさんの罪から解放されたのです。まさにこの恵みは、「ただ、ひたすら主からのもの」でした。

この世においては、たくさんの誘惑があり、天に宝を積むことが出来ずにいることも多くありますが、こんな不完全な私の信仰のために、きょうも神様は愛をもって導いて下さるのだと思うと、やはり、「どうぞ、私の人生が、神様の栄光を少しでも表すことが出来ますように…」と祈らずにはいられません。そして、私たちの人生が、天にある故郷を目指す旅であるならば、私もまた、天の故郷を目指して、イエス様を仰ぎ見つつ、走り続けたいと思うのです。

（一九九四年二月二十七日）

「この人を見よ」

（ヨハネ一九・一～一六・金子純雄師）

五枚橋裕

自分等の主張を、イエス・キリストの死によって正当化しようとする民衆の只中で、イエス・キリストは全く無力であった。悲惨であるというよりも、むしろ彼は十字架の死を自ら知っていた。それにもかかわらず、その身を神にあずけ、死に至る苦痛を背負って、神に人々の罪の許しを乞うたところに真実の信仰と愛が見える。そして、その厳しさを痛感せざるを得ない。もし、自分がその立場に立たされたら、すぐに絶望の淵に陥ってしまうだろう。

草島兄弟が仙台教会から神学生としての第一歩を踏み出したことは、この厳しい信仰の道の先導者として、私たちの大きな力になるだろう。牧師がおっしゃったように草島兄弟個人の問題ではなく、教会の意志として、草島兄弟がその象徴であることを大事にしたいと思う。まだこの道を歩き始めて間もないが、できるだけ、耳を傾け、一つひとつ自分の信仰の道となるよう自分に問い掛けていきたいと思う。

（一九九四年三月六日）

「私をきわめる方」

（詩篇一三九・一～六・小林孝男師）

中目成子

最近、信仰に迷いを持ったり、自分の意志の弱さを思い知らされることが度々ありました。

他人の塵は見えても、自分の塵には気付かない愚かな私たちを神様はすべてご存じなのです。どんなにあがいても、すべてをご承知の神様の前では、言い訳や言い逃れは出来ません。神様の愛に逆らったペテロのように、弱い私たちをもしっかりと捉えて下さっているのです。私たちの罪も悩みも、苦しみも怒りもすべてご承知なのです。そんな私たちを昨日も今日も限りない愛を注いで、労りと平安を与えて下さっているのです。

人生の険しい道を歩む道すがら、主に信頼し歩むならば、この上ない幸せと思います。慰めと癒しを頂き、十字架に思いをはせ、祈りと感謝を捧げ歩む毎日でありたいと思います。この恵みを隣人に伝えることが出来ますようにと願っています。

（一九九四年三月十三日）

「目標をめざして」

（ピリピ三・一三～一六・金子純雄師）

荘子聡子

三月二十日の第四十回幼稚園卒園式に出席しました。ことしは二十名のさくら組さんとお父さん、お母さん、教会員が、神のみ守りの中で聖日礼拝、卒園式が行われました。園児の瞳は輝き、心は静まり、私どもまで「きんちょう」と「こうふん」の一時でした。金子牧師の説教「目標をめざして」も身に沁みることでございました。

「神のなされることは、みなその時にかなって美しい」との聖句。私の常に大好きなところにて、新たな感動を覚えました。

伝道の書三・一一。讃美歌につられていよいよ園児が入場してきました。金子洋子園長の祈祷に始まり、証書授与や巣立ちのことばなど、一人ひとり最高のことでした。幼き時に生涯忘れることの出来ない思い出になることでしょう。さあ、大波のように歌いましょう。人はみな草のごとく、その栄華はみな草の花に似ています。草は枯れ、花は散る。しかし、主の言葉はとこしえに残ります。

私の好きな聖句、ペテロ第一の手紙一・二四。新一年生は嬉しそう。ランドセルしょってとても嬉しそう。

（一九九四年三月二十日）

SBDイースター合同讃美礼拝（1985年）

「主の十字架を仰ぎ見て」

（マルコ八・三四～三八・草島豊兄）

向井田洋

草島兄の「ありのままでいいじゃないですか…」にはガーンでした。日々「このままじゃいけない」で、ずうっと通してきた僕には「ガ～～ン」でした。ただただしい口調の草島兄の説教はヒヤヒヤもので、僕は心の中で「がんばれ草島、あともう少しで時間だ。うまくやれ、そう、その調子」とかなり力を入れて応援していました。

音楽家を妻に持つ僕です。草島兄のあの歌はいまいちどころか、立派に「ひどい」ということは十分分かりました。歌の個人レッスンを横山理香姉に頼めばよかったのにね…。

草島兄は西南学院大学神学部神学が決まり、仙台教会最後の礼拝です。礼拝後には彼を囲む送別愛餐会も予定されています。きょうの説教は彼の晴れ舞台。僕は応援団席から身を乗り出して彼の説教を応援しました。礼拝を彼と「共有」したのです。初めての経験でした。いつもの僕は普通の観客席から誰かの説教を鑑賞するだけのつまらない会員で、讃美歌何番です、と言われては立ち上がり、お祈りが始まれば頭を垂れる。何とも形容し難いクリスチャンです。そんな僕が草島兄を応援することになったのは、神学生をサポートする壮年会のメンバーだからということではなく、僕

を礼拝の中に引っ張り込んだ草島兄の説教なんだろうなって思います。

皆さん、僕と一緒に草島応援団席で思い切り旗を振ったり、メガホンで大声を出してみませんか。普通の観客席はつまんないですよ。

（一九九四年三月二十七日）

「復活の主に会う場所」

（マタイ二八・一～一〇・金子純雄師）

金　子　まきこ

いったいどんな意味があるの？秋子ちゃんに何を信じろって言える？なぜ？どうして？

秋子ちゃんのお父さんが倒れられて、私は祈る言葉も見つからず、ただうろたえているばかりでした。でも、秋子ちゃんはいつもと変わらぬ様子で、「私は奇跡を祈っているからさあ」と言いました。ハッとしました。私ですらこの信じられない現実に目を向けられずにいたのに、彼女は疑うことなく信じ、祈っていたのです。

彼女の姿を見て、「見ないで信じる者は幸いである。信じない者にならないで、信じる者になりなさい」という言葉が頭に浮かびました。そして、祈りました。けれども、肉体的な奇跡は起こりませんでした。でも、秋子ちゃん、こうくん、たかちゃんのお父さんは、今彼らの心の中でしっかりと生きているはずです。イエス様が死に勝って私たちと共に生きてくださっているように。

イースターのこの日、私は悲しみの中でも信じ、祈ることを教えられ、肉体が滅んでも共に生きてゆける喜びを知らされた気がします。

（一九九四年四月三日）

「外で主に出会う」

（マタイ二五・三一～四〇・小林孝男師）

金　子　洋　子

「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである」という聖句に、トルストイの「愛あるところに神あり」という小説で、知らずして主に出会った靴屋のマルチンを思い出しました。主はいつでも私たちのまわりにいらっしゃるのに気づかずにいたり、知らぬ振りをしていたり、私はヤギであることの方が多いに違いないと思いました。

また、小林先生が神様をこの教会の中だけに閉じ込めてはいないかと語られたとき、私も仙台教会の居心地の良さにどっぷりつかって、外に出て行って、主に出会うことを避けている自分を感じました。ことし掲げられた教会の標語を壁に張る言葉にしてはいけないと思いました。教会学校研修会で、教師たる者は一人の生徒にとどまらず、その両親、兄弟、友人にまで心をかけていこうと話し合いました。点を線に、線を面に広げていくために、怖けることなく、外に出て主に出会っていこうと思いました。

（一九九四年四月十日）

「罪人を招くために」

（マルコ二・一三～一七・金子純雄師）

中　山　晴　久

四月十六日、教会で私の会社の同僚、椎野兄と太田姉の結婚式が行われた。牧師をはじめ教会員の方々の周到な準備と協力のお陰で、満開の桜のような華やいだ結婚式が執り行われた。

二人ともクリスチャンではない。半年前のある日、「そんな私たちでもなんとか仙台教会で結婚式を挙げられないでしょうか」と相談を受けた時、二人は教会に対してかなり難しいイメージを抱いていたようだ。金子牧師が「椎野さん、教会にできるだけ早く馴染んでください」とおっしゃった後、「それだけですか…」と驚いていた二人の顔を思い出す。

「罪人のために招く」で、イエスの言う「律法学者のようなクリスチャンの枠」にこだわっていたら、彼らの願いは叶えられなかったかもしれない。もちろん、商業主義的であってはならないし、伝道を旨としたものでなければ意義はない。が、あえて枠を設け、ノンクリスチャンとの線引きを自ら規定し、その中にだけ閉じこもることをイエスは最も戒めているのである。

「結婚式も礼拝」牧師の言葉が耳に残った。

（一九九四年四月十七日）

「自分を愛するように」

（マタイ二二・三四～四〇・金子純雄師）

奥　田　友　子

「自分を愛するようにあなたの隣人を愛せよ」。信仰生活三十年の私にはこのみ言葉は、はっきり言って耳にタコです。タコになりながら、年齢を加えるに従って、自分の都合の良い人は愛することができても、自分に都合が悪い人の場合、愛することが難しく、それならばと、なるべく近づかないようにと、あさはかな知恵を働かせているのが現在のクリスチャンとしての私の姿です。

言葉ではどうすることもできない。言葉にすればするほど虚しさが広がる。私たちクリスチャンにとって大きなクサビであると、改めて感じさせられました。

（一九九四年四月二十四日）

「営所の外に出て」

（ヘブル一三・一〇～一六・金子純雄師）

副島京子

主の晩餐に与かることの意味を牧師を通じて再び教えられ、衿を正す思いでした。

パンと葡萄酒を食する度に、ほのぼのとした思い出があります。それは、末娘がまだ幼かった日のことです。この儀式をおままごとのような思いで見ながら、いつも食べている人々を羨ましいと思っていたとのことでした。

ある日、さいの目に切った食パンの山、それに葡萄ジュースで何やらブツブツ言っているところを見てしまったのです。沢山の食パンを食べ、儀式を無事終え、かなり満足していた娘も、やがてその深い意味を知るまでに成長しました。いつの日にか、共に主の晩餐に与かれるようにと、母親として祈っています。

また、キリスト者として、すべてを主に委ね、感謝しつつ生きる証しのこの時が、今、求道中の人々と共に与かれる日はいつなのでしょうか？主よ、彼らにもこの喜びの日々が与えられますようにと、祈らずにはおれません。

（一九九四年五月一日）

「愛のうちを歩きなさい」

（エペソ五・一～二・金子純雄師）

秋葉真紀子

ことしも母の日がきました。私たち兄弟がもっと幼かった頃、兄弟三人一緒に母を喜ばそうといろいろ頭をひねったものです。「きょう一日は良い子でいよう！」「きょうはお手伝いを自分からしよう！」この一日を母は喜んでくれていましたが、次の言葉が心に残ります。「毎日が母の日だったらいいなあ」。まったくもってその通りです。

神の愛と母の愛は通じるものがある、というお話を聞きました。そして、私は、神様へ対する自分の態度と母に対する自分の態度が同じように思えてなりません。

私は日々の生活の中で、どれだけその愛に気付き、謙虚になっているのでしょう。一体、どれだけ感謝の気持ちを持っているのでしょう。「母の日」は一年に一度しかやってきませんが、「神様の日」はありません。日曜日から土曜日までの毎日を、私にとっての「神様の日」にしなければ…と反省した、ことしの母の日です。

そして、来月は「父の日」がきます…。

（一九九四年五月八日）

「隣人の飢えを満たす」

（マタイ一四・一三～二一・ボブ・オデール師）

久保今日子

途方に暮れるような現実を前に、あまりに小さな捧げ物…。弟子たちでさえ、共におられるイエス様を忘れ、「それが何になる」「何の役に立つ」と自分で結論を出してしまっている姿は、とりもなおさず、私たちの現実の姿として常に問われているところです。

先日届いた「飢餓対策ニュース」の中にも、一人の献身が時として焼け石に水なのではないかという疑いと絶望感に襲われるという内容の告白がありました。しかし、かたやそのような小さな献身と捧げ物によって、着実に実りを結びつつあるプロジェクトの明るい報告に、ホッと救われる思いがしました。

焼け石に水でもいい。「これを用いて下さい」と神様の前に差し出す時、神様は人間の弱さや予測をはるかに超えて豊かに用いて下さるのです。いつも神様が共にあって下さるのですから、これからも疑いや絶望感と戦いつつ、私の捧げ物を差し出し続けてゆきたいと思います。

（一九九四年五月十五日）

「多くの証人に囲まれて」

（ヘルブル一二・一～二・金子純雄師）

北川喜代子

「聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、私の証人となるであろう」（使徒一・八）

きょうのペンテコステの日、イエス様の証人によって誕生した教会は、二千年間引き継がれ、今また、仙台教会においても、すでに天に召された方の信仰により、今日に至っています。どのような思いで見守ってくださっているのでしょうか。

信仰とは待ち望んでいる事柄を確信し、まだ見ていない事実を確認することですから、最後まで信仰の導き手であり、また、その完成者であるイエス様を仰ぎ見つつ走りたいと思います。

（一九九四年五月二十二日）

「草は枯れ花は散るとも」

（ペテロI一・二二～二五・小林孝男師）

金子まきこ

野外礼拝にはもってこいの気持ちの良い五月晴れ。緑が目に鮮やかな台原森林公園に、あっちからもこっちからも見たことのある顔が集まってき

ました。大人、子ども合わせて百十人が、青空の下、声を揃えて歌えば、カエルはゲコゲコ歌い出し、子どもたちは手作りの紙芝居を背にした洋子先生の熱の入った話に釘付け。大人は日差しが眩しいのか、小林先生の説教に感動したのか、ずっと下を向いたままでした。とにかく、大自然の中、のびのびとした気持ちで楽しい礼拝を守ることができました。

おいしいお弁当の後には、大人と子どもが一緒になって大運動会です。子どもパワーにはかなわない…という具合でしたが、運動会の目玉種目の綱引きでは、父親の威厳を見せ付け、お父さんチームの圧勝に終わりました。「親父はやっぱり強い」と子どもたちが思ったかどうかはともかく、これまた楽しいひとときでした。

大人や子ども、クリスチャンもそうでない人も、ひとつのところに集い、讃美と交わりの時を持つことができました。みんな、神様によって「ひとつのでっかい家族」なんだな…とつくづく思える、感謝な一日でありました。

（一九九四年五月二十九日）

「私たちの力の源」

（エペソ三・一二、一六～二一）

佐藤儀明

ミラー先生のメッセージから五年前に教会のホームステイグループの一員として初めて訪米し、現地のクリスチャンファミリーと共に過ごした楽しい日々が懐かしく思い出されました。

当時、何より大きな感銘を受けたことは、祈ることと主を讃美する迫力の違いでした。これらは教会でも家庭でも日常生活の中でごく当たり前に見受けられ、何とクリスチャンファミリーは素晴らしいものだと感じて帰国したものでした。

そして、今年二月に仕事で渡米した際、五年ぶりに再開しましたが、さらに素晴らしいクリスチャンファミリーを築いており、彼らは自分の心身にはイエス様がおられ、すべての行いに介在されていると言っていました。それ故、心から隣人を愛し合い、これほど強く祈り、讃美することができ、力強く生活ができるのでしょう。

僕も来たるべき新しいクリスチャンファミリーをイエス様と共にして築いていこうと思います。

（一九九四年六月五日）

「生命の尊厳を見つめて」

（Ⅱコリント四・一六～一八・川野直人師）

木下由美子

主なる神は、土のちりで人を造り命の息を吹き入れられた。―神様が、すべての人に息を吹き入れられて命を与えてくださった。神様が与えて下さったからこそ、命は尊いというお話に心が揺り動かされる思いでした。

生活の中で起こるさまざまな出来事を、ふと気がつくと、自分の浅はかな知恵で理解し、解決しようとしています。目に見える状況が、自分にとって苦しいものであっても、神様は、何かのご計画をもっておられるのです。お説教の中にもありましたが、そのことを通して、神様は、何かをなさろうとしているということを私も信じ、讃美していきたいと思います。

あるクリスチャンが励ましてくれたことがあります。「神様がそう望まれるのだから、いつも喜んでいましょう。目に見える状況が、好ましくないように思えたとしても、思い悩み、悲しむのではなく、喜びのスイッチを入れましょう。そこには、神様がいて下さり、神様の深い愛があるのですから」。

重度の障害をもった方々は、多くのことができるというお話でしたが、私も、川野先生のお説教を通して、先生のお子様、久山療育園の方々から、命の尊さの本当の意味を教えて頂けたことを心から感謝いたします。

川野先生ご一家の上に、久山療育園の皆様の上に神様の豊かな恵みがありますようにお祈り致します。

（一九九四年六月十二日）

「空の鳥、野の花」

（マタイ六・二五～三四・吉永馨先生）

今井豊

讃美歌五一七番がフーッと頭に浮かび上がる。マタイ六章二五～三四節を読む度に、三十年前の私の姿が見えてくる。入信以前はクヨクヨと何と多くの思いわずらいをしていた。

私たちを造ってくださった神、そして愛していてくださる神、互いに愛し合い、愛に生きよと述べられる神、「一日の苦労はその日一日だけで十分である」。日々を大切に生きるように…。何と有り難いことであろう。

「まず、神の国と神の義を求めなさい…すべて揃え与えられるであろう」まったくその通りであることを今はただ感謝するのみである。

別問題ではあるが、現実に生命は大切と叫ばれながら、脳死者からの生体間移植が行われていることを複雑な思いで見なければならないことは悲

しいことであり、キリスト者としてどのように解釈したらよいであろうかと、いつも私の弱い頭を悩ましている。（一九九四年六月十九日）

「キリストの十字架を誇りとする」

（ガラテヤ六：一一～一八・北原末男師）

佐藤哲雄

Ⅰコリント一〇・一三が読まれる度に、受洗した時のことを思い出します。キリストの十字架を見る時、神様の愛が示され、自分が変えられてきました。神様の恵みはこの十字架に出合い、そして、神様から真理はここにあると示されたからです。

キリスト者としていつも主に従う生き方をしているだろうか、神様から多くの恵みを与えられながら、それを知らずに、自己中心の信仰生活をしているのではないかと問い続けています。ただ、できることは、聖書を開き祈ることだけです。日曜日の礼拝に出席することが、自分のできる働きであり、み言葉によって生きる生活の中心ではないかと思っています。また、目があっても見えず、耳があっても聞こえない状態に陥らないようにと祈っています。礼拝に出席できない兄弟姉妹がいることも覚えて祈っています。

（一九九四年六月二十六日）

「あなたがたの手で」

（マルコ六・三〇～四四・金子純雄師）

向井田のぞみ

大学時代からの友人のHが、先週、真夏を思わせる暑さの中、数年ぶりの再会に胸をときめかせて東京行きの新幹線に乗り込みました。再会の相手は、ニューヨークフィルの首席トランペット奏者、フィリップ・スミス氏。私はニューヨークに留学中のHを訪ねたときに師事していたスミス氏にお会いしました。氏はアメリカでもトップクラスのトランペット奏者であり、救世軍の熱心なクリスチャンです。

ある時、氏はHの夫にこう質問しました。「君が一番大切なものは何ですか」。彼はすかさず「もちろんトランペットです」と答えました。氏は続けます。「僕は三番目だな。一番が神様で、二番目が家族、そしてトランペットは三番目だよ」。トランペットは神様のために腕を磨く、神様のために演奏するというのです。

最高のトランペットを学ぶために苦労して渡米したH夫妻は、この言葉にとても驚きました。すべてを犠牲にしてトランペットを学ぶため師事した先生が、三番目だというのです。その後、H夫妻は毎週日曜日、先生の教会に足を運びました。

同じ質問を私がされたら、私は先生に何と答えていたでしょうか。（一九九四年七月三日）

「自分のことばかりでなく」

（ピリピ二・一～五・金子純雄師）

竹之内裕文

もはや連絡の取れなくなってしまっている多くの人たちのことを考えました。教会学校の生徒たち、青年会、またはサーチライト、ホームステイで出会った多くの人たち、友人、恋人としてつき合った人たちのことを…。彼らに対して、自分は何をしてきたでしょうか。いつも、彼らの限界を裁き、あるいは、自分に熱中している事柄ゆえ、彼らの関係を自ら閉ざして生きてきました。そして、現在も事態は変わっていないように思います。

「このまま一生生きていくつもりか？」という声が聞こえてきます。「私たちは限界の中に生きている。それ故に、逆説的に救われている」という声も。けれども、「ああ、イエス様がいてくれた。ありがとう」と素直に喜べません。それでは、イエスは心の中の不安を取り除くための慰めものになってしまうと思うからです。しかし、それはまだ遮断として機能しているに過ぎません。「イエス様、ありがとう」と言わずして、生きていける力が自分自身の内にあるのかも分かりません。

年を経るごとに、分からないことばかりが増えてきました。「じゃあ、何が分かるの？」と聞かれたら、「何も分からない」と答えるしかありません。でも、分からない、とばかり言って生きていくわけにもいきません。それでも、しばらくは、暗闇に止まる勇気を持ちたいと思います。

（一九九四年七月十日）

「希望を抱かせる」

（ロマ一五・四・ボブ・オデール師）

小松譲治

礼拝後、オデール先生が妻の真理子に次のように言われたそうだ。

「おなかの中にいる赤ちゃんの顔が譲治さんよりも真理子さんの顔に似ているように祈っています」。そのことを聞いて、確か顔は真理子だが、性格は僕に似るといいかなと思ったりした。講壇を降りるとそのようなブラックジョークを投げ掛けるオデール先生も、講壇の上では希望について大変素晴らしいメッセージを語ってくださった。

「誰かの顔に似ているといいなあ」というような希望は一時的なもので、そうなるかどうかは定かではなく、不確かなものであるが、聖書が私たちに与えてくれた希望は、永遠であり、どのような状況にあっても決して変わらないものであることを教えられた。

福音の恵みによって私たちの罪が許され、神の子とされ、神に似た栄光の体に蘇らされる。この約束が実現する時を待ちつつ、主に仕えていきたいと思う。

（一九九四年七月十七日）

「誰が人に口を授けたのか」

（出エジプト四・一〇～一七・金子純雄師）

木　皿　陽　子

七月二十四日の主日礼拝は、夏休み初めての日曜日とあって、多くの後輩たちが来ていました。十三歳の時の私も夏休みの宿題のために、仙台教会を訪ねました。その時の私はキリスト教に反発していました。しかし、教会員の方々の温かい笑顔や、何となく感じる神様の愛にひかれました。「また行ってみよう」。私は宿題のためではなく、自分のために、勇気を出して、再び仙台教会を訪れたのです。それから六年。仙台教会で多くの人とふれあい、神様の愛をたっぷり受けて、私はとても幸せだと思います。

夏休みだけ教会に来る生徒さんたちの中に、神様に導かれた十三歳の時の私がいるような気がします。みんなが神様を見つけることができますように、お祈りしています。

（一九九四年七月二十四日）

「わたしは主である」

（出エジプト六・二～一三・金子純雄師）

佐　藤　善　人

私が教会を知ったのはそうとう昔のことです。しかし、一時期、キリスト教（教会）を離れていたことがありますが、いつもイエスが私の中にいて下さったと確信しています。クリスチャンとして、仕事や家庭の中で葛藤が続いていますが、金子牧師の説教で、信教の自由は愛がなければならないと思いました。これが私の人生の課題になっています。

これからは教会とボランティアを中心に「自分の心」を確かにもって歩んでいきたいと思います。

（一九九四年七月三十一日）

「過越の犠牲」

（出エジプト・一二・二一～二七・金子純雄師）

渡　辺　義　人

連日の暑さの中、さまざまな想いの中で生かされている自分を感じ、日々を過ごしています。季節柄、私が知らない戦争のことが多く語られるこの時期に、その内容に違和感を感じることが多くなっています。それは、自分が体験したことがないから実感が湧かないという部分から来ることだけでなく、語られることの多くが、被害者としての体験談ばかりであるからです。

確かに、戦争で苦しんだ日本人の多くが被害者であったことは事実でしょうが、果たして戦争で苦しんだのは私たち日本人だけだったのでしょうか。敗戦の日や、広島・長崎の日がある八月は、戦争について語るのに良い機会のようでいて、実はその大きな悲劇によって、加害者としての日本に、悲劇に体験を語ることで自ら免罪符を振りかざしているような気持ちになってしまうのです。八月に戦争について語ることの功罪を考えてしまいます。

（一九九四年八月七日）

「主にむかって歌え」

（出エジプト一五・一九～二一・金子純雄師）

早　坂　いずみ

平和祈念礼拝に出席し、戦争を体験したことのない私たちにも神の平和を実現させていく大切な役割があるのだと改めて感じました。

普段は、幼稚園の子どもたちと戦争や平和のことについて話をしたり、祈ったりする半面、戦争を体験している祖父が晩酌を始めると必ず戦時中の生活の話をするので、延々と続くその話にうんざりすることがあります。しかし、祖父も本当に辛かった話は滅多にしないので、それだけ重く大変だったのだろうとなあと思います。その祖父と真の平和について話し合う自信はないですが、自分のできる限り祈ることができれば…と思います。

また、神への讃美がある限り、戦争は起こらないという言葉を聞いた時、「わたし、このさんびかすき!!」といった子をきっかけに、クラスの子どもたちが自然に大合唱になった場面を思い出しました。これからも、子どもたちのような素直な気持ちで神様を讃美していきたいです。

（一九九四年八月十四日）

「親切に」

（エペソ四・二九～三二・ボブ・オデール師）

荒井　喜代子

きょうのみ言葉を語られたオデール先生は、優しい眼差しで、「親切」には憐れみ、慈しみの意味があるとも言われました。先生が優しそうに話される姿は、私を大変素直にしてくださいました。

生活の中で、人に対して、親切にしたい感情があっても、迷いと、またそこから避けてしまいたい自分があることを感じます。

親切は感情より行為であり、また人間関係をスムーズにすると教えられました。この世の煩いから信仰を揺さぶられている日々ですが、いつもみ言葉によって強くされ励まして頂きます。神の愛をもって親切にしましょうのメッセージに、あなたに従うものとなれますように生き生きと歩みたいと思っています。（一九九四年八月二十一日）

「私たちのシャローム」

（ヨハネ二〇・一九～二三・小林孝男師）

五枚橋　裕

ひとつ我が身を振り返ると、そこにはやはり次から次と尽きない悩みがあり、不安があり、恐れもある。そして、自分自身の諸々の問題も、つい問題の本質から目をそらし、根拠のない自分の正当化を図ろうとする。イエス・キリストの死によって神とつながる心の揺らいだ弟子たちの不安を、自分の身に問うてみれば、どうも思い当たることはあまりに多いことに驚く。

神と共に私はいる。そこでこそ心は諸々のとらわれから解放される。単純にして明快であるこの事実を、ともすれば見失い、迷路の中に迷い込んでしまいがちではあるが、自分がつながっている光を覚え、照らされた自分をしっかりと見据え、それを持って自分の内から外へ、そして教会から外へと歩んで行きたいとと思う。

「シャローム」その言葉を真に己の内に、そして、外へ向かって広げていかれる喜びを持ちたいものである。（一九九四年八月二十八日）

「御霊で始めたのに」

（ガラテヤ三・一～五・金子純雄師）

佐原　玲子

私が仙台へ来て二年が過ぎました。自分自身、夢のようなことと思いつつ、決心して大学へ編入しました。私にとっては西南学院大学神学部へ行くのとまったく変わらない気持ちで受験したのです。それから一年半、短い月日ですが、わたしにとっては大きな変化がありました。

健康が完全なものとされました。薬をまったく飲まなくても夜眠れるようになりました。通院も二、三カ月に一回で良くなりました。

私は病によって、自分が罪人であることの再自覚、自分自身を偶像化する愚かしさを学ぶことが出来ました。

私自身がより頼みとするのは神以外になく、神は私を愛しておられるのです。み言葉は私の支えですし、確信ですが、きょうのメッセージにあるように、肉で仕上げることのないように注意したいと思います。いつも、神様へ自分を明け渡していかなければならないと思いました。あまりにも恵まれた環境の中にいる私への神様からの言葉でもありました。（一九九四年九月四日）

「イエスのバプテスマ」

（マタイ三・一三～一七・金子純雄師）

横山　理香

「バプテスマとは、イエスの焼き印を身につけることである。どこまでも一つとなって、私たちを導こうとしたイエス様のように、人々の弱さや苦しみを担う者になることの証しなのだ」。心に突き刺さるメッセージでした。

自分自身を振り返り、そうありたいと思う目標の高さと、現実の私の低さとのギャップに愕然とし、落ち込んでしまいました。

私は仙台に来て五年になります。バプテスマを受けたのがその年の十月でしたから、来月で、私のクリスチャン生活も五年目を迎えます。仙台教会で信仰告白をしたのがつい先日のことのようです。今も気持ちに変わりはないのに、少しも成長していない自分が情けなく思えますが、こんなに恵まれた環境にいるのですから、弱い自分にくじけずに、もっと神様から成長させていただけるように励みたいと思います。

私たちの生きていくこの世界にはさまざまなことがありますが、常に正しいことは神様のみ心であることを心に刻み付けて生活したいと思っています。（一九九四年九月十一日）

「収穫の主に願って」

（マタイ九・三五～三八・金子純雄師）

北川静雄

キリスト者になって十数年が経ったが、幸いにも礼拝を守り得ていることに感謝しています。これも神様の恵みによって時と健康を与えられているからに違いありません。しかし、この間の信仰生活を振り返ってみると牛歩の如き有様です。

イエスがご自身から弟子に教えられた福音宣教は今日まで受け継がれていますが、あなたはどうかと問われたら、日頃の仕事に追われていることを口実に逃避している自分が思い当たります。

バプテストでは「五百・五万」を目標に伝道に励んでおり、改めて信者一人ひとりが収穫の主から働き人の使命を与えられていることを学びました。

伝道は口で言うほど易しいものではありませんが、見方を変えるとあらゆる奉仕も伝道につながると考え、「キリストの身体なる教会」の一つの部分として、ささやかな賜物を喜んで捧げていきたいと思います。

（一九九四年九月十八日）

「御霊によって歩む」

（ガラテヤ五・一五～二六・小林孝男師）

今井豊

ガラテヤ五章一六節の「わたしは命じる」という書き出しはとても強烈な言葉であったが、その後の個所から、ああ、そうだったのかと納得のいったみ言葉であった、今までの私はそれを律法として受け止めていたんだなあ…と。

小林先生のメッセージにより、改めて分からせて頂いたような気がする。その個所にせよ、福音の書であると頭では思っていても、とかく律法的に考えてしまうことが多かったように思うし、すでにキリストに自分を明け渡していたと思ってはいても、時には、頑なな心がむき出しになったりするのが困った自分でもある。

御霊の実を私たちにももたらせてくださいと祈る心の大切さを改めて考えさせて頂き感謝したい。

（一九九四年九月二十五日）

「晩餐会への招き」

（ルカ一四・一五～二四・金子純雄師）

関場弓枝

私が教会へ通い始めたのは、ちょうど大学へ入学した頃です。「楽しくやるぞ…」とうきうきして学生生活を始めた頃の私に、教会へ通う今の姿など想像もつかなかったでしょう。そして、「何が変わった？」と聞かれると困ってしまうのですが、私の閉ざされていた心が、今は少しずつ開かれていくのを感じています。

私は、神様の晩餐会に「私でも招かれている」と知った時、非常に嬉しく思い、また安心した気持ちでした。けれども今は、それに甘えてしまって、安易な方法を先に考えてしまう自分があるのも事実です。

神様にとっては、どんな闇も暗くはないのですから、招きに与っていることに感謝して、もっと生き生きと歩んでいかなくちゃと思います。

（一九九四年十月二日）

「英雄サムソン」

（士師記一六・二三～三〇・トニー・ウッズ師）

馬場耕一

私は赤ん坊の時より父母に連れられて教会へと通い始めたのを始まりとし、今まで約二十年余りの教会生活を続けてきました。このことはある意味では神様の道を歩むか否かという選択権というものがなかったわけで、何か強く神様のことにひかれて教会へと通い始めた人たちのことが羨ましく思われる時があります。何のために教会へ通うのかと聞かれて、よく分からなくなり考え込むこともしばしばあります。それでも、教会に通うことで何かしら心の安らぎに似たものを得られるのは確かです。

自己の力を確信し、うぬぼれていた英雄サムソンでさえ、自分の生活は一人では生きていけないと分かりました。

私もまたそのように確信できる時が来ることを望んでいます。

（一九九四年十月九日）

「キリストの福音にふさわしく」

（ピリピ一・二七～三〇・金子純雄師）

神山節子

朝五時四十分きっかりに、私はジーパンにスニーカーを履いて外を歩きます。朝日が美しい時は東に向かって歩きたい衝動に駆られますが、いつもの通りを南へ向かいます。

緑の街路樹や小さな草花、そして、朝焼けの空を眺め、まだ半分眠って静まっている町並みを歩いていると、こんな素敵な時間が人生にあったのかと思います。足も頭も元気に動き出した頃、い

ろいろなことを考え、そして、神様に話し掛けております。魂の深いところで神様に尋ね、それが自然に祈りに変わります。

晩年のパウロは獄中からピリピの教会へ手紙を届けます。ピリピの教会員の感動はどんなに大きかったでしょうか。しかし、私は読んでいる中に、私に書いてくださった手紙のような錯覚に陥ります。それは、読む度に心が温まり、嬉しさで一杯になるからです。イエス様はパウロを通して愛と祈りとキリスト者として大切なことを話し掛けてくださるからだと思います。

どうか弱い私ですが最後までイエス様の恵みの中にしっかりと止まっていることが出来ますように導き、助けてください。

きょうは成谷姉がバプテスマを受けられました。姉の信仰が私の信仰に新鮮な感動を加えてくださり有り難うございました。

（一九九四年十月十六日）

「招かれた者」

（マタイ二〇・一～一六・田中弘志先生）

渡辺敏郎

「キリスト教学校を覚える日」として田中弘志先生の説教を伺った。天国＝神の国の譬え話の一つ「ぶどう園の労働者の譬え」である。神の恵みは一方的なものであって、年齢、経験、技術、知識、学歴などによるものではない。神の呼び掛けに応ずることである。

無条件に招かれている神様をまず受け入れることであると結ばれた。また、マザー・テレサの愛の行為に触れ、無条件の招きを話された。

私たちはいつの間にか、この世的なことに振り回されていることが多い。教会に来るということは神の招きを再確認し、リフレッシュされ、充電されることと思っている。そのことには老若男女の差はない。「後の者が先になり、先の者が後になる」とのみ言葉が鋭く胸を刺す。

懇談会の折り、「この教会は若い人が多い。その秘訣を聞きたい」と田中先生が言われた。活気に満ち、いつも若々しい教会は若い人だけでは成立しない。そのためにも一層お互いに存在を認め、対話を深め、その意味を確かめ合っていく教会生活から始めよう。

「あなたの若い日に、あなたの造り主を覚えよ」～伝道の書一二・一～

（一九九四年十月二十三日）

「お言葉ですから」

（ルカ五：一～一一・金子純雄牧師）

笠井均

私は、どうしてこんなことをしたのか、どうしてこんなことを言ってしまったのかと、後から考えてしまうことが多い。その時、自分へのこだわりの大きさにため息をついてしまう。自分一人では限界もあることは知っているつもりである。なら、何故、人に従えないのだろうか。人を嫉み、喜びを分かち合えない自分がいる。

正直、ペテロの言葉、行動が羨ましい。素直に「お言葉ですから…」と言える人になるのが私の目標である。そして、こういう話を聞ける教会生活に感謝している。

（一九九四年十月三十日）

「幼な子のように」

（マタイ一〇・一三～一六・金子純雄牧師）

久保今日子

深い意味は分からなくても、祝福を全身で喜んでいる子供たちを見て、私もとっても素直に共に祝福式に与ることが出来て感謝でした。そして、教会にこれからも子供たちの元気な姿があふれ続けることを祈らずにいられません。

ちょっと緊張している子、完全にリラックスしている子…、少しずつ違うけど、何の疑いもなく、その子らしく思い思いに喜びを喜んでいる姿を通し、「天国はこのような者たちのものである」と言われたイエス様の言葉が心に浸み入ります。分かっちゃいるけれど…と言いながら。つい、明日のことを思い煩う大人の一人として、今、与えられているすべてを喜ぶだけでなく、この身体で表し続けてゆくことへの思いを新たにされました。

「私の応答」の具体的な実践の場は、来春から大阪に移ります。職業に看護婦を選んだ時から、生命と向き合って来ましたが、これからも、それにこだわり続けて、活動の積み重ねをしてゆきたいと思います。幼な子のように、主に信頼して。

（一九九四年十一月十三日）

「ミッション―北と南の間で」

（マタイ二八・一六～二〇・木村公一先生）

佐藤哲雄

先日、青柳行信さんと再会しました。彼は社会科教師です。昨年、ペルー人支援のため逮捕され福岡地裁で現在公判中です。

「わたしの兄弟であるこの最も小さい者（小さくされた者）の一人にしたのは、わたしにしくれて

たのである…この最も小さい者の一人にしなかったのは、わたしにしてくれなかった」（マタイ二五・四〇～四五）。イエス様に出会うことによって自分の目がどこを見ているのか、神様の方を向いているのかと祈ります。

ただ単に公正さに欠けているとか人権無視だということに止まらず、イエス様だったらどうするかと振り返ります。

青柳さんは抑圧、差別のない「共に生きる地平」を目指し、カトリック者として、「キリスト者となりつつ、キリスト者として生きる」人生を選び取っていきたいと、希望に溢れていました。

（一九九四年十一月二十日）

「福音宣教に加わった教会」

（ピリピ四・一〇～二〇・ラリー・ミラー師）

向井田洋

「Ah…」

ワイシャツ姿で窓外の景色から冬の到来を感じていた私ですが、外歩きの多い職場に変わった今では、残り少なくなったカレンダーや幾分厚着になった自分の服装からことしの冬を感じ取っています。以前なら、外に出た時だけ「ウー寒ッ」だったのですが、今は、外から戻った時に「アーあったかい」に。私にとって「ウー」から「アー」に変わったことは重大で、ストレスの大きな部分を占めています。

閑話休題。パウロの伝道はイエスの運動に対する大胆な「反応」だと思います。私はキリスト者であるか否かという問いには自信を持って「反応」することができますが、パウロのような「反応」は、どうも自信が持てません。なぜなら、「外で主に出会わなければ」ならないからです。外を歩く職場になっても、未だに外で主に出会っていないからです。

今の私の信仰は、依然として「ウー」であり、「アー」に踏み出せないでいるのです。これも大きな信仰上のストレスと言わなければならないようです。

（一九九四年十一月二十七日）

「約束の地」

（ヨシュア三・一～九・ボブ・オデール師）

木皿陽子

「私の力は、弱いところに完全にあらわれる」。

先日、保育系の短大受験のため盛岡を訪れ、その晩ふと開いた聖書のみ言葉がこれでした。「なぜ神様は、今の私にこの聖句を示したのだろうか」と一晩中、このことばかり考えていました。しかし、当日小論文を書いている最中に、大切なことに気付きました。今まで私が見落としていた社会的「弱いところ」。神様は私にこのことを見つけるように、み言葉を示してくれた…。この大きな喜びに感謝の気持ちで一杯になりました。

神様はいつでも、こうやって生活の中でも、私たちに語りかけ見守って下さる。そのことに私は気付かずに過ごしていました。

受験は失敗したけれど、私が忘れかけていたこと、本当に大切な「いつも神様のみ言葉に耳を傾けて、心にとめる生き方」を、もう一度見つめ直してみたいと思います。

（一九九四年十二月四日）

「花婿を迎える準備」

（マタイ二五・一～一三・金子純雄師）

山路節子

年の瀬の押し迫ったこの時期、信仰生活を振り返るときが与えられてとても感謝です。

クリスマスを迎えるにあたってもう一度み言葉をかみしめ、歩みの軌道を修正するように教えられた思いがしました。

最近特に、この世の暗い悲しい出来事に余りにもとらわれ過ぎていた自分に気づかされ、ハッとしました。

神様＝イエスさまは常に目を覚まして祈っていてくださる。慈しみ深くすべてをご存知で、本当に……わたし罪をも許してくださった。そして、これからも許してくださる。絶望する必要などなくて、いつも喜んで希望を持って待つことができる。すべてを新しくすることのできるお方なのですネ。

きょうもまた、もっと聖書を読み、祈ることが大切だと教えられました。がんばります。

（一九九四年十二月十一日）

「キリストの形ができるまで」

（ガラテヤ四・一九～二〇・金子純雄師）

八巻正之

クリスマスプレゼント…。世の親の例に漏れず、私たち夫婦も最近できたばかりの郊外のオモチャ屋さんでもらったばかりのボーナスを抱え、子供たちのプレゼントを買い求めました。「年に一度しかないクリスマス」という思いがあって、可処分所得には見合わない高価なオモチャを買ってしまいました。そしてすぐ、「あーまたや

ってしまった」という思いと、来年はもっと安いものを買おうという決意は、実はここ数年続いているものでした。

神様のクリスマスプレゼント、それは文字通りイエス様の誕生に他なりません。しかし、私たちはこのプレゼントに十分応えているでしょうか。少なくとも私は応えているとは言えません。このプレゼントに応えていくために、私たちはイエス様に連なる者として、イエス様が示した愛を、この世で具現化すべきではないでしょうか。

（一九九四年十二月十八日）

「平和を造り出す人々」

（マタイ五・九・金子純雄師）

佐藤美鈴

ことしのクリスマスは私にとって忘れられないクリスマスになりました。なぜなら、クリスチャンとして初めて迎えるクリスマスだったからです。そして、もう一つは結婚して初めて二人で迎えるクリスマスだったからです。

最近の日本では、クリスマスといえばお祭りのようですが、クリスチャンになる前の私もその一人でした。改めてクリスマスの深い意味を知り、心から主イエス・キリストの誕生をお祝いできたことは、クリスチャンとしての一番の喜びでした。

このクリスマスをきっかけに多くの人が教会に来てくださることを願います。実は、かつて私はそのような中の一人だったからです。

（一九九四年十二月二十五日）

たくさんの思い出を胸にポートライト先生ご夫妻をお送りしました
（1989年）

献堂10周年記念文集
復・刻・版

献堂十年に思う

日本バプテスト仙台教会牧師　天野五郎師

同じ月に結婚十年を迎える私どもにとって、献堂十年を祝いうることは、赴任二年目の私にとって大きな喜びと光栄です。

先任の先生方によって市の中央に据えられた会堂は、塔上に輝く十字架が象徴するように、これからも、雨の日も風の日も「失われた人々」を招き、その心に光りを放ち続けてゆくことでしょう。

「教会をキレイにする運動」と名づけて最近始まった毎週土曜日の「早天奉仕祈祷会」でしばしば私の夢は、「将来の教会の姿」に広がってゆきます。

一つは、五、六階建てのビルの教会…。一つは、常緑樹、落葉樹を配した前庭に四季の花がこぼれ、園舎はうしろにさがって二階建ての教育館になとなる…。礼拝には百名を超える人々が出席し、毎年二十名から三十名の受浸者があり、その交わりはもっともっと楽しく充実してゆく…。

あたかもこの献堂十年を記念するかのように、ボートライト先生をとおして第二教会設立のための土地が近く与えられようとしています。

私たちの使命とビジョンは、十年を境に大きく踏み出そうとしています。感謝です。

いざうたえ　すくわれて
よろこびにおどるもの
のべ伝えよ　みめぐみの
いとも奇しきかみのわざ

（讃美歌二二四番四節）

献堂十周年によせて

ワース・C・グラント　師

「主が家を建てられるのでなければ、建てる者の勤労はむなしい」（詩篇一二七・一九）

仙台における初期の宣教のこと―公会堂での特別伝道集会、一年以上にわたるYMCAでの礼拝、それから教会敷地の仮会堂での数カ月、幼稚園の開設等を考え、また、私たちが信仰においても、語る言葉においても、いかに弱い者であったかを思い出しますと、現在の教会の宣伝活動がこのように強力な地位を占めるまでに成長したことに驚かざるを得ません。

私は、これは実に人ではなく、「主が建てられた」からだと確信しています。個人の働きは、パウロがIコリント三・一六で「私は植え、アポロは水を注いだ。しかし、成長させて下さるのは、神である」と述べているように一部分に過ぎません。この聖句は、また、この教会の発展史にも当てはまるものでしょう。

十年後の現在、バプテスマを受けた方々、また、最近教会で結婚式を挙げられ、クリスチャンホーム建設に着手された方がおられます。時が経って、ここでその方々のお子さんたちが、主イエス様を信じるようになることでしょう。

私の祈りは、次の十年後に、この仙台バプテスト教会が、仙台市のみならず、東北全体で、その会員数だけでなく、その力と影響力において、一番強力な教会になることです。（10・27・64）

十年のあゆみ

編集部

一九五二年秋、市内には未だ戦災の瓦礫の山があちこちに残り、街路にはカーキ色のトラックやジープが砂塵をまき上げて疾走してた。街々は大分復興してはいたが、人々の魂は疲れ果てていた。

ある日、小高い丘の上に一人の背の高いがっちりしとした体格の外人が立ちつくしていた。見事な銀髪の下にのぞく象のような細い目は厳しい光を帯びて眼下の市街地を見つめていた。そして、いつかその目は静かに閉じられ、黒いソフトは彼の手の中にあった。

この年、日本バプテスト連盟は東北地方の県庁所在地に開拓伝道を決定し、その中心地仙台に在日米国南部バプテスト宣教団所属のワース・C・グラント師を派遣したのである。翌日からこの銀髪の巨人を乗せた車は市内のあちこちに出没した。県、市庁を始め、ミッションスクール、そして建設会社等等…。その精力的活動により、間もなく市公会堂で伝道所開設の特別伝道集会を開き、多くの参会者を得、引き続いて元柳町YMCAの一室を借りて定期集会を持つに至った。一方、師は宣教師館と教会堂の建設の為の敷地を探していた。彼とその家族の間借り生活はもうかなり長くなっていた。

翌年四月、初代牧師、スマートな長崎直夫師が着任し、間もなく宣教師館も完成し、ミセス・グラントの準備された婦人集会に、また、バイブル・クラスに若い学生たちがいつも館を賑わしていた。異教社会への伝道の困難さは今更云うまでもない。まして人種、言語の違いは決定的問題であろう。

然もこの場合は、二千年の歴史的社会に安住している日本なのである。而し、師は何らこだわることなく堂々とその宣教方針を貫いていった。そして、神はその働き人の前に常に道を備えて下さったのである。

以前、北四番丁一一三番地には市北部唯一の娯楽施設として映画館が建てられていた。ところがそれは間もなく不審の火によって一夜の中に焼失してしまった。そして、師は、敢えてこの焼土の地を会堂建設の地と定めたのである。五四年四月、この地に十畳間程の仮会堂が建てられ、集会がもたれると同時にミセスの手により幼稚園が開設された。しかし、この喜びの中に長崎師は家族の事情の為、惜しくも任を去られることになった。

同年七月哲学的風貌の関谷定夫師が新夫人と共に着任された。同時に本会堂建設計画は着々と進められた。間もなく戦後初めてと云われる会堂はその鉄骨の大アーチと共に徐々にその姿を現し始めた。資材不足の時代であり、技術的にも数々の困難を伴ったようであったが、駐留軍の協力等もあって、この日米全バプテストの祈りとグラント師の生涯の夢をかけた新会堂は遂に完成し、その輝く金色の十字架のある尖塔からは朝夕美しいチャイムの音が流れ始めた。

そして、同年十一月七日市長を始め全教会の祝福の中に献堂式が行われたのである。而して私たちはこれから教会形成の歴史が始まると考える。ここまでは言わば神話時代であった。

教会に会堂は必要である。然し会堂が教会ではない…。教会は、主の十字架に会って造り変えられた者の中にこそある。私たちは幸いにして先に家と導き手とを与えられたが、直に生きた教会として地域社会に根を下ろすまでには更に長い厳しい年月を必要とするのである。その間、幾度も人々が単調とも思える伝道の努力が繰り返され、幾多の人々がこの会堂に導かれ、また去っていっ

た。そして、会員も牧師も宣教師も共に苦悩し、思い迷い、また、祈り続けて来たのである。

而してこの「乾いた土」にも幾つかの麦が芽生えていったのである。この間、幾多のエピソードが生まれたが、今は語る余裕がない。

五五年三月、伝道所から教会組織となり、間もなく関谷師は按手礼を受けられた。五十七年三月、青年たちの敬愛の的だった関谷師は西南学院大学神学科の講師として招かれ、九州の地へ去った。同年四月、ヌーボーとした厳しい信仰を秘められた大沼師が夫人と共に来仙され、師の幾つかの実験的な牧会指導が始められた。

この間牧師館は未だ建てられておらず、歴代牧師は相当な不自由を忍んだものと思われる。関谷師の末期頃、宣教師館の北側の土地屋敷を買収し更に大沼師の時代にその一部を売却して新たに現在の牧師館が建てられた。それと前後するが、駐留軍の引き揚げ始まり、グラント師はその資材の寄付を受け、北部の田園都市吉岡の地に伝道所を建て幼稚園を開設した。（現在ここでは毎週金曜日の夜、開設以来の会員阿部夫妻を中心として十数名の集会が守られており、幼稚園も七十名を超える園児が導かれている）この頃、既に東北各地に伝道所が建てられ、グラント師は多忙で仙台は留守になることが多かった。

主の御計画は着々と進められて、この老練の師を長くこの地に留められなかった。六十一年春、師はより大きな任務を首都において委ねられた。会員一同の涙に送られてグラント師一家は十年近くも住み慣れた仙台に別れを告げた。

同年夏、米国市民の代表のようなC・S・ボートライト師御一家が宣教師として着任された。開放的な御一家の好意はすぐに会員全員に親しまれた。特に大沼師とは兄弟のように協力し合った。そして、その努力により今まで学生、青年層が中心であった教会のカラーにだんだん大人の集会が目立つようになった。ところが、その大沼師は六十三年春、母教会である北九州市八幡教会に招聘されて去られた。

歴史的な新生運動を控えていた時だけに、会員の動揺は大きかったが、結果としては会員は結束と反省を深め、ボートライト師のエネルギッシュな活動と共に新生運動を立派に乗り切り、そのうえ、このテキサスから送られた素晴らしい「あかし人たち」によって教会は霊的に高められ、清新の気に満ち溢れた。同年夏、ボートライト師御一家の帰朝と共に、会員は安定し教会組織は充実してきた。殊に教会学校の活動は特筆されるべきであろう。グラント師の念願であったクリスチャンホームは、現在十指に余りあり、創立以来の受浸者は百人を超える…。

しかし、私たちはこの見かけの現実に決して満足していない。他行会員を始め、低迷する幾多の問題がある。けれども今、会員はこれらの問題をはっきりとらえ、処理できるほどに成長している。十年経った今、どうやら私たちの教会は一人前と言える段階に達したのではなかろうか。否、満十歳の鼻たれ小僧というのが真相かも知れぬ。

今、私たちはもう一つの新たな会堂を市内に与えられようとしている。これを捧げられた姉妹の祈りを覚え、この祈りを導かれた主に大いなる感謝を捧げると共に、やがて何年かの後、私たちの分身たる真の教会がそこに生まれることを祈りつつ稿を了える。

（一九六四年十月）

吉岡伝道所

阿部利吉兄

吉岡伝道所はW・C・グラント先生始め信者の熱心な祈りのうちに、福音と平和を与えるために神様から賜ったものであります。

仙台から北に二十四キロのこの地は、今から八年前には一面の雑草の茂った畠でした。冬ともなれば二尺位の雪野原と化してしまうという寂しいところでしたが、神様がここに伝道所を建てるように御命じになりました。

昭和三十二年に伝道所が完成して、翌三十三年に幼稚舎が開設され、最初の園児は六名でした。それから六年。現在は七十名の園児たちが主の恵みにより毎日元気に保育されております。

この園児一人ひとりを通して各家庭に伝道の窓が開かれているのであります。このことを思いますときに、主の偉大なる御計画に感謝せずにはいられません。

この伝道所がこの地の人々のために働くことの出来ますように祈りたいと思います。

献堂十周年によせて

西南学院大学神学科（元仙台教会牧師）

関谷定夫師

献堂十周年おめでとうございます。神学校を卒業して三年目の春、長く住み慣れた九州を去って、結婚後数日の新妻と共に初めて仙台の駅に降り立った日のこと、婦人会のご奉仕によって用意された北鍛冶町の仮寓に落ち着いたときのことなど、つい昨日のように懐かしく思い出されます。

赴任した最初の聖日はちょうど「ペンテコステで、「聖霊の威力とキリスト教会の起源」と題して

説教しました。当時の礼拝はグラント夫人が既に始めておられた幼稚園のバラック園舎で守られていましたが、着任早々、会堂建築が着工され、七月四日に定礎式を行いました。種々の備品新調のため、グ師の御供をして石巻まで参りました。あの純白のスマートな十字架塔は最初のプランと異なるというので、グ師が何度も監督に抗議されたりしました。グ師の献身的な努力と会員求道者たちの熱い祈りによって、見事な教会堂が完成し、献堂式の喜びを迎えて、五日間にわたる記念大伝道会を行い、多くの決心者が与えられたことは全く感謝のほかありませんでした。

三年間の小生のわがままと不足を忍び、温かく包んで下さった会員の方々の寛容と協力と愛が今もなお、牧師先生の働きを支え、神のみわざがより強く、より大きく押し進められていることはただ感謝というほかありません。

仙台教会の今後の発展を心から祈ります。

献堂十周年によせて

日本バプテスト連盟理事長　副田　正　義　師

此度日本バプテスト仙台基督教会献堂十周年記念を心からお喜び申し上げます。

仙台教会十周年の宣教において、歴代の牧師先生は一生懸命に福音宣教に活動されました。

「わたしは宣教を恥としない。それは、ユダヤ人をはじめ、ギリシャ人にも、すべて信ずる者に救いを得させる神の力である」（ロマ一・十六）

パウロは此の福音、即ち信ずるものには救いを得させる福音を亜細亜に欧州に語りづけたのであります。

御存知の如く日本は異教社会であります。そのために人々は仲々福音を受け入れようとはいたしません。此の時に最も必要なものは何でしょうか。それは時を得るも得ざるも福音を語り続けてゆく信仰による忍耐であると信じます。

過ぎし十年の如く、来りつつある十年も仙台教会が主の御霊に助けられつつ牧師先生と共々に信者一人ひとりが福音宣教に当たられることを祈るや切であります。

日本バプテスト八幡教会牧師（前仙台教会牧師）大　沼　上　師

十年というのは長いだろうか、短かいのだろうか。兎も角ひと区切りというのが世の習わしである。その十年の最も長い部分である六年間を、私はあの会堂で牧会させていただいた。非常に有り難いことだと主なる神に感謝せずにはいられない。

ただひとつ残念に思うことは、あの会堂が実に素晴らしい会堂であるにもかかわらず、まるっきりのアメリカ式であることである。私は、ここでアメリカ式設計が悪いとは考えてはいない。もちろん、日本の気候風土に合致しない点など多々あって、少なからず不便を感じたものの、それは立派なものだと思っている。何故なら、会堂の建築は、信仰が具体化されたものだから、アメリカ式はアメリカ式としての、たしか立派な信仰告白的会堂形式を具現しているからだ。だがそれは、アメリカの信仰告白の日本への主張であって、日本人のわれわれの、ここと、そこでの告白の具現とはいい難かった。

もちろん、それだからといって会堂を神社仏閣に似せたり、民家に形どったり、またが便利一本の合理化を急げというのではない。そうではなくて、我々の信仰の告白が、日本のそこここ、歴史の唯中で真に一つの形象まで持ち得るようになりたいというのである。そういう点から言えば、十年という年月短いものであろう。しかし、人類の歴史の流れは急速だ。そのはざまにこそ、これからのわれわれ基督者の負うべき厳しい責務がある。

日本バプテスト盛岡伝道所牧師　福　田　昌　治　師

献堂十周年を迎えられたこと、心よりお祝い申し上げ、今後の皆様の御働きを期待致します。

「前進」。これが福音の本質であり、キリスト教信仰の本質でありましょう。主イエスは地にまかれた芥子種の譬え（マルコ四・三一～）でこの真理を語られ、パウロもまたゴールを目指して賢明に走り抜く選手の姿の中に語っています。（ピリピ三・一二～一五）

従って福音に正しく根差すなら個々人の信仰生活に静止がないように、教会にも静止ということはあり得ず、神の召しの賞を得ようとの前進があるのみでしょう。

キリストの恩寵の御手の中に捕らえられた者としてお互いにいつも前進を求めて歩む者でありたいと願っています。

日本バプテスト山形伝道所牧師
横谷政孝師

「十年一昔」という言葉があります。仙台の教会が献堂十周年を迎えられたとのこと、早や「一昔」経ったわけですね。

こんなことを云うと、「夢の超特急」に象徴されるようなテンポの早いこの時代にあって、何をノンキなことをと叱られるかもしれません。しかし、私は、まるで「鈍行列車」のようなこの言葉を愛します。いかに夢の超特急がその華麗さとスピードを誇ろうとも、鈍行列車の時代がなければ、今日の姿はなかったからです。

同じように、今日の仙台教会の背後には、十年一昔の鈍行時代があったことを忘れてはならないと思うのです。いいえ、もっと根本的には、たとえ特急であろうと鈍行であろうと、それらがしっかりとした基盤の上になければ、一メートルも前進し得ないように教会はキリストとその聖書に立つ以外に進路はないということを改めて銘記して頂ければと思うのです。

「十年一昔」。心から御祝を申し上げます。

仙台基督教育児院院長
大阪鷹司師

基督教年鑑は日本バプテスト連盟の驚異的な発展を伝える筆に惜しまない。その発展の一頁を飾っておるのは仙台教会の十年の歴史であることは甚だ愉快である。

さて、私は今年四月二十六日の聖日、米国リッチモンド市にある南バプテストインマヌエル教会の礼拝に出席したが、約五百ほどの座席しかない会堂が狭く、午前二回目の礼拝にやっと出席を許された。さらに、五月二十八日にはローマにて南バプテスト教会の宣教師ムーア夫妻が経営する養護施設を訪れたが、カトリック教国にて新教の旗を高く掲げて伝道をしておられるムーア氏の雄々しい姿に心打たれたのである。伺う所によれば、一八七二年にイタリーで信仰の自由が認められるやいち早く伝道を開始したのは南部バプテスト教会の由、施設訪問者名簿の中にバプテスト連盟旧知同労の友の名をたくさん発見することが出来た。我らの友よ、更に前進せよ。

仙塩地区牧師会会長
河本隆夫師

かつてバプテスト連盟理事長であった木村文太郎師が来仙せられ、私の宅を訪ねられた節、県庁所在地に教会を建設する計画だと話されたのは十数年前の事だ。私の級友だった同兄は其の後も特別伝道のために来られ、相会う喜びを持った。長崎牧師の後任の関谷師の時、会堂が落成したが、当時、その大きさにおいて仙台一であり、その金色に輝く光塔の十字架は仙台には珍しく、特に講壇の上に設けられたバプテストリーは異様な印象をさえ与えた。

次の年、元旦の午後、市内の教会連合礼拝が行われたが、正月の集会を元旦の午後に持ったのは初めてで、会衆は二百四十名を超え、終戦後初めての盛んな連合礼拝であった。以後二百名以上収容できる会堂は数少ないので、更に二回行われて、仙台基督教協議会に貢献されている。私は教団にあるバプテストだが、我々の精神は自由と愛を重んずる故に全教会一致の為、重要な責任が託せられていると思う。祝福を祈る。

日本バプテスト粕屋伝道所牧師（仙台教会出身）
大槻国彦師

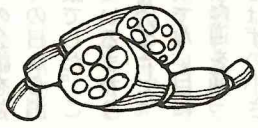
昨年、バプテスト史のレポートだったと思いますが、与えられたテーマに従って仙台教会の開拓伝道より教会形成までの歴史を分析しながら、甘い感傷と神学的に若干の検討を試みたことがあります。そこで、私たちは幾つかの問題点を提起せねばならなかったのです。

それは、良かれ悪しかれ、現代キリスト教会が共に背負っている問題であったからです。

さて、問題点とは何か。限られた紙面での一例として、教会形成における教職と一般会員との「共同労作」の欠如ではなかったかと思われるのです。教職中心主義的教会形成は教会の自己目的化に陥ってしまう。

献堂十周年を手放しに喜べない、むしろ、歩みし教会形成史を「聖書の光りに照らして」教会の自己批判を明らかにすることが、現代キリスト者課せられたテーマだと思うのです。

最後に、主にある安否を尋ねつつ??拘らず、共同の連帯と労作へと招き召す方の故に感謝と希望を新たにします。



十周年を迎え当時をしのびて

荘　子　聡　子　姉

雪むしの飛ぶみちのくに十年まへ
建てし　十字架の今に輝く
会堂の土盛り姿古き人と
鉄骨の基礎　今も目にしむ
かりそめの園舎の窓におさな子と
集う吾らと　グラント夫妻
誘われし宣教師館の風習に
喜々として語る婦人等の鐘
転会の心いよいよ定まりて
献堂の式に　われも祝さる

証し

吉　永　馨　兄

生、病、老、死を仏教では四苦といい、人生の代表的な苦悩であると教えている。健康な人間を突如として襲うこの病気というものは、一体何者なのであろうか。私は職業柄、この病気による不幸と毎日毎日直面して来たし、現在も直面している。

病気というものは単に肉体だけが病むのではない。それによって希望や愛や自信や財産などを失い、場合によっては、必死に生きたいと望みながら、死の巨大な翼に飲み込まれてしまうことすらある。つまり病気は必ず心の悩みを伴い、全人格的な苦痛を伴う。

ごく軽い病気なら兎も角、少し長い、治りにくい病気になろうものなら、大抵の人は周章狼狽して悩み悶え、絶望したり、自暴自棄に陥ったりする。一升の病いに三石八斗のもの思いとは、気ばかり焦って悩む人間心理を鋭くついた古譬の言葉だろう。

しからばこの病気に人は如何に対処すべきなのであろうか。

人間は病気の容物のようなもので、病気が入っているのが当たり前、病気でないのは願ってもない幸運なんだ。皆さん、いろんな人が病気をしているだろう。お前さんよりもっと重い病気の人だって何万人も何十万人もあるんだよ。不幸な人は限りもなく多いんだよ。諦めなさい。人間は病気の容器なんだから。諦めるよりないんだよ。—そういわれても諦められるものだろうか。

イエス様は、病気についてこう教えられておられる。病いになったのは、その人が罪を犯したためでも、またその親が罪を犯したためでもない。ただ、神の栄光がその人に現れるためである、と。イエス様のこの御言葉は私には不可解であったが、ある病人が身をもって解き明かしてくれた。

両側が重症肺結核であるその人は、他から見れば、何等の希望も喜びもない筈であるのに、信仰と希望に満ちていたのである。自分でも苦しい息遣いなのに、同病の患者を慰め、励まし、力付けていた。彼の存在は同病者の支えであった。彼は木枯らしの音にも、窓を打つ吹雪にも神の愛を感じて感謝していた。

彼はイエス様の僕であった。イエス様の僕はイエス様の御言葉を証明していた。彼の病いは神の栄光の現れるためである、と。

彼の信仰に打たれて多くの同病者が神を信じ、神の愛を信じることが出来た。そして、諦め切れない悩みから転じて、心に光を持つに至った。

彼の信仰に打たれたのは同病者だけではなかった。彼の主治医であった私も、そにの不動の信仰の力に打たれた。私が後に教会を訪れ、イエスの教えに従うようになったのは、彼の無音の感化によってである。

主は彼を守って、そのような重症結核にもかかわらず、その生命を今もって保っていて下さる。彼は依然として力ある伝道者である。彼は重篤な病いの床にあるが故に、その信仰は一段と光を放ち、一段と迫力を増している。

主よ、どうぞ私たちにも、この兄弟のような痛烈な信仰をお与え下さい。どうぞこの兄弟のような証し人たらしめて下さい。

あかし

須　藤　泰　子　姉

一生を無意味に過ごさない前に、若い時に救われたことを感謝しています。導かれた経過など簡単にまとめたいと思います。

終戦後の経済的困難と家庭内の不調和の中に過ごした子供時代は、魂の安らぎの少ない時代でした。その上、いわゆる内気な子供で、一人自分の内にこもりがちでした。いつの頃からか人間への不思議さの気持ちを無意識の中に抱くようになりました。中学三年の時、当時二十歳の姉が病死し、非情な驚きと悲しみの後に、生への会議を強めました。今まで存在した姉の姿がその日から消えてしまったのです。人の命が不思議でした。この不思議の感は多くの人々で構成しているまわりの社会や、広い地上、宇宙のことへも及びました。

このような私個人にとっては外見的でない目に見えない幾つかの障害が置かれていた道を通って、夢と希望に向かって真っ直ぐ進むはずの小さ

な魂は、生来の内向的性格が手伝って、少しずつ蝕まれていたようです。望みかなって希望の高校へ進み、二、三の親友を得て、いろいろ語り合ったり読書を友として過ごしましたが、進学の夢は閉ざされていて、就職のコースをとり、十分な判断力もないまま機会あって現在の職場に入社しました。仕事をマスターするにつれて、自分を見つめる余裕が出ると、また危機が訪れていました。生への懐疑は消えることなく心の底流を流れていたのです。

広大な世界の幾多の人々の中にあって、無能で取り柄のない自分の存在価値が見失われがちでした。さらに、まわりの事物、事象、人間の存在そのものにさえ不思議の感を持ってしか見られない日々が続きました。足は地に浮いて、それでもどうにか毎日を送っているのがかえって不思議のようでした。

そのような合間にも、古人の偉大な芸術家だけは私を慰めてくれました。美の真髄を伝えてくれる絵画、心のそこから沸き起こる感動に浸らせてくれる素晴らしい音楽など、いくばくかの生きがいを覚えさせてくれました。

しかし、今年一月のある日、手にした矢内原忠雄先生の書物は決定的に生への光りを見出させてくれました。それは万物の創造主であり、この世を統べ給う紙の存在について、そして御子イエス・キリストの教えを通して、人の何であるかを説かれている書（政治と人間）です。

人間とは人格であること。人の人格の根本は創造主であるただ一つの霊的神にあること。人の生命はこの神によって与えられていること。この点において人は男女の違い、社会的地位の差異などを超越して平等であること…。びんびんと響くように五体に吸収されて、急に眼を覚まされた思いでした。それからはキリスト教を知りたいという願いに満たされ、冬の日、白い尖塔に十字架を掲げたバプテスト教会の門を叩いたのです。聖書を読み、牧師先生を通して教理を学びました。イエス・キリストの十字架による罪のあがないを信じることによって永遠の命に入ることが出来るという信仰は容易に自分のものとなりました。

それからは生への指針が与えられ、それまで朧げであった人生観が新たに形作られました。喜びと共に毎日の生活に張りが出てきました。異邦人の環境にあって誘惑も多いことですが、キリストを思い、キリストに従って生活をすることを祈り、また日々めぐみの中にあることを感謝しております。

あかし

松谷東一郎兄

「シモン、シモン、見よサタンはあなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って許された。しかし、わたしはあなたの信仰がなくならないようにあなたのために祈った。それであなたが立ち直ったときには、兄弟たちを力づけてやりなさい」。

ルカ福音書二十二章にあるこのことばは、主イエスが自分に従ってきた弟子たちの多くのものが去っていったとき、ペテロに対して言われたものであるが、これは時代を超えて主に従っていくものすべてに与えていることばだと思う。この個所をとおして私は私の信仰を今日まで祈りのうちに支えて下さった主の愛を感じ胸が迫ってくるのを覚える。

私の教会生活の中で激しい苦しみに襲われたこともあったが、そうした苦しみに耐えていまの時までしんこうを持ち続けることができたのも、主イエスが天において、私の信仰のために祈っておられたことを思わずにはいられない。

大学に入学して、二、三カ月後に一人の兄弟に導かれて教会を訪れたものであるが、今年の六月にバプテスマを受けて主に従うものとなった。なんとなく教会へいってみたいというくらいの気持ちでいた私には、最初、教会での伝道奉仕には本当に厳しいもののように思われた。しかし、主のイエスを知るにしたがって、もっともっと働くことが苦痛ではなく、喜びに変わっていく自分を覚えた。二年間の求道生活の間はまさにおのれの精神の「格闘」であった。同じ求道者たちは次々に去っていくし、主イエスのもとに従った者でさえいつの間にかいなくなる。その悲しみ、嘆きであった。そのため、何度も襲ってきたスランプや不信仰の罠を逃れるためにサタンと戦い、こうしたことが何回となくあった。しかし、弱いながらも決定的ににキリストから離れることができなかった。

「主がどうして十字架の上で自らの苦痛をこらえて血を流されたのか」という問いに対する答が分かりかけてきたからなのです。それを知って、もはや私は主のもとから離れられなくなっている自分を感じた。

今、教会を去っていった人達を思うに、もしその兄弟姉妹たちがもっとよりよく十字架のつぐないを理解し、より教会を愛する気持ちがあったならば、サタンのふるいからもれるものがもっと少

なかったであろう。

それらの兄姉を思う時、私の心が痛むように、それ以上に天にいます主もその一人ひとりのために涙を流しておられるだろう。

主の恵みにより、私の信仰は今日まで支えられた。それによって、こうして立ち直ることができた。私は主が命じられたように私より後に来た兄姉たちが同じように主から離れることがないように祈りたい。

吉岡伝道所から

鎌田栄子姉

伝道所は前方には七ツ森、船形山を眺めることが出来ます。春には緑の麦畑、黄色の菜の花に囲まれ、夏には山々の緑、秋には紅葉の山々、冬には当たり一面雪景色に囲まれ、どの季節を見ても素晴らしい自然の美しさに取り囲まれております。

この伝道所で普通は幼稚舎が、日曜日には教会学校が行われております。毎週金曜日の午後七時より一般の人々のために夕拝がもたれております。私は昨年の4月からのことしか知りませんが、集会に来る人は牧師、阿部先生夫妻と教師2人の5人だけのときが一年くらい続きました。一軒一軒、夕拝に誘ってもなかなか来る人がなく、本当に吉岡で伝道することが難しく感じました。それでも誘った人が、例えお義理で来ても良いと思います。やがて心から求めて夕拝に来ることを信じていました。集会に何人集まったかという数、そのものが大事とは決して思いませんが、自分から求めて来る人のいないことは寂しいことでした。

しかし、伝道所が開設されてから七年目、ようやくレギュラーメンバーが与えられたのです。今は園児の父兄が主ですが、七、八人、それに仙台教会から宣教師、青年有志が応援に駆け付けてくれます。ようやく吉岡の伝道に光がともされたような感じが致します。

しかし、園児の家庭以外の一般の人々に、また、青年層への伝道が残されております。本当に小さい伝道所の灯が多くの人々の心に点火され、吉岡の光となることが伝道所に課せられている使命だと思います。

教・会・生・活

CS中学科について

沢田孝子姉

毎週日曜日九時になると、三年生の司会で礼拝が始まります。讃美歌を歌い聖書を読み、お祈りをし、先生にお話をして頂きます。お話の内容は聖書に書かれているイエス様の譬え話や奇跡等です。礼拝が終わると、学年別に分級をします。分級では礼拝でお話したことをもっと詳しく話したり、聖書の友をしたりします。また、いろいろの行事があります。

クリスマスの時には、イエス様の誕生を祝い、劇や合唱などします。花の日、収穫感謝祭の時には花や贈り物などを持ち寄り病院やかわいそうな子供たちのところへ持ってゆきます。

私たち中学生は、大部分の人がミッションスクールの人々なので、他の学校の人がキリスト教についてどう思っているのか話し合えず困ることが時々あります。教会学校に来ている人は、一年生二十人、二年生三人、三年生十五人ぐらいですが皆熱心で毎週教会学校に来ています。

また、夏休みには、夏期学校を開いて聖書研究などをします。そして、お昼には皆でおかずを作って食べます。次の日には海へ行き貝やいろいろなものを拾い楽しく遊びます。

これからも、友達との交わりを深め、イエス様のことを今まで以上に勉強して、一歩でも早く神様に接したいと思います。

旧CS中学科

安井洋子姉

私が中学生の頃のCSも今のCSも内容的には何も変わるところがありません。教師が「聖書教育」という虎の巻を片手に、アブラハムやパウロの話をしてくれたものでした。

その頃はテレビも殆ど普及していなかったので、今のように日曜日の朝から、アトムや8マンを見ることも出来ず、CSの出席率は今を遥かに超える人数でした。最も多かった頃で、小学生が五十人位、中学生が十五人位コンスタントに出席していたようです。

クリスマスともなると二百人もの子供がわいわい押し寄せて、賑やかこの上ない有様でした。自慢すれば、今の中学科と比べて、私たちのそれはもう少し積極的だったような気がします。

カルバリ会に負けしと中学生シオン会を作り、会長、副会長も任命して、いろいろな奉仕活動を計画しました。我らのアイドルとして親しんだグラント家のダーナ嬢も一枚加わって、クリスマス劇の練習をしたり、教師だった三浦栄子先生の誕生日にはプレゼントを買って贈ったりしました。

幼き日に神を覚えよ、と聖書に書いてある通り、小、中学時代に神を知り、聖書を読むことができたなら、何にも勝る素晴らしいことだと思います。

私と同じ生徒だった連中は、菊田さん意外誰もいなくなりましたが、あの時の良き交わりを今もきっと心の中で温めているでしょう。

カルバリ会

小林満兄

頼りなさそうで頼りになる熊谷兄、その良きアシスタント安井姉を入れて礼拝後、幼稚園の片隅に五、六人集まるのがカルバリ会。そして、ちょっと聖句が難しくなると、すぐに専門化し、とうとう哲学の講義でも聴いているような気がしてくる。それでいて生徒たちはおのおの納得していく。

さて、わが会が直面している最大の問題は、人が少なくなってきていることである。このことについて昨年からいろいろ考えていて、多くの計画を立てているのだが、なかなか実行の段階まではいかない。

昨年のことであるが、非常に多くなったことがある。これは会長の指導が良かったこともあるが、最後には決まってスポーツをして楽しんだことが良かったと思う。今は何にも印象づけられることがない。例えスポーツをするにしても道具がいる。それで幼稚園の設備であるボールなどを破損したり、時間をわきまえずに長々と卓球をしこともある。このような行為をお詫びするが、人が少なく会費もなかなか集まらなくて道具もなかなか買えなかったのである。これから人を集める意味で、また、スポーツを始めるかもしれない。そうしたら、そのささやかな時間を認めて欲しい。無論前のようにはしないつもりである。

秋も深まり、野山は色付き始めた。この時を利用してピクニックにカルバリ会は行くかも知れぬ。その時はぜひ皆もご同行してください。

この時期よりわがカルバリ会は発展していくことを期待する。

青年会の現状

松谷東一郎兄

われわれの青年会は汽関車「仙台号」である。ドックであり活動源である石炭と水を与えてくれる教会からまだ出たばかりで、黒い煙をもくもくと出し続けてはいるが、最近エンジンの調子がすこぶる快調になりつつあるから、白い煙でつっ走る日もそう遠くはあるまい。

この仙台の地に伝道が開始されてから今年で十年。その間、レールの敷設キロ数は増大し、吉岡、黒松へと伝道列車は走り始めている。ところで、われわれは聖日礼拝後、聖書研究などと通して交わりを持ってはいるが、近時改めて「青年の信仰とは何か」という問題が提起されている。そしてそれは奉仕活動だ、という確信がかたまりつつある。その意味において礼拝後の時間的制限を補充しようと、毎土曜日三時から例会を設け奉仕活動ならびにより深い話し合いの場にしたいとの意見が一致した。

そうはいっても今年はみんな良く働いた。聖日にはCS教師、聖歌隊への参加、礼拝当番など。八月には青年が中心となり寒風沢で修養会を企画し、多くの兄弟姉妹の参加のもとに信仰青年の立場についてのヒートしたディスカッションを持つことが出来、これが今年の青年会のひとつの支柱ともなっている。来年はもっと意義を深めようとワークキャンプのごときものを計画している。

また、天城の青年大会には二人の姉妹が多忙な職務をおいて出席、恵まれて帰ってきた。われわれ啓蒙されるところ大であった。来る十一月二日には東北地区BYFの霊交会がわれらの地で開かれようとしている。われわれ青年が持ついろいろな信仰的問題を話し合いたいと思っている。

兎に角「仙台号」は未だ黒い煙であるが、白い煙へ目指して前進しているのである。

昔の婦人会

荘子聡子姉

秋も深く人々はものの哀れを想い、またいろいろと思索にふけるとき。わが教会の過ぎ去った十年一昔を静かに振り返り、一言だけ限られた文字に私の意のままに表現できぬかと思いますが申し上げたいと思います。

忘れも致しません。或る日の夕間暮れ、聞き慣れぬ美声にて「おくさん、ごめんください」というグラント夫人の訪問を頂きました。

私は当時、他教会員でしたが、それが、ま、この教会への出会いの第一歩となりました。それから種々のことが流れて、何を特記すべきか凡てが記憶のうずの中に仕舞い込まれ、そしてまた忘れることのいかに美しいものであることをも知りました。

神よいにしえわれらの先祖たちの日に
あなたがなされた　みわざを
彼らが　われらに　語ったのを耳で聞きました

（詩篇第四四編一）

今、私はこの聖句を味わいたい心境です。会員の一人ひとりが主の御前に選ばれて幸を思うとき、遥か南国の地、九州より婦人会結成することの如何に意義深く、そして重大であるかをお証し下さいました。当時婦人部長福永津義子先生の温情に浸り、また、日笠けさ子先生についても同じような数々の思い出です。それから川内キャンプ在住の婦人がたを招いたり、せっかく集まった友達も、豆粒のはじけるようにころげ出てしまい、会員として第一号にまず江原姉を上げることでしょう。

関谷牧師夫人、宣教師夫人を中心に、婦人会もさることながら、幼稚園には特に佐藤光子先生、三浦栄子先生、その他の先生方の御奉仕には心からの敬意と感謝を申し上げます。

今の婦人会

石田由紀子姉

教会婦人会について例会、皆様のスナップなどをお届け致したいと思います。

毎月第一週水曜日には幼稚園父母の会との合同礼拝があり、牧師のおすすめや講師の方々を招いての礼拝があります。第二週水曜日は教会で午前中に聖研、第四週水曜日には婦人会例会（世の光研究）があり、第五週のある場合は順番に家庭を回り親睦会ということになっております。

以前には、例会は各家庭を訪れ楽しい交わりの時を持ちましたが、只今はお仕事を持った方が大勢で、日中にそのような集まりを持つことは困難な状況にあります。けれども、牧師、宣教師御一家を筆頭に高島、吉永、藤沢、天野（あえ姉）、石田各姉のクリスチャンホームと吉永、荘子、江原、大石、菅原、渡辺各姉妹殆ど全員が聖日礼拝に出席されますので礼拝後正午までの教会学校では聖書の友を中心に和やかな婦人会の集まりが持て感謝しております。

年齢的にも七十代から二十代まで層が厚いのですが、皆様素敵な方々ばかりですので少しも年齢的な問題もなく、真に姉妹として喜び、苦しみを分け合っております。現在すぐに集まれる婦人会員は十七名おられますが、名簿にはまた六、七名程の会員名が記されております。来ることの出来ない方々の殆どは赤ちゃんがおられますので、幾分手のかからなくなった私どもも訪問により主のつながりを再開したいと考えております。

春、秋と教会ではクリスチャン同士の二組の方たちの結婚式がありました。お花を飾り、会場を整え、コワイヤ、受付など全員してお手伝いさせて頂き、その喜びと恵みに少し古ぼけたハートをときめかしたり致しました。飾りのない寂しい味のする教会の婦人会の中にあって、今後も共に主の導きを受け、求道の友を覚え、御救いのため祈ってゆきたいと思っております。

成人会

高島正男兄

成人会は約十名ほどでありますが、社会人として用務などの理由でなかなか顔が揃うことがありません。礼拝後の教会学校も出席者が少なく活気のないグループで残念です。婦人会の方はとてもよく運営されているのですから、成人会も何とかして教会第一の大グループとならなければならないと、会員一人ひとりは常に考えていますから、必ずや近くその日が来ると思っています。

その表れとして、最近毎月一回会員の宅でラーメン会なるものを持つようになりました。それは会員の家族を訪れラーメンを食べながら聖書を中心とした親睦を目的としたものであります。

教会員は主なる神様を父として総て兄弟姉妹となり、喜びも悲しみも共に分かち合うべきでありますが、現実は只教会堂内のみの兄弟姉妹であって、教会堂から出るともう全くの他人と化する状態に感じられて、何か兄弟や姉妹と云っても口先のみとのような気がしないでもありませんが、このラーメン会の時には礼拝後各自思い思いの世間話など語り合い、うち揃って一会員の家庭を訪問し聖書を中心にして、現実のクリスチャンホームにあって理想のホームなどを思い語り、励まし合ううちに話題も時折笑いが飛び出して満腹となるときは一つ釜の食べ物を分け合ったことによる兄弟感を感覚的に感じられるところもあります。

教会堂の兄弟から家庭に帰っても兄弟家庭となっても交わりを一層深くして信仰の道を誤ることなく互いに助け合って生涯を全うしていきたいものであります。そのために成人会の発展を心から祈ります。

幼稚園

戸波なつ姉

周囲に大小数多くの幼稚園がある中で、バプテスト幼稚園は小さいながらも教会付属の幼稚園として、「幼な子とその家庭にキリストの光を」と願いつつ今日まで努力が続けられてきましたことを感謝します。

創立当時から二十名の園児で家庭的な保育がな

され、その家族との交わりも特別だったものと考えられます。その反面、少数幼稚園ではいろいろと何彼につけて困難も多かったことと思われます。

現在では四十名の園児で、施設の不備なども感じますが、教師も三名に増え一層力を合わせ幼児のキリスト教保育に当たっています。

嬉しいことはキリスト教保育を特に望んでこの幼稚園を選ばれる方が増えてきたことです。入園の動機はそれぞれいろいろですが、その一人ひとりが神に導かれこの園に通うようになったことを信じ、「創られたすべてのものに福音を宣べ伝えよ。地の果てまで行って証人となれ」との御言葉に従って、「真の幸福の門出」のお手伝いをさせて頂き、幼児のよき羊飼いであると同時に私共もまた素直な小羊でありたいと思っております。

小羊会

石田由紀子姉

私たちの教会小羊会について少しご紹介したいと思います。

そこには神に愛でられた赤ちゃんから学齢前の小羊たちが嬉々として毎月一回の礼拝に集まっております。もう四年近くなりますが、ボートライト夫人、大沼牧師夫人によって創設され、信者の子供や友人の子供たち約十名が集まり、その中には吉永姉、また私共の二番目の子供も誕生より会員となり、早三歳を超えるまでとなっています。

小羊会の目標とするところは、バプテスト便覧に基づき①天の父に祈る②みことばを学ぶ③世界の子供たちのことを学ぶ④伝道⑤捧げ物の五要綱を主軸として、幼いときから天にいます父の御旨を行う者A（マタイ七：二一）となるよう導き訓練することであります。

信仰を受け入れる土俵はよくよく耕さなければ良い発芽は得られぬことを常に思っています。無垢なる子供たちに種が蒔かれたとき、親をも求める者とされることを主はいつも示して下さいます。

「子供たちも次第に成長し、会も種々の問題が定期されるようになりました。各自異なった小学校、幼稚園に通うようになたため、従来の第三水曜日午後一時半に全部揃うのは困難になったこと、また、一時牧師、宣教師御一家の離仙、友人の転勤などで会員も半数になったことなどでした。

しかし、この四月からは教会幼稚園より新しい小羊たちも沢山恵まれ、以前にも増して楽しい集まりが持てるようになったことは感謝です。

毎月例会前には幼稚園全員に他に散在する小羊たちに合図がなされます。

仙台小羊会の大きな特徴はボートライト夫人の御帰仙により、小羊たちへの英語のレッスンが再開されたこと、同伴のママのため、天野牧師を中心としたバイブルクラスが持たれていることでありましょう。

例会は、世の光プログラムよりエキスを頂き、二、三歳児も首を振り振り歌う子供讃美歌を沢山盛った合同礼拝、年齢別二クラスの分級―幼稚園教師であり、婦人会員でもある戸波姉を中心としてお仕事の指導を受け、おやつ、ママも分級の折り先生と膝を交えて聖書研究に励むのです。

熱い祈りはお一人ひとりが主を救い主と仰ぎ、家庭を主の庭に作り変えることです。

また、天野夫人を中心としてCS小学生にも呼び掛け、翌日午後に小学科小羊会を持とうという計画も進められております。

将来は、赤ちゃんより少年少女会まで一本の逞しい幹に成長出来るよう日々祈っています。皆様の祈りの支えをお願いします。

礼拝

吉永馨兄

日曜毎の礼拝はクリスチャン生活の中心といわれている。主の御愛に抱かれた老若男女が週の初めの日、主の復活の聖なる日に教会に集まり、主を礼拝し得ることは真に幸せなことである。

我々の教会では九時から小・中学生の礼拝があり、次いで十時から高校生以上の成人の礼拝がある。小・中学生の礼拝は教会学校との関連が深いの、その項を参照して頂くことにして、ここでは成人の礼拝についてだけ述べよう。

玄関での受け付けを始めとし、オルガン奉仕、礼拝の司会、合唱、献金、礼拝後の報告など、毎週きちんと当番が決められており、司会者が全体の責任を取ることになっている。司会は主な役員が担当し、他の役割は会員が交代で夫々担当する。またこの分担は年に四回改善することになっているから、すべての会員が礼拝の進行に関与していることになる。

礼拝はオルガン奉仕者の奏楽に始まり、司会者の指揮で讃美歌、主の祈り、交読と進行し、聖書朗読、朝の祈りと続いて行く。原則として聖歌隊による合唱奉仕がある。その後牧師先生の静かな、しかし、力強い説教を聞く。礼拝の中心をなすこの説教は、身近かなたとえを多く用いるため

分かり易く、淳々と、神の愛を説き、人の罪を説き、イエスの十字架を解き明かしてくれる。この後、祈祷があり、祝祷によって礼拝が終わる。

礼拝後、初めて教会に来た人の紹介があり、拍手をもって新来者が歓迎される。続いて、教会内外の一週間の動静が報告されたのち、直ちに教会学校が各クラスに分かれて始まる。

さあ今日も主日礼拝を守った。この一週間、あなたの僕としてこの敬虔な心を持ち続けることが出来ますように。

祈祷会

岩崎みわ子姉

私がバプテスマを受けたのは高校三年の秋の末頃であった。それから三年になろうとしている。けれども何も自分がより良くなった気がしないが、祈祷会を通して、沢山の人々の祈り、あかしを聞くことが出来た。その一つに忘れられない祈る人の姿が浮かんでくる。それは母の姿である。母の生活は苦しみの生活であったが、鮫の地にいつかは教会を建てられるようにと、毎日その祈りを祈ることにより、力を与えられてきたという。このように時々自分も本当に習慣だけの祈りではなくして、常に熱心に祈りたい。そうするなら必ず神の恵があることを確信して…。

仙台へ来て祈祷会に出席することが出来るのは本当に感謝です。時にはどうしようかなあと思い迷いますが、帰ってくると、ああ行って良かったなあという気持ちでいっぱいになります。

最後に祈りについての私の好きな聖句を書きます。

「二、三人我が名によりて集まるところに、また我もあるなり」

早天祈祷会

渡辺正好兄

七月十六日（木）曇　かねてから、懸案の早天祈祷会を行った。加藤兄と二人だけだったが一生懸命やった。でも自分が恐ろしくなる。狂信的なのでは、他人に言われる前にすぐこんな気持ちが表れる。どうして、何故、不安。私の魂は誰のものか！人と違った、いや自分の一方の心とは違った行動をとるのは恐ろしいことだ。もちろん間違ったことではないと思うし、私は私なりに信仰を保ちたい。他の人はどうあれ、自分を知りたい。何者だ！献身などできるのか！

祈祷会開始の日のアンネ（僕の日記）にはこんな気持ちが表れる。まがりなりにも続けたこの会は何も教会に新風をまき起こそうなんぞと考えてのことではない。自分を試したかった。同志があった。ちょいと青年の意気を示したかった。でなことでおそるおそる始めたのである。

それでも最初のうちは複数（会だから当然なんでしょうが）で持ったが、ネボウの虫が起こったり、バイト、旅行などでちょいと休みがたてこむと、単数の会と相成った。こっちだって週に何回出たか？あまり模範的ではなかったが、とにかく良い勉強になった。改めて協力の必要性と真の教会の姿、またキリスト者の務め、生活上の証詞の反映等々、考えさせられる問題が切実にぶつかってきた。ある日は抽象的に、ある日には具体的に、我々の奉仕、献身に目に見える報いは少なげだが…。

「わたしのいましめはこれである。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」（ヨハネ一五）

夕拝

鎌田栄子姉

毎週の夕拝が私にとっては本当に待ち遠しく思われます。自分のCSの教師としての責任の重さをはっきり知ったときに私は、私は神様を信じているとは言いながら、知的なこと、霊的なことの足りなさに気付き空しくなったのです。（それで私は母教会ではございませんが夕拝のある当教会に出席させて頂いております）

本当に信仰の弱い私にとっては説教を心を込めて聞くことによる以外に与えられたCSの生徒たちに御言を取り次ぐことは出来ないと思います。私は神様に心から感謝します。神様は私のために、こんな弱い私のためにどんな立派な宴席よりも、もっと素晴らしい夕拝の席をとっておいて下さるのです。そこの床は互いの信頼というじゅうたんが敷かれ、永遠の命の水によって拭き清められ、真理の言葉という宝石で飾られておるのです。

私たちが見回すこの世の中で何処にこんな素晴らしい宴席があるでしょうか。本当に私は幸いです。

神様は心からの願いに応えて下さいます。私はこの夕拝の席で悪い心のときも、嬉しい心のときも偽りのない心で神様とお話をし、御言葉を聞き、また、主にある友と語り合うことの出来るときを与えられておりますことを感謝しております。夕拝は私にとって欠くことのできないものです。こんなに素晴らしい宴席に私はのぞみと喜び

という晴れ着を着て臨みたいと思います。

バプテスマについて

堀　米　と　し　子　姉

私が求道中のうちに何度かバプテスマ式を見ることができましたが、そのたびに心を動かされてなりませんでした。バプテスマ式の讃美歌の一節が終わり、いよいよ浸水。牧師先生と受浸者の声が厳粛な会堂に響く…。と同時に讃美歌を歌っている自分が何故か胸に込み上げてくるものがあり、目には熱いものが感じられ、讃美歌も途切れ途切れになってしまったことが思い出されます。信じられる人が急に羨ましくなり、この時ほど自分が恥ずかしく、また申し訳ないような、実を引き締められるような、何とも言い様のない感じに襲われたことはありませんでした。それが求道していけばいくほど強く感じられたのです。

ところが幸せにもイエス様は私をも救って下さったのです。元旦礼拝というめでたいときに、みんなに祝福されバプテスマを受けることができました。

私の心は感謝でいっぱいでした。喜びが爆発しそうでした。この喜びをまだ神様を知らない人に分けてやりたい一心でした。すべてのものに意味が生じ、まるで世界が一変したようでした。あの時の感激は永遠に忘れられないでしょう。

キリストを信じて生きるためにただ一つくぐらねばならぬ儀式であり、キリストの死に与かるこのバプテスマ。罪を許され、キリストと共に生かされて新しい命に生きることのできた私。何と幸せなことでしょう。

ルターが試練に合ったとき、机の白墨で、「私は洗礼を受けている」と書いたそうですが、キリストの救いを受け入れて信者になったということはなにものにも換えがたい大きな事柄であると思います。あの時のバプテスマ式は私の人生の出発点でもあり、一年の、また、一日の出発点でもあります。

私の一日は一言の祈りによって始まります。「主よ、あなたのバプテスマを今日の私のあゆみの出発点にして下さい」。

結婚式について

熊　谷　雄　介　兄

結婚式、それは、新郎新婦の永遠の誓いをし、結ばれた二人が、関係社会の人々に一つのデモンストレーションをする場です。

結婚式には種々あります。神前結婚とか結婚専門会場での結婚式とか、それにキリスト教会での結婚式とか…。私はこの中でキリスト教の結婚式が好きです。他の二者をも含めてすべて結婚式は最初の規定に妥当すると思います。しかし、教会での結婚式では更に神が二人の上にまた会衆の上に臨んで下さいます。

私は先日渡辺眞人兄と齋藤慶子姉の結婚式に出席しました。結婚式の準備はお二人は勿論のこと神に連なる兄弟姉妹によって心を込めてなされていました。ここには義務、義理、人情などによってなされた仕事は一つもなく、誰もが二人を祝福したいという気持ちから衝動にかられてした仕事でした。美しくウェディングドレスに身を装った新婦は新郎に全く信頼し、また、新郎は新婦を労りお似合いの夫婦でした。あの二人が神の前で永遠の愛を誓い合った瞬間は今でも想起されます。

このように身も心も清められて二人が結ばれ、それを皆が心から喜び、祝福している様子を見ていて、私は神の臨在を感じざるを得ませんでした。結婚は本来二人のものですが、そこに会衆が加わっても調和が崩れないのが教会の結婚式ではないでしょうか。

クリスマスの思い出

菊　田　瑠　美　子　姉

智子様

お元気でいらっしゃいますか。天を仰ぐとんがり屋根の白い教会堂。そして澄み切った秋の空に無限の可能性を秘めてキラキラ輝いている十字架。この私たちの教会が創立十周年を迎えるという感激を貴女にどうお伝えしたら良いでしょう。

憶えていらっしゃるでしょう？降り頻る雪の中に清麗として立っている教会を見つめながら、また、僅かに光が射し込む礼拝堂で信仰について友情について語り合ったあの日のことを。思い出は尽きません。

教会の行事にも復活祭、花の日礼拝、収穫感謝礼拝、ハイキングなど種々ありましたが、やはり最も印象深いのはクリスマス礼拝ですね。無意味な町の喧騒の中にあって、心からイエス・キリストの降誕を祝うこの行事はどんなに貧しいものであっても価値のあるひとときです。

一九六一年十二月二十五日は、私の受洗した日でもあり、私のためのクリスマスのようにさえ思えたものでしたわ。聖歌隊に加わっていた私は、そして貴女もクリスマスの興奮を抑え切れずに、でも努めて厳かにキャンドルを点して入場し、心から讃美をしました。礼拝後の祝会では凡そクリ

スマスらしからぬ、しかも甚だ現代音楽的な合唱を披露して冷や汗をかきましたね。その翌年には、いつもと趣向が違ってスライドを見ながら、貴女は出席なさいませんでしたが、高校二年、即一九六〇年のクリスマスは聖歌隊の合唱と交互に各々一人の教会員の男女が聖書を朗読するという演出味の利いた礼拝でした。

近頃、青年会がハッスルしているためか活気づいてきたように思われて今年のクリスマスが楽しみです。貴女もそちらの教会でご活躍なさっているとか。近況をお知らせ下さいませ。では貴女と貴女の教会の上に限りない神の祝福がありますように。

また、神の御加護によって十周年を迎えることが出来た教会の今後の発展のために、私たち一人ひとりの働きのためにお祈り下さいませ。（一九六四年十月二十日）

キャロリング

安井洋子姉

クリスマスイブの八時になるとキャロリングに行く面々が三々五々集まってくる。ロウソクのに紙を巻つけて、ろうが垂れないようにし、讃美歌の個所を打ち合わせていよいよ出発。総勢二十人。そしてもう一つ、忘れてならないもの、それは男性のズボンのポケットに忍ばせてある大きな風呂敷である。チロル地方ではアルプスでの放牧を終えた夜、子供たちが牛の首につけた鈴を鳴らして家々を回り、お菓子をもらって歩くというが、我々のキャロリングもちょうどそれのように単純で神聖でクリスマス行事最大の楽しみになっているのだ。女性が明け方の二時頃、町中をかっ歩出来るのも一年のうちこの時だけ。勿論、キャロリングの意味は、クリスマスの喜びを戸ごとに伝え、共に神の讃美をするということであり、星のまたたく夜空の下でロウソクのチラつく明かりを頼りに讃美を合唱するとき、真にその喜びが身体全体に漲るのである。

大きな風呂敷がキャンディーやミカンで膨れ、皆の手が凍ったように冷たくなってしまう～頃には、もう二十五日が始まっている。ロウソクも小さくなって、その大任を果たした喜びをかみしめている。

誰もいない夜道を家路につくとき、クリスマスを真に祝える者としての喜びが一人ひとりの胸の中を暖めているのだ。

修養会

鈴谷輝明兄

寒風沢
アルバムを開くと寒風沢は
私一面に広がり出した
出発—
海は私を自由にし束縛を忘れさせた
視界を遮るものは何もない
その広がりは私を無限へと心を開かせた
昔も今も変わらぬ紺青のうち寄せるゆうめきは
私の心を解放させた
太陽の反射が肌と眼を刺激し
遥かな水平線は
私をこの世のものではない彼岸へと誘った
小船が後にする白波は
私の感情と思考とをすっかり洗った
遠方から運ばれた魚辺の大気と
波は一時孤島に一休みをする

水泳
自然の人によって痛めつけられた
トンネルを通して
子供たちのはしゃぎ声がその筒に響く
海はその輝きとうねりが砕け合って
私を迎えていてくれた
その紺碧の海と孤島のユリの匂いは
私をしばらく酔わせた
彼女は私を浮かばせてくれなかった
私は逆らった
しかし彼女は和解しなかった
遊び疲れた
彼女は飛泡となって
砕け退きまた繰り返して岩を襲う
カニ釣りは楽しかった

晩祷
静かに水とを天とを心に描き
その一瞬自分を見出し
神と対座せざるを得なかった
祈りは波の砕ける音に融け込んだ

夜の談笑
星が互いに結び合うとき
空想に胸をふくらませるとき
食い残りのにぎりを明日の魚の糧にしてやった
「こらー」の漁師の一声は
私を不快にしなかった
かすかな風がそれを遠くへ追いやったから

キャンプファイー
彼女の子がキャンプフィーに落ち
砂浜はそれを素直に吸い込んだ
そんな大海原を擁してもまだ不足らしい

最後の日
明るい真蓋　緑の松の展望台は
いまも怒濤に抗しているだろう

寒風沢の思い出は
アルバムを閉じても尽きない

ピクニックの思い出

鈴木京子姉

昭和三十四年初秋、教会揃ってのピクニックがありました。北仙台駅から愛子まで汽車で行き、そのあと目的地のサイカチ沼まで三十分程のハイクだったと思います。高く晴れわたった秋の日、歩いて行くと少し汗ばむほどの日でした。

会堂で神様を讃美する私たち。そして、野外で自然と共に歌い、ボールと戯れる私たち。中学生、カルバリ会、青年会、成人会、みんな一緒でしたが、そこにはやはり神様を中心にしたほのぼのとした交わりがあったと今でも懐かしく思い起こします。

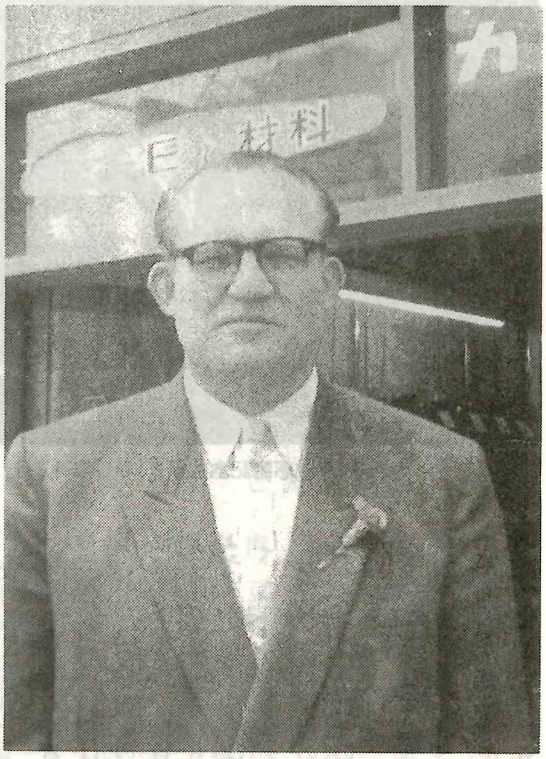
そしてまた、あの時共に楽しく過ごした人々の中に今では私たちの教会の中に姿の見られない人も何人かあるということも、しみじみと思うことです。転勤した兄弟、結婚のため、勉学のため仙台を離れた兄弟姉妹など。五年経った今、サイカチ沼へのピクニックを一緒に懐かしむ人も少ないと。

プロフィール
○グラント師

編集部

アメリカの大学当時はボクシングの選手で、見るからにそのようなことは分かる程、素晴らしい体格です。仙台に来た当時の彼の生活は、住居もなく、一時尚絅女学院の先生のお宅に部屋を借りたり、水戸のガラット師のお宅から仙台に通ったりの大変御苦労な生活のようでした。

持ち前のファイトで苦難の道を切り開き、現在の会堂を設立し、同時に宣教師館も立てられ、現在の教会に至る重要な基礎を築きました。この頃から彼の日本語も上手になってきて、買い物好きの先生は、いつもポケットにピーナッツとかせんべいを忍ばせておいて、ポリポリ、パリパリとやりながらデパートなどを歩く時間も取れるようになり、いつもニコニコと冗談などを飛ばしながら、仙台の一市民としての生活も楽しんでおられたようでした。


グラント師

家庭にあっては美しいミセスと共に四人の可愛いレディの良きパパであり、親子丼を週に三回も食べたり、ピーと焼き芋屋のおっさんがやってくれば出ていって立ち食いするなどのエピソードは先生の人柄を良く表していると思われます。

現在は大井町教会の宣教師、ヨルダン社の副社長等々、元気な毎日を、西に東に黒塗りのワゴンを飛ばして忙しい伝道生活をなされていることと思います。（石井姉の談による）

○ボートライト師

阿部忠兄

ミセス・ボートライトが「ボブ」と呼んでいるボートライト先生は三人のすばらしいパパさんです。日本語の大変上手な先生は、英語の良く分からない僕に、全然ことばに不自由を感じさせません。とにかく日本語でシャレを飛ばす程ですから不思議はありません。いつもニコニコと三人の子供さんに目を向けている奥様、読書が大変好きなメリー・リンダ、聖書に出てくるダビデのように強くなりたいと柔道で私と付き合ったダビデ君、

たくあん漬けもパリパリ食べちゃう末っ子のジュディー、三人と仲良しの犬のブラウニーと猫が家族のメンバーです。

さて、ボートライト先生自身についてですが、彼はいつも朗らかで、話をしているときなどは、皆さんもそうでしょうが、きっと何か分からないが、不思議な魅力を感ずると思います。それは、きっと先生の人柄の良さと思われます。そのようなほのぼのとするような先生の魅力を発揮させるには、やはり、ミセス・ボートライト（ベティー）と一緒になると倍加するようですね。大いに彼女によるところがあると思われます。TVのアメリカの家庭の飾り気のない清々しい、ごく普通のパパさん、それがボートライト先生じゃないかと思われます。いつまでも、いろいろの事情が許す限り仙台の一市民として、また宣教師として元気で御活躍下さい。

○関谷定夫師

安井洋子姉

四角な顔をして眼鏡をかけて人一倍大きな声で讃美歌を歌って、ゼスチャーたっぷりに面白い話を沢山聞かせてくれる、関谷先生はそんな方でした。私たちの肩をポンとたたいて「こら、良く勉強しているか」と声を掛けて下さるほど気さくな親しみのわく、そして頼もしい先生です。今の天野先生と違うところは時々大声で夫婦喧嘩をなさることでした。奥さんの玲子先生の方が強くって、口でいつも負けてばかり、でもそれがかえって仲の良いことを証明しているみたいです。

お説教やお祈りをするときの真剣な態度には牧師としての威厳が感じられ、牧師の風格満点と言いたいくらいです。お説教でも、たまに中学生向きの分かりやすいテーマを選んで話して下さり、小中学のCSと関谷先生とはとても中が良かったものです。

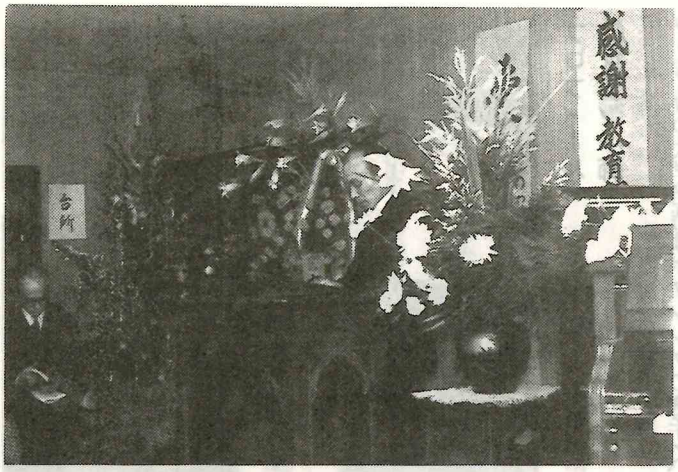
少し褒め過ぎたかも知れません。でも私にはこんな印象しか残っていないのです。

○大沼上師

石田信二兄

十年の歴史の中で大沼師は最も長い間牧会を持たれました。その御働きを一言で申せば「主にある正しき農夫」であったと云えましょう。自らは新しき畑を耕し、良き種をまき、古き畑よりは迷いの芽を摘み、雑草を抜き、さまたげの枝をはらい、つまづきの石を取り捨てました。そして、常に曇りなき太陽の光りを畑の土に導かれました。

ために、弱い芽や伸び過ぎの枝には耐え得ない厳しさを覚えたこともありましょう。事実、先生についての印象や評価は実にまちまちです。私自身も良く理解したつもりで、実はまだよく分からない面もあるのです。只、こんなことが言えます。師から牧会の任を取り上げてしまったらば、そこにはユーモアに満ちた温かいパパ、そして兄貴、が生まれ出ることでしょうが、さりげない顔でふとオノロケを聞かされたこともたびたびでありました。また、驚くべき雑学家でもあります。どんな話題の中にも夫々相当に突っ込んだ知識を披露されました。そしてまた、そのような知識を実に巧みに利用され、聖書の講義をより明解に図式的に、さらに霊的なものへと高めて行かれました。



教育館完成感謝記念礼拝（1967年12月）

特に先生の去られる最後の数か月間の確信に満ちた深い力強い説教は未だに耳に残っている方が多いでしょう。先生の去られたことについて吾々には幾多の思い、反省が残ります。然し時の流れより見れば眞にそれも主の御計画なのでありましょう。まことに先生は私たちの教会のあり方を正し、これに良き種をまくために来られたのです。そして今この十年目の豊かな実りの刈り入れる時に当たりひそかにその御働きの跡を想うのです。

○天野五郎師

斎藤民子姉

先生が福島の教会から私たちの教会へいらしてから一年と少し。でもずっと以前に来られたよう

な気がします。今年の三月まで奥さんや有君多恵子ちゃんと福島と仙台に分かれて生活し、私たちに神様の御詞を伝え、導いて下さいました。本当に感謝いたします。

今と比べるといらしたばかりの先生は何だか少し寂しそうでした。それはきっと多恵子ちゃんたちと離れていらしたからでしょう。先生がいらしてから私たちの教会は活気があふれてきたようです。会堂、庭の掃除、春秋のピクニック。ピクニックでは先生の発明とかいうバドミントン野球？ソフトボールなどを時間の経つのも忘れて夢中でやっておられました。そんな時の先生は子供みたいと思います。

先生は何事においても積極的で熱心です。私たちは大いにこのことを見習うべきです。先生、これからもどうぞよろしく私たちを導いて下さい。

年会の感想

中目源太郎兄

思えば十年前、仙台教会が伝道所として出発して以来、数次にわたり伊豆の天城山荘における年会に参加することに恵まれました。

伝道所時代は代議員としての資格もなく、青いリボンをつけて年会に参加し、連盟のあり方を勉強させて頂きました。小生、南部バプテスト教会付属の寮（前理事長熊野牧師）で学生生活を送り、教会のあり方を学んで参りました者にとって、連盟のあり方が身に沁みて分かってきたわけです。

当時の天城山荘は今よりも小さく少人数の集まりでした。議題の数も少なかったと思います。同じ位の期間でしたが、研修会を持つ余裕も十分にありました。

その後何回目でしたか、教会成立申請のために代議員としてグラント先生、関谷先生、桝沢兄、小生の大勢で出席し、多くの議題の中で教会として認められ、連盟参加を許された時は感激して帰仙できたわけです。最近の年会では新生運動に関する年の年会と思います。連盟全体の大運動としての特別伝道活動について決定され、信徒決起大会も持たれ、新生運動人として突入していったことです。

天城山荘は伊豆の大水害のときにノアの箱舟の役をしてきました。連盟も天城山荘も神の恵みにより発展している現状を見せて頂いたことを感謝し、今後の年会の発展を見守りたいと思います。

大食会

茂木孝夫兄

我々は何のために教会に行き、交わりをなすかと書くのは愚問であろうと思うので書かない。我々が互いに結んでいるその絆は愛である。愛はすべてを完全に結ぶ帯である。「コロサイ三～十四」我々はしっかりと帯びを締め合い生きているわけである。しかし、時としてエゴによって支配され、愛の本質は形式化され、しばしば比較対照によって愛を植えつけるような考えにまで至るのではなかろうか。これに反省し、もっと愛というものを深く考えなければいけないと思う。

こんな言葉がある。人間とは精神である。精神とは自己である。自己とは自己自身に関係する関係である。即ち人間とは関係存在である。我々は相互依存性の上に生き、能動的な形をもって傍観の姿ではなく、生き抜く主体として存在しているわけである。我々はこのように考えて生きているだろうか。我々は本当に心からあなたと信頼の上に人間関係を保っているであろうか。私にとって疑問である。我々はそういう考えのもとに（私にとっては）大食会を開いたといっても過言ではあるまい。それは話し合いの中に出てくるのではなく、無言の中に感ずるものである。

湯気がもうもうとして鍋を支配する中には、肉、豆腐、野菜…が私たちを待っている。私たちが買い、切り、煮、味つけしたのは、我々の共同性の結晶なのである。私たちは腹一杯食べた。腹一杯にあなたの心を信じるように、あなたの信頼を腹一杯に食べるかの如く、私たちは笑い声は電灯を潰けるまでに至ったのである。

ラーメン会のこと

杉山久是兄

今年の春、何月何日であるか忘れましたが、成人会の席上で「私たち成人会のメンバーは礼拝の後で単に聖書について話し合う時間も持つだけでなく、一層親しくなり、また、キリスト者として更に成長するためにも、各会員宅を持ち回りで食事する会を」というどなたかの御提案により発会された成人会の成長強化手段としての会が主題のラーメン会であると記憶します。それで第一回会合を天野先生とその他数人の方々の御出席にて、私の家にて開いたのでした。（このことによりラーメン会における私の家はオリンピックにおけるギリシャの位置になったのでした）

さて、三度程出席致し感じましたこと、それは会員の方々の善意でした。会員の皆さんは私を除いては本当のキリスト人ですから、善意あふるる態度でいられるのは当然といえば当然でしょう

が、さすがキリスト者であると感じた次第です。

それは話し合う方々の態度の真剣さにも感じられました。会名のラーメン会が、大変なご馳走を頂く会になったりすることからも現実的に感じたのでした。こんな善意の中に、やはり「神しろしめす」と感じるのでした。ラーメンはありふれた食べ物、その食べ物を高度な物、ベストな物にするには、大きなしかも長い努力が必要、しかし、「神しろしめす」を信ずるキリスト者の集団は、ありふれた食べ物をベストな食べ物にすることも可能なりと私は信じるのです。

新生運動について

渡辺淳一兄

この運動の動きは大分以前からあったようで、私の知っている限り、その前年八月天城で行われた「青年信徒大会」では既にそのことは話されており、少なくともそれ以前には始まっていたようである。正直言って私はそれまで新生運動という言葉を我々の教会で聞いたことはなかった。もっとも、その当時私はまだ会員ではなかった故、或は教会員の中ではその準備が進められていたのかもしれないが、とにかく、新生運動のことが教会員の口に上がるようになったのは、八月以降であったと思う。それからは、教会員が度々そのことについて討議していた。その結果その全国的な運動に歩調を合わせていくことになった。しかしまだまだ教会員全員には徹底せず準備に携わっていたのは大沼牧師、ボートライト師を中心にほんの限られた人たちだけであった。それに準備の途中、大沼牧師が転任され、我々の心の中には先行きに対する不安があった。その中にあって一人気を吐いたのがボートライト師であった。私も氏の助けをしたが、師のファイトは物凄かった。

一方、教会員一人ひとりも次第に会の日が近づいてくるにつれて、一つの目標に向かって進んだ。きれいなポスターを張ったり、会場の交渉をしたり、新聞テレビによる宣伝、外に対する準備は万端整った。教会の内部でもその会のために役割の分担、心の準備と夫々の会員に責任が割り当てられた。

そうこうしているうちに、この会のために応援して下さるアメリカの諸兄姉がやって来た。ヒューストンのパークプレイス教会の牧師ウェスターさん。がっちりした体で、いかにも頼もしいサンアントニオからいらしたウッドさん。盛んにテキサスの自慢をしていた、自称「人間を捕る漁師」のパワーさん。日本に来るために何冊も日本に関する本を読んだというグルーバーさん。美しい音色のアコーディオン演奏を聞かして下さった○○さん。我々の心は熱した。

当日、私の個人的な感じではあるが、会衆が期待よりも少なかったこと、このことは本当に残念であった。それほど我々の努力は足りなかったのだろうかと本当に残念であった。しかし、その後一人の兄弟から言われて、会衆の多少は私が残念がる程大したことではないと言われ、私が間違っていたことを悟った。一人の人でも福音を聞くことができたことは大いに喜ぶべきであった。そして、私は改めてそのことを感謝したことであった。

教会に思う

古野幸子姉

他教会から来たせいか、この教会の中にあるいろいろなことが目につきます。そして、それに対してこうした方がいいのにとか、ああした方がいいのにと考えていることがしばしばあります。教会内では交流もしているし、皆一生懸命であることが良く分かります。それを外へ知らせようとする人の少ないのに少しがっかりしてしまいました。

ここで記するまでもありませんが、教会とはキリストの体であり、その一部一部の働きを私たちクリスチャンがしていて教会が成り立っていると思うのです。言い換えるなら、キリストが木であるならば私たちは小枝となるのでしょう。

私が一番最初にこの教会を訪れた時に感じたことは建て物の素晴らしいこと、そして教会の中では淋しさを覚えました。会堂の中に入った時の感じは、いきいきとした空気を吸えなかったという淋しさでした。それから半年くらい経った今思うのは、神の栄光と、神の愛を数え知れぬほど受けているはずなのに、そのまわりには伝道ということがあまり活発に行われていないということでした。

そして、望むことは、伝道ということをもう少し一人ひとりの頭に刻んでほしいということです。自分の受けたこの喜びをまだ知らない多くの人たちに伝えるのが私たちクリスチャンに課せられたことなのですから、あかしのある教会となりたいものです。そして路傍伝道に例をとるならば、恥ずかしい、忙しい、しかし、このこともキリストの十字架を思うなら、例え火のような道が

前途にあろうとも道は開けるのではないかと思います。

石炭で走る汽車は燃料がなくなると止まってしまいます。そのような信仰ではなく、原子炉のようにいくら消えかかっても必ず燃え上がるような信仰を持ちたいものです。もっともっと霊的に成長した教会になることを念じて止みません。

教会に思う

山田澄子姉

この恵まれたバプテスト教会に導かれて一年、私はこの教会生活程大きな意味での自由な楽しい場は、この世にはないと声を大にして叫びつつこの生活を大切にし、それを非情な喜びとするものである。

聖日の礼拝に神様を讃美し、神様の言を学ぶ中に、その響きがある時は悲しみや苦しみの自分を励まされ、ある時は喜びを、また、更に大きな喜びへと常に神の愛は深く限りなく豊かである。私はクリスチャンといっても甚だ信仰薄き弱き者である。だから私たちはクリスチャンとして向上し、その共同使命である神の福音を宣べ伝えて行くには教会生活から離れては不可能であると思う。

教会といってもこれは神が支配する一つの人間社会の集まりで、いろいろ大変だなと思うこと、煩わしいことも時にはある。しかし、それらのことも、神様へのためと思うと皆一挙に解決されることである。私たちがどんなに曲がりくねって考えても、神様は、何時如何なる時にも必ず良い方向へと導いて下さる。その機会を与えて下さる。これは本当に有り難いことである。

教会生活の中で思うこと、願うこと、あれやこれやあるけれど、自分の能力のなさを思うと、この恵まれた教会に置かれていることを唯感謝するばかりである。この神様の愛に応えるべき私たちは、一人ひとりクリスチャンであることの自覚を新たにし、もっともっと主のために働かなくてはと思う。そして、それを最大の幸福と思う者でありたいと願う。

「主よ我々に再び勇気と能力を与えたまえ」。

仙台第二バプテスト教会

百万都市を目指す仙台に、バプテスト教会がたった一つ!?

ミセス・ボートライトの伝道報告を聞いていたミセス・ハウエルはびっくりしました。仙台ぐらいの町なら、米国では、バプテスト教会だけでも六十はあるでしょう。それがたった一つ…。

ハウエル夫人はお母さんのジェンキンスさんにそのことを話しました。ことし八十歳になるジェンキンスさんは、それを聞いて祈りの中に確信して牧師であった亡夫の遺してくれたシールズ・ロバック社の持ち株六十二（七三三ドル弱）を仙台第二バプテスト教会設立のため献げる決心をしました。

やがて形成されてゆく仙台第二バプテスト教会は、主のために大いなるわざと、大いなる人物を生み出してゆくでしょう。私はそう確信しています、と話すジェンキンスさんは、娘のハウエル夫人といつもそのために祈り続けていることでしょう。

そしてハウエル夫人の四百ドルと合わせた七七三六ドル（およそ277万余）が今、私たちの信仰の手の中に握られているのです。

（ボートライト先生の談話から・天野記）

ひとこと

吉永慶子姉

教会の本質は、信徒間の交わりだと言われています。毎週、礼拝後の三十分、婦人会の人たちが集まって開く聖書クラスは、交わりを通しての聖書の勉強であり、教会生活の楽しみの一つでもあります。

ひとこと

加藤亮子姉

私がこの教会に来てもう三年近くになり、そしてこの度は十周年を皆さんと迎えることができ、嬉しさで一杯です。ひと口に十年というけれども長い旅をしてきたことですね。

その間に主の御言葉は多くの人に語られ、一人ひとりの心の中に大いなる導きがあって生活していることでしょう。これからも一人でも多くの人に御言葉を伝えていくことができますように。教会の発展を心からお祈りいたします。

ひとこと

高島友子姉

十周年目を迎えて本当にうれしいです。これまでの十年間に、この教会が仙台の人々との心に残したものは大きいと思います。これまでのように、より多くの人々に神の福音が述べ伝えられることを望みます。

編集後記

編集後記は編集者が書くのが当たり前なのに、編集者でもなんでもない私が、この空欄を埋めねばならなくなった―ということの起こりはこうです。

印刷所に文集の割り付け、原稿を渡す前夜。

「―なかなかヴァラエティに富んでいていいですネ。これは編集者の功績ですヨ…。編集後記の後に『編集者を称える』ぐらいの一文を添えなきゃいかんですナ…」

といったのが運の尽き。とどのつまり私がそれを引き受けさせられることになったのですが、翌朝、言づてと一緒に届けられた原稿の中に「編集後記」がない…。編集後記の後に…といったのを勘違いされてか、あえて勘違いにしてしまって、などと思いながらも時間がないままに、私がこうしてこの空欄を、ということになったわけです。

とにかく、石田信二兄を始め、阿部忠、渡辺淳一、安井洋子の四兄姉が、多忙の間にあってしばしば編集会議を開き、また原稿集めに苦心されるなどして、記念文集をここまでまとめ上げて下さった御労に対し、教会員を代表して私は心から感謝と御礼を申し上げたいと思います。

また、右のような事情から御礼が後先になって失礼とは存じますが、お忙しい中から原稿をお寄せ下さった先生方や兄姉に対しても同様、心から御礼を申し上げます。

特に先生方は、これからさらに十年の私どもの歩みのために一層御加祷とご指導とをお願いしたいと存じます。

最後に書きたい思いが山ほどあるのに原稿を依頼されなかった、という声も二、三聞きましたし、内容的にも恐らく様々と異なった所感やまた要望もあるかと思います。そうした声をどうぞ、この記念文集を契機に、次の二号、三号を生み出し、それをより充実し生かす力として表されるよう、編集委員に代わってお詫びしつつお願い致します。

献堂十年
御名のみに栄えあれかし！

「カルバリ会」設立にあたって
～カルバリ会の使命～

関谷定夫

私たちの教会は言うまでもなくイエス・キリストの教会である。イエス・キリストを中心とし、首として仕える人々の交わりである。教会には男女老若さまざまな人々が含まれている。そのため肉体的にも精神的にも共通性を持った人々のグループが幾つかに別れ生ずるのは自然である。婦人会、青年会、少年会、少女会、学生会などそれぞれその共通の分野において独立自主の集いを持つことは良いことである。が、これらはもともとキリストにおいて一つであり、共同の責任と義務において互いに有機的なつながりを有することは忘れてはならない点である。

カルバリ会とは高校生という特殊年齢層の人々の自主的集いである。彼らは肉体的にも精神的にも漸く一人前になりかけている時期であって、左するも右するもこの時にほぼ決定するのであって、人生の最も重要な時期であり、危険な時代でもある。この時期に神を発見し、神に従うことを決心することは最も幸せなことと言わねばならない。

私はミションスクールの中学に入学したが、このことがやはり私の一生を決定したのである。はじめから私が公立の学校に学んでいたら、今は鼻持ちならぬ高慢な我利我利主義の人間になっていたろうと思う。または自分に失望して死んでしまっていたかも知れない。それが中学時代に聖書の尊さを知り、神の恐るべきこととその恵みを知っていたが故に、今日のように曲がりなりにも感謝の日々を送ることが出来ているのだと思う。

カルバリ会の使命は、未だ神を知らない人に神を紹介すること、即ち伝道することである。これが第一の使命であり、目的である。而して信仰への決意は信者同志の温かい交わりにおいて成長し、促されるものであるから、会員は悲しむ者と共に悲しみ、喜ぶ者と共に喜ぶ固い友愛の絆で結ばれていなければならない。友愛と親睦は第二の使命である。第三に信仰的訓練である。より強い、より立派な信仰を持つように互いに真剣に励み合うことである。最後に互いに祈り合うことである。これは第二の事柄と重複するようであるがこれを忘れたら会は単なる人間的なクラブ活動に終わってしまう。キリストのみたまが支配しているならば、常に祈りの精神が会の中に横溢していなければならない。伝道、友愛訓練、祈りの会として、どこまでも教会のよき肢であってほしい。

献堂三十五周年記念文集から

幼稚園と教会の思い出の数々

荘　子　聡　子

先週三月十八日の聖日は、第三十六回を重ねる幼稚園の卒園礼拝で、祝福された園児らは大空に翔く神の子として元気一杯、人生の第一歩を踏み出す顔と顔。感激もまたひとしおでした。参列のお父様やお母様、会堂いっぱいの方々の涙もとめどなく、流石に感無量でございました。牧師先生のメッセージ「さようならは言いません」。本当に胸を打たれたお言葉でした。「いつでも、この教会にいらっしゃい。…待っていますよ」と心に念じ、祈り続けたことでした。

この幼稚園こそ、教会堂も何もない現在の門の中に、日本で一番小さいバラックの可愛いい幼稚舎として生まれたものでした。手作りの小旗やテープで室内が飾られ、グラント夫人の要請で佐藤光子姉と三浦栄子先生、それに婦人会の方々がお手伝いとなりました。子供たちは近所に住む二、三人が集まり、その群れの中にまた数人が加わり、だんだん歌う声も聞こえるようになりました。その後、「三十名以上はいりません」とグラント夫人がよくおっしゃっていたことや、それにもかかわらず、多くの希望者があって、近所の幼稚園にご紹介したりした記憶を思い出しております。このようにして育てられた幼稚園から素晴らしい先輩方が卒園され、またそのお子様方をこのバプテスト幼稚園にと入園を希望しておられる様子をまのあたり見ますと、今昔の感に堪えません。

一九五二年秋、宣教師グラント先生ご夫妻は、先代の中心を少々北寄りにした、当時は原っぱ続きの「堤通り」の角（今は通町）に広々とした洋館に住まわれ、美しい婦人の洋装姿も珍しい光景でした。この宣教師館で、お手伝いとして良いご奉仕をなさった石井はる姉は、北四番丁上杉のあたりでパン屋さんをしておられ、教会では時々おいしいパンをいただいております。やがて幼稚園の奥に、立派に教会堂が出来上がり、高く掲げられた美しい十字架も輝き始めました。この十字架はグラント宣教師のご両親からの捧物とのことでございました。

初代の長崎牧師は、九州から単身赴任、半年後に一身上のご都合で辞任され、まことに残念でした。その頃の故中目源太郎兄、大西康雄兄その他多数の方々を思い起こします。その後、関谷牧師夫妻、大沼牧師夫妻、天野牧師夫妻をお迎えし、金子牧師夫妻と現在に及んでいますが、代々の牧師先生方のご奉仕とご労苦は身にしみて感謝申し上げております。これまで流れて参りました歳月の中で、大槻国彦牧師と庄司眞牧師、天野有牧師の三人の献身者を送り、神の御用に携わっていただいておりますことは深い恵みでございました。教会員と致しましても、これからよき証人として働くべきことを覚えたいと思います。また、教会設立三十五周年にふさわしく、これまでの歩みを振り返り、幻と夢を抱いて前進したいと存じます。壮年、婦人、青年、少年少女、小羊会、また幼稚園児の上に、神様の豊かな恵みがございますよう祈ります。

思い出多き中に、献堂の間際まで心を尽くしてくださった川内キャンプの米軍駐留部隊及びその家族からの特別な献品、机腰掛等のことがございます。その他、米軍の夫人たちと婦人会を月二回開催、その時の献金額はいつも大きく、そのまま全額をバプテスト教会にお捧げいただいたことも有り難いことでございました。また一九六八年十二月に教育館兼幼稚園舎が完成したことも大きな感激でございました。「愛にあって真理を語り、愛のうちに育てられて行く」（エペソ四・一五～一六）という聖句を染め抜いた手拭いが記念として配られました。

グラント先生の後任としてお出でくださったボートライト先生ご夫妻の思い出とご奉仕については、まだ記憶も新しく、懐かしく、申し上げる言葉もありません。また、お若い宣教師の先生方からいただく賜物も、それぞれ幸せなお恵みと、ここに心からお礼を申し上げます。これからの教会の建設を夢見ながら、十字架を祈りをもって見上げましょう。

試　練

～教会設立三十五周年によせて～

伊　藤　昇

私はクリスチャン・ホームに育った関係上、幼少の頃から教会に行くことは特別なことではなかったのです。クリスチャン・ホームに育った人間は、救われた感激が薄いということを聞きますが、確かにそのような一面もありました。

私は二十歳の一九五四年十一月、仙台教会の献堂式と記念大伝道集会に際してバプテスマを受け

ましたが、それは叔父・中目源太郎を通しての導きと、一方では私自身の希望した進学及び就職が出来なかった挫折感という青年初期の大きな試練の始まりということがありました。当時のグラント師、関谷牧師、大西康雄氏らはまぶしい存在でしたし、同じ仙台高校出身であった大槻国彦氏との出会いもありました。献堂式前後の数カ月は、毎月何人かがバプテスマを受けられております。私自身も何かを真に求めていたことは確かですが、果たして聖書をどれだけ理解していたかはまことに忸怩たるものがあります。いまバプテスマ式に参加する時に新たな感動を覚えるのです。

その翌年四月からは給料支払いも遅れるような小さな運輸倉庫会社に勤めながら、東北学院夜間大学へ進学しました。早く父を亡くし、また終戦前後の混乱期を母子家庭で苦労し育ててくれた母を心配させたまま亡くし、さらに大学卒業後公務員生活に入り、まもなく仙台を離れて、東京に約十年、弘前、岐阜、筑波、福島、水沢と勤務地を変え、一九八八年、はからずも仙台に戻ることが出来ました。このような関係で創立当時から教会のための働きをしておらず、それほどの思い出も書くことが出来ないことをお許しください。私の三五年の間には、仕事上の心身の悩みから、何度かこらが最後かというような場面もありましたが、そのような時にいつも思ったのは、私が生きるのではなく、神が生かしてくださっていること、心の葛藤と人格の触れ合いがなければ、困難な問題を解決することも、良い仕事をすることも出来ないということでした。キリストの十字架の苦しみを頂点とする、聖書に書かれている多くの試練に比べれば、私の試練は小さなものかも知れませんが、人知では計り知ることが出来ない神のご計画の深さを常に示され、「主の山に備えあり」という聖句にあるように、必ず解決の道を備えていただいたと確信し、感謝しています。

最後になりますが、大槻国彦氏は献堂十周年に寄せた文章の中で、仙台教会の開拓伝道から教会形成までの歴史分析からの問題点として「教職と一般信徒の共同労作の欠如」を指摘しています。創設期はやむを得ないことであったと思いますし、レイマンの応答の欠如は永遠の課題かも知れませんが、希望をもって課題に取り組んで行きたいと思います。

…患難をも喜んでいる。なぜなら、患難は忍耐を生み出し、忍耐は練達を生み出し、練達は希望を生み出すことを知っているからである。そして、希望は失望に終わることはない。なぜなら、わたしたちに賜っている聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからである。（ローマ人への手紙五章五節～）

何はともあれ、わたしたちの畑を耕さねばなりません。（ヴォルテール）

大宮伝道所・オデール師夫妻を囲んで（95年2月19日）

資料・大富伝道所開設経過

▽八八年日本バプテスト宣教団、市内通町の宣教師館（ボートライト師宅）を売却、市内広瀬町とパルタウン大富に宣教師館を新築。同時に大富団地入口に土地三百坪を購入。

▼八九年四月ウッズ師一家、市内川平からパルタウン大富の新宣教師館に移転。仙台北教会に転会、同教会吉岡伝道所での奉仕が始まる。▽十二月十五日ウッズ師から大富に伝道所を設けたいとの希望と同時に「教会が伝道所を開設するなら、大富の宣教団所有の土地の内百坪を購入価格で譲っても良い」と宣教団理事会で決議されているので、母教会として打診があり、同日の執事会で同師のビジョンや願いを直接教会員に訴えて頂き、その上で検討することとした。

▼九〇年一月七日ウッズ師、主日礼拝説教「向こう岸に渡ろう」。礼拝後、執事会開催。▽一月十四日週報の牧会通信で執事会で聞いたウッズ師の願いを紹介。▽二月十八日執事会名で「大富伝道についてQ&A」を発表。一～四月にかけて執事らの大富伝道についての個人的な感想や意見を牧会通信で紹介。▽三月十一日定期（予算）総会開催。大富伝道を議題とせず、懇談に止める。▽五月十三日定期（報告）総会開催。大富伝道について積極的な姿勢で取り組むことを確認。取り敢えずウッズ師の休暇中、既に同師宅で開かれている家庭集会を仙台教会の責任で継続することを決定。伝道所献金を呼び掛ける。▽六月五日執事会で伊東信吉、公美子夫妻を大富集会責任者に選任。毎月二回（第二、四金曜日）の集会を欠かさず継続。教会から平均十～十五人が参加。▽十月二十一日大富伝道について考える合同例会開催。▽十二月九日大富地区にクリスマス集会の案内チラシと聖書通信講座案内のトラクトを戸別配布。クリスマス集会は子供を含めて出席者五十人を数えた。▽三十日臨時執事会で新年度予算総会で大富伝道所設置に向けて、具体的な提案と準備を行うことを確認。執事会では九月四日、十月二日、十二月二日、さらにその後、一月六日、二月三日、二月二十六日に定例執事会、拡大執事会、新旧執事会を開き、大富伝道所設置について、その段取りや準備について協議した。

▼九一年三月十日定期（予算）総会開催。大富伝道設置を決議。但し、土地取得や礼拝開始、連盟への申請の内容、時期などは、ウッズ師の帰国を待って協議することとした。▽七月十日ウッズ師一家、帰任途上、トレバー兄発病のため、一時帰国を見合わせざるを得ないとの報告が入る。▽九月二十八日十月十日予定の伝道所予定地での音楽伝道集会と芋煮会の案内チラシを一斉戸別配布。しかし、当日、雨天中止となる。▽十月六日大富伝道の今後を取り組みを議題に公開拡大執事会を開催。▽十一月十日大富伝道所開設の段取りと建築計画について全員協議会を開催。▽十二月二十日大富でクリスマス集会。ウッズ師からのメッセージとトレバー兄の近況を伝えるビデオを鑑賞。同ビデオは二十二日、教会の第二主日礼拝でもプログラムに加えられ、大きな感銘を与えた。

▼九二年一月十二日予算総会準備のための拡大執事会で伝道所開設タイムスケジュールを協議。▽一月十九日拡大執事会での協議を基に各会執事会で意見交換。▽二月五日伊東信吉兄が私費で渡米。デンバーのトレバー兄を見舞い、ウッズ師らを励ます。この間、手紙やファックスでウッズ師と教会との交信が続く。▽二十二日新旧合同執事会で総会に提案する大富伝道所開設のタイムスケジュールと集会の持ち方について執事会案を承認。▽二十三日トレバー・ウッズ兄召天。▽三月八日定期（予算）総会開催。四月から日曜日午後の礼拝を行うという執事会案に対して、午前中の主日礼拝をとの意見が半数近くあり、議長裁定で本議案は執事会へ差し戻しとなる。▽七月十二日臨時総会開催。大富伝道所での主日礼拝を最初から日曜日午前中に行うこと、従って教会は伝道所のための教会員を派遣する、派遣希望者は七月十二日から八月十五日までに金子牧師に申し出ること、八月十六日派遣を申し出た人たちと拡大執事会で協議すること、次回臨時総会で今後のスケジュールを確認することを承認、決定した。▽八月十六日拡大執事会開催。▽九月十三日臨時総会開催。九名の会員と五名の家族の派遣を承認。十月四日から主日礼拝を始め、正式に仙台バプテスト教会大富伝道所を発足させること、ウッズ師を伝道担当牧師として招聘することを決議。会堂建築に至るタイムスケジュール、教会と伝道所の関係について確認事項を確認。伝道所に派遣される執事二名の後任者を選出。▽二十七日派遣式▽十月四日大富伝道所主日礼拝開始。

▼九三年五月一日会堂着工▽五月九日定礎式▽八月二十二日伊東信吉兄仙台教会で説教「教会をたてる」▽二十八日建築仕様確認▽二十九日バディ・ウッズ師仙台教会で説教「悲しみとなぐさめ」▽九月八日小野建業から建て物引き渡し▽九日引っ越し。物品搬入▽十二日献堂式の案内チラシ戸別配布（千五百枚）▽二十三日大富伝道所献堂式

後、毎年続けられて今日に至っている（当初は教会員有志によるボランティア活動だったが、93年度から教会プログラムとなる）。「キリスト教学校を覚える日」を設定（10月）。爾後、毎年10月第4主日に特別礼拝を守る。

【1988年】 英語礼拝（主日夕拝）を仙台教会のミニストリーとして開始（4月）。ウッズ師一家、大富に転居。1年間の検討を経て、教会学校Ⅱ（中高科以上）の分級を礼拝前に変更。

【1989年】 福岡での「宣教100周年記念大会」に仙台教会から10名参加（8月）。B・オデール宣教師夫妻来任、協力牧師（学生伝道担当）就任（9月）。

【1990年】 東京連合北地区の青年たちを迎えて「ユース・フェスティバル」開催（7月）。郡山に青年伝道隊派遣。爾後、毎年夏に伝道隊を他教会に派遣、91年からは劇に取り組む（8月）。韓国ソウルでのBWA大会に金子牧師夫妻、一瀬千恵子、西村光子両姉、竹之内裕文兄らが参加（8月）。

【1991年】 連盟第43回総会で金子牧師が理事長（同年4月から95年3月まで2期4年）に選出される（2月）。定期（予算）総会で大富伝道所設置を決議する（3月）。

【1991年】 青年伝道隊、カルバリ教会でのユース・ラリーに18名が参加、ヨハネ9章を劇化上演（8月）。

【1992年】 週間教会学校の嬰児科を開設する（5月）。15名の青年伝道隊、郡山伝道所で奉仕（8月）。劇「ともしび」上演。この年から石垣氏の指導で本格的に劇に取り組む。茂庭荘で開かれた東北連合信徒大会で「ともしび」上演（9月）。ウッズ師一家を含め12名が派遣され、大富伝道所が発足（10月）。

【1993年】 小林孝男協力牧師就任式（7月）。青年伝道隊（20名）、山形教会で奉仕、劇「神の道化師」公演（8月）。大富伝道所会堂完成、献堂式挙行（9月）。臨時総会で草島兄の神学部推薦と94年度から執事定員6名を8名に増員することを決定（11月）。

【1994年】 天城山荘で開かれた信徒大会でも「神の道化師」を上演（1月）。「オリーブの会」が発足（3月）。草島豊兄を西南学院大学神学部に送る（4月）。青年伝道隊・八戸教会へ。劇「空に歌う小鳥のように」（8月）。佐原玲子姉を西南学院大学神学部専攻科に推薦決定（12月）。

【1995年】 定期予算総会で95年4月1日からリネー・オデール師を教育主事として招聘することを決定（3月）。幼稚園設立40周年記念講演会（講演天野文子前園長・3月25日）。教会設立40周年記念礼拝（説教・天野五郎牧師）、感謝午餐会（3月25日）。

●教会年間主題●

84年「信徒の交わり」ヨハネ16:5

85年「キリストを宣べ伝える」詩篇96:1～2

86年「聖書に聞く」詩篇119:105

87年「礼拝生活の充実」ローマ12:1

88年「主の祈りを生きる」ルカ11:1

89年「信仰を土台として」ヘブル12:2

90年「主の手足となる」イザヤ6:8

91年「喜びをもって主に仕える」詩篇100:2

92年「主の恵みを分かち合う」使徒行伝20:35

93年「互いの心、燃えて」ルカ24:32

94年「『外』で主に出会う」マタイ25:31～40

95年「捧げよう、それぞれの賜物を」ローマ12:4～5

仙台バプテスト教会の沿革

[教会組織以前]

【1951年】 日本バプテスト連盟年次総会で東北の拠点として仙台開拓伝道を決議。

【1952年】 W・C・グラント宣教師夫妻来仙、開拓伝道に着手（秋）。

【1953年】 長崎直得牧師、呉教会から着任（→54年3月）。

【1954年】 現在地で幼稚園開設（4月）。関谷定夫牧師、福岡から着任（7月→57年3月）。本会堂完成、献堂式挙行（11月7日）。

[教会組織以後]

【1955年】 教会組織、「日本バプテスト仙台基督教会」設立（3月25日・会員39名）。

【1957年】 吉岡伝道所と幼稚園開設（2月）。新卒の大沼上牧師着任（4月→63年3月）。

【1960年】 C・S・ボートライト宣教師夫妻来任（7月→89年8月）。

【1963年】 天野五郎牧師、福島教会から着任（7月→84年6月）。

【1965年】 南光台に土地200坪入手（9月）。

【1966年】 吉岡伝道所に新卒の瀬戸義毅牧師着任（4月→68年3月）。南光台伝道所開設、同会堂献堂式（7月）

【1967年】 ラルフ・本城宣教師来任（8月南光台伝道所→69年）。教育館兼幼稚園舎増改築落成式（12月）

【1971年】 T・O・カックス宣教師夫妻来任（7月→74年3月）。

【1972年】 新卒の小桜俊治牧師、南光台伝道所牧師として着任（4月→76年2月）。臨時総会で山形伝道所の母教会となることを決議（5月）。

【1973年】 山形伝道所に斉藤英哉牧師着任（1月→76年3月） 牧師館竣工（7月）。

【1976年】 庄司眞副牧師（南光台伝道所担当）就任（4月）。

【1979年】 連盟年次総会で仙台に全国支援拠点開拓伝道を実施することを決定（8月）。

【1980年】 野口直樹牧師、北九州・富野教会から仙台北伝道所牧師として着任（1月）。

【1981年】 山形伝道所（調弘道牧師）、教会組織（4月）。7月、T・R・ウッズ宣教師夫妻、アラム宣教師夫妻（南光台伝道所→85年7月）来任。

【1983年】 南光台伝道所（庄司眞牧師）、教会組織（5月）。

【1984年】 仙台北伝道所（野口直樹牧師）、教会組織（4月）。

【1984年】 献道30周年記念礼拝及び特別伝道集会（講師・大沼上先生・11月）。

【1985年】 金子純雄牧師、東京から着任（1月）。ウッズ協力牧師就任（8月→88年3月）。春からサーチライト・クラブを開始、オデール師に引き継がれて今日に至る。SBD（仙台地区バプテスト伝道協議会）が発足（9月）。

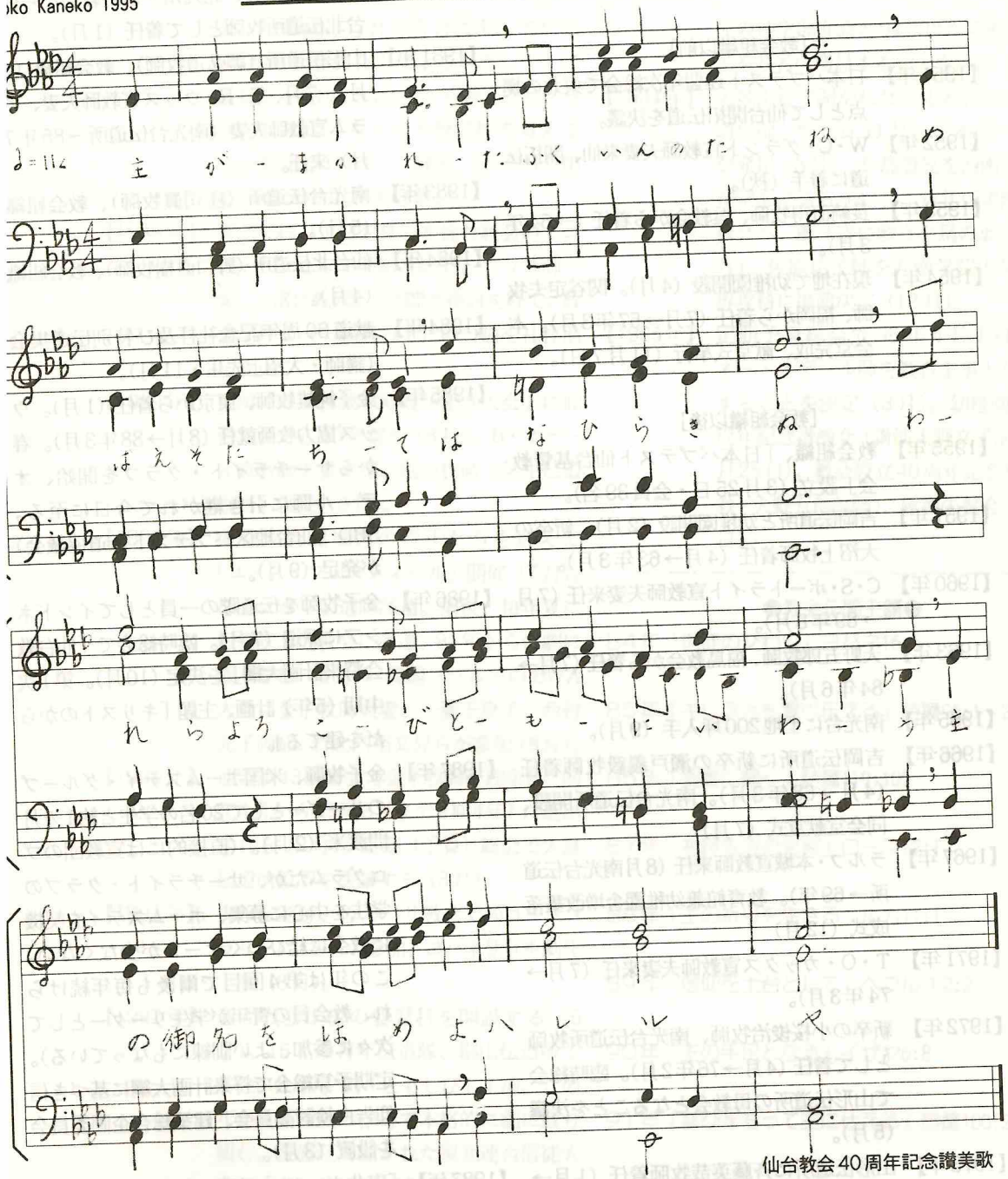
【1986年】 金子牧師を伝道隊の一員としてインドネシアに派遣（7月）。臨時総会で「仙台教会将来計画大綱」を決定（10月）。第1次中期（5年）計画、主題「キリストのからだを建てる」。

【1987年】 金子牧師、米国ホームステイ・グループのリーダーとして20名の学生と約1カ月間渡米（2月）。（直接的には宣教団のプログラムだが、サーチライト・クラブの学生を中心に募集、ホームステイを契機に教会に結びつくケースが少なくない。この年は第4回目で爾後も毎年続けられ、教会員の青年が学生リーダーとして次々に参加、よい訓練にもなっている）。定期予算総会で将来計画大綱に基づき信仰告白検討委員会、建築総合企画委員会を設置（3月）。

【1987年】 「東北ヴィジョン'87」特別集会（コロラド州のバプテスト教会からのティームを迎える。5月）。L・L・ミラー宣教師夫妻来任、教育担当協力牧師として就任（7月→92／3）。障害児とその家族を対象としたサマースクールを開催（8月）。爾→

主の御名を伝えん　ハレルヤ

ko Kaneko 1995　　Rika Yokoyama 1995



仙台教会40周年記念讃美歌

1

主がまかれた　福音の種
芽生え育ちて　花開きぬ
われら喜び　共に祝う
主の御名をほめよ　ハレルヤ

2

主に選ばれて　ここに集い
一つとされて　わざにはげみ
われら導かれ　共に育つ
主の御名を称えん　ハレルヤ

3

としつき重ねて　今日の日をぞ
老いも若きも　感謝しつつ
こころ新たに　ふるいたちて
主の御名を伝えん　ハレルヤ